

# 埋蔵文化財発掘調査概報

1975

松山市教育委員会

## 正 誤 表

誤 正

巻頭図版1の説明 福音寺遺跡 竹の下地区出土遺物・スキ

〃 2 〃 福音寺遺跡 筋造Bと地区発掘風景

5頁 図表 溫度……………深度

54頁 第25図 赤破線は……………不要

90頁 第40図 印刷もれ……………遺跡発掘状況旗立B区

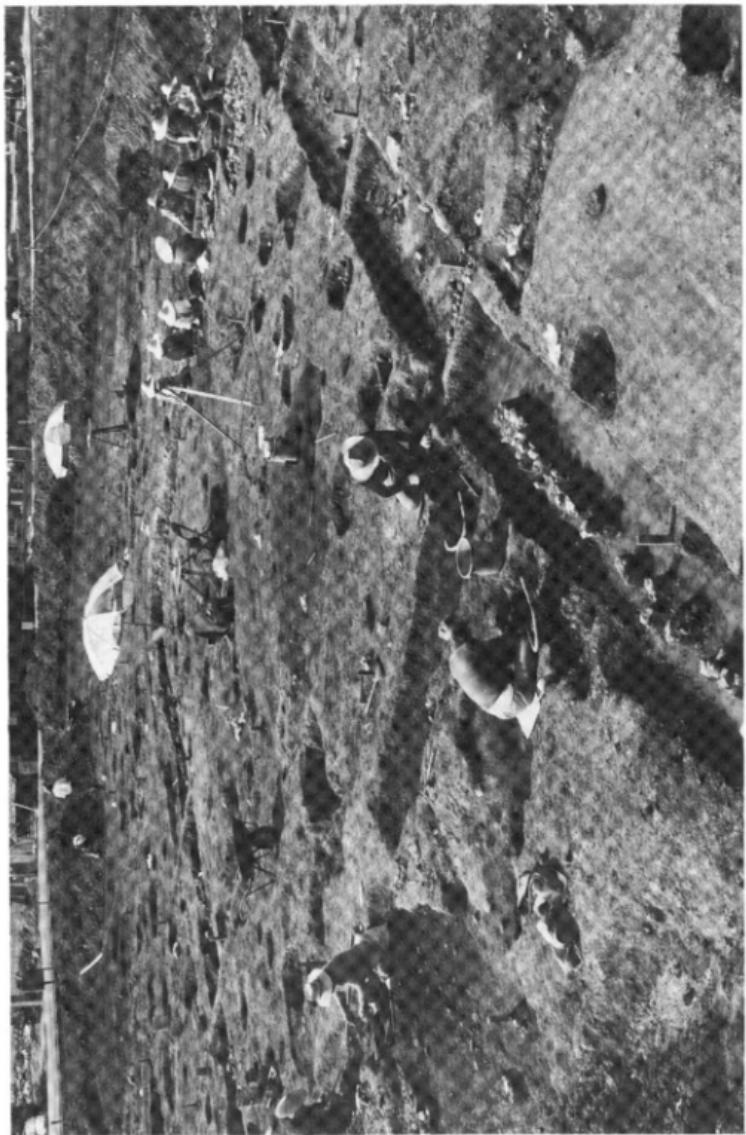
国道バイパス  
埋蔵文化財発掘調査概報  
枝松・福音寺・星ノ岡・北久米

1975

松山市教育委員会



T287



## 序 文

松山市は、道後平野の北西部に位置し、南には四国山地が走り、西と北は瀬戸内海に面している。東方の山地から西に向って流れる重信川と東北から平野を斜めに横切って流れる石手川はこの平野を生成する二大動脈であります。これらの川は氾濫原を作り、平野をうるおしており古代から農耕文化が栄えたところであります。なかでも市南東部には前方後円古墳やその他の遺跡群が存在しております、かねてから注目されていたところであります。

一方市街地の交通渋滞は甚だしく、国道11号線バイパス線の建設は各方面から待望されております。当委員会では、この建設に先立って埋蔵文化財保護の立場から事前協議を行い道路予定地内の遺跡について発掘調査を実施しました。多くの困難を克服しての調査ではありましたが、四国では初めての広大な面積の発掘調査を実施し、数多くの生活跡や生産跡が発堀され、また全国的にみても例の少ない5世紀の木器や木具などを出土しております。

昭和48年と49年に調査された古照遺跡の巨大な生産遺構や、今後もバイパス建設にともない継続して発掘される遺跡群と共に、古代がどのような姿を保ち人々が生活したかを究明することができるであろうと期待されております。

終りにあたり事前調査について全面的なご理解とご協力をいたしました建設省と調査にあたり関係各位の示されたご協力に対し心から謝意を申し述べます。

昭和50年3月31日

松山市教育長 関谷勝良

## 凡　　例

1. 本書は、国道33号線・松山南道路と国道11号線・松山東道路新設工事に伴い、建設省四国地方建設局の委託を受けて、松山市教育委員会が昭和49年1月から昭和50年3月までの間に実施した発掘調査概報である。
2. 本調査は中村町1丁目から北久米町にいたる2.56kmの道路建設予定地内の遺跡であるが、まだ調査に着手していない遺跡も残っている。
3. 本書の執筆は次の各氏による。

大山正風（松山市文化財専門委員）	黒崎　直（奈良国立文化財研究所技官）
森　光晴（松山市教育委員会指導主事）	
4. 本書の作成にあたっては、上記の執筆者のほか木製品の一部の実測などについては奈良国立文化財研究所の協力を得た。  
遺構、遺物の実測、製図には山本忠尚、岩本正二、池田学、松村淳、沖野新一、仙波五月、仙波千春の協力を得た。  
遺跡、遺物の写真撮影は岸郁男、西尾幸則が担当した。
5. 今回の発掘調査の出土遺物は、古照資料館に一部展示公開している。

# 目 次

## はじめに

I	自然的環境及び歴史的環境	1
1	自然的環境	1
2	歴史的環境	2
II	調査の方法と経過	4
III	昭和48年度1～3月、昭和49年度における発掘調査の概況	
1	福音寺534番地2の塚の調査	5
2	星ノ岡遺跡群の調査	6
3	福音寺遺跡	7
4	枝松遺跡	10
5	星ノ岡遺跡	12
6	北久米遺跡	14
VI	各地区出土遺物概況	
1	福音寺遺跡（竹ノ下地区）	16
(1)	木 製 品	17
農耕具・工具類・容器類・弓・その他の木製品		
(2)	土師式土器	23
(3)	須 惣 器	24
(4)	弥生式土器	25
2	星ノ岡遺跡	26
3	北久米遺跡	27

## 図版目次

図版 1 図	竹の下発掘区全景	図版 35 図	遺物の出土状況…弥生式土器
2 図	〃 発掘全景…旧堤防	36 図	〃 出土状況…土師式土器と須恵器
3 図	遺構と出土状況…杭列と転用材	37 図	〃 出土状況…土師式土器
4 図	遺物の出土状況…木鎧の出土	38 図	遺構の発掘状況…S面セクション
5 図	〃 出土状況…杭列と転用材	39 図	〃 発掘状況…旗立地区 A 区、B 区
6 図	〃 出土状況…横材と杭列	40 図	〃 発掘状況…旗立 B 区
7 図	〃 出土状況…転用材の穴の利用	41 図	〃 発掘状況…〃 A 区 PD-1
8 図	〃 出土状況…転用材の穴	42 図	遺物の出土状況…〃 A 区 PD-1
9 図	〃 出土状況…補助材	43 図	遺構の発掘状況…〃 PD-5
10 図	〃 出土状況…補助材	44 図	〃 発掘状況…〃 PD-5 完成
11 図	〃 出土状況…転用材	45 図	〃 発掘状況…〃 B 区 PD-4
12 図	〃 出土状況…未完成の木工具	46 図	〃 発掘状況…〃 B 区 PD-1
13 図	〃 出土状況…〃	47 図	〃 発掘状況…〃 B 区 PD-3
14 図	〃 出土状況…鍛の破損品	48 図	〃 発掘状況…〃 C 区 PD-1
15 図	〃 出土状況…農耕具	49 図	〃 発掘状況…〃 C 区 PD-1-2-3
16 図	〃 出土状況…破口状の農耕具	50 図	遺物の出土状況…旗立 C 区 PD-1 の遺物
17 図	〃 出土状況…木工具	51 図	遺構の発掘状況…〃 PD-1
18 図	〃 出土状況…加工材と板材	52 図	遺物の出土状況…旗立 B 区 PD-5 の砥石
19 図	〃 出土状況…鍛の柄	53 図	〃 出土状況…〃 石包丁
20 図	〃 出土状況…かき棒	54 図	遺構の発掘状況…筋違地区全景
21 図	〃 出土状況…鋤	55 図	〃 発掘状況…〃 A 区 PD-4
22 図	〃 出土状況…鋤	56 図	〃 発掘状況…〃 A 区 PD-8
23 図	〃 出土状況…鋤	57 図	遺物の出土状況…〃
24 図	〃 出土状況…火器の一部	58 図	〃 出土状況…〃
25 図	〃 出土状況…盆の一部	59 図	〃 出土状況…〃 有孔滑石
26 図	〃 出土状況…盆の一部	60 図	遺構の発掘状況…筋違 B 区 PD-1
27 図	〃 出土状況…鍔ノ子	61 図	〃 発掘状況…〃 全景
28 図	〃 出土状況…加工台？	62 図	〃 発掘状況…〃 発掘前の全景
29 図	〃 出土状況…琴の一部？	63 図	〃 発掘状況…〃 B 区 PD-1、丸印
30 図	〃 出土状況…壇輪にかかった土師式土器	64 図	〃 発掘状況…〃 D 溝を南より
31 図	〃 出土状況…竹細工具	65 図	〃 発掘状況…〃 備立柱式建物跡上層
32 図	〃 出土状況…堅櫛	66 図	〃 発掘状況…〃 PD-5
33 図	〃 出土状況…半艶されたヒヨウタン	67 図	遺物の出土状況…〃 青磁
34 図	〃 出土状況…土師式土器	68 図	〃 出土状況…〃 拡張区鉄器

図版69図	遺構の発掘状況…墓邊B区木棺直葬墓	図版92図	遺物の出土状況…北下B区PD-2
70図	遺物の出土状況…	93図	" 出土状況… " PD-1
71図	" 出土状況… "	94図	" 出土状況… " PD-1
72図	遺構の発掘状況…	95図	" 出土状況… " PD-2
73図	" 発掘状況… "	96図	遺構の発掘状況… A区PD-1
74図	遺物の出土状況…	97図	遺物の出土状況… " 僧
75図	" 出土状況… "	98図	遺構の発掘状況…奥立A区と北下地区
76図	遺構の発掘状況…	99図	" 発掘状況… 北下地区と常堀地区
77図	" 発掘状況… "	100図	" 発掘状況… 常堀B区
78図	遺物の出土状況…	101図	" 発掘状況… 常堀C区の推立柱式建物跡
79図	遺構の発掘状況…	102図	" 発掘状況… 常堀C区よりC区を見る
80図	" 保存状況… "	103図	" 発掘状況… " 推立柱式建物跡
81図	" 発掘状況… "	104図	遺物の出土状況… " PD-1
82図	" 保存状況… "	105図	" 出土状況… 常堀C区pit1
83図	遺構の発掘状況…北下地区全景	106図	遺構の発掘状況… " 墓立柱式建物跡
84図	" 発掘状況… 北下地区PD-5	107図	遺物の出土状況… 常堀B区の瓦器
85図	" 発掘状況… " PD-1	108図	" 出土状況… 乃万裏の梅花鏡
86図	" 発掘状況… "	109図	遺構の発掘状況… 農免地区全景
87図	" 発掘状況… " PD-2	110図	遺物の出土状況… 農免地区的出土遺物
88図	" 発掘状況… 北下C区全景	111図	遺構の発掘状況… 枝松6丁目の墳丘墓
89図	遺物の出土状況… " C区長頸壺	112図	" 発掘状況… 農免地区、溝状遺構
90図	遺構の発掘状況… " PD-5の土壙	113図	" 発掘状況… 枝松6丁目
91図	遺物の出土状況… " 須恵器	114図	" 発掘状況… 枝松(6丁目)区

## 挿 図 目 次

第1図 地区区分図	30
第2図 北久米遺跡常堰B区グリット・1・2・3・4	31
第3図 星ノ岡遺跡旗立B・C区全測図	32
第4図 星ノ岡遺跡旗立B区住居址P D - 1・P D - 2	33
第5図 星ノ岡遺跡旗立B区住居址P D - 4・P D - 5	34
第6図 星ノ岡遺跡旗立C区住居址P D - 1・2・3	35
第7図 福音寺遺跡筋違A区全測図	36
第8図 福音寺遺跡筋違B区全測図	37
第9図 福音寺遺跡筋違A区住居址P D - 4・P D - 8	38
第10図 福音寺遺跡筋違B区掘立柱式建物1、住居址P D - 1	39
第11図 福音寺遺跡筋違B区住居址P D - 4・周溝部分図	40
第12図 福音寺遺跡筋違B区住居址P D - 5・火葬塚・土塙墓	41
第13図 福音寺遺跡筋違B区A溝周辺	42
第14図 足ノ岡遺跡旗立B区集石遺構、星ノ岡遺跡北下A区住居址P D - 3	43
第15図 星ノ岡遺跡北下B区堀立柱式建物-2、住居址P D - 1、P D - 2	44
第16図 北久米遺跡常堰A区全測図	45
第17図 北久米遺跡常堰B区全測図	46
第18図 北久米遺跡常堰B区住居址P D - 1・掘立柱式建物-1	47
第19図 北久米遺跡常堰B区土塙平面図・土塙断面図	48
第20図 福音寺遺跡竹ノ下全測図・断面図	49
第21図 福音寺遺跡竹ノ下出土状況1・2	50
第22図 福音寺遺跡竹ノ下出土状況3・4	51
第23図 福音寺遺跡534番地2の塚	52
第24図 北久米遺跡乃万の裏住居址P D - 1・枝松遺跡5丁目全測図	53
第25図 枝松遺跡5丁目溝状造構・6丁目全測図	54
第26図 枝松遺跡6丁目住居址P D - 1・掘立柱式建物-1	55
第27図 枝松遺跡6丁目掘立柱式建物3・9	56
第28図 土師器実測図1	57
第29図 土師器実測図2	58
第30図 土師器実測図3	59
第31図 土師器実測図4	60
第32図 土師器実測図5	61
第33図 土師器実測図6（磁器）	62

第34図 土師器実測図 7 .....	63
第35図 土師器実測図 8 .....	64
第36図 土師器実測図 9 .....	65
第37図 土師器実測図10 .....	66
第38図 手づくね土器 実測図 1 .....	67
第39図 手づくね土器 実測図 2 .....	68
第40図 手づくね土器 実測図 3 .....	69
第41図 手づくね土器 実測図 4・車輪石 .....	70
第42図 須恵器実測図 1 .....	71
第43図 須恵器実測図 2 .....	72
第44図 須恵器実測図 3 .....	73
第45図 弥生式土器実測図 1 .....	74
第46図 弥生式土器実測図 2 .....	75
第47図 筋達A・B区上器実測図 .....	76
第48図 旗立地区・北下B区土器実測図 .....	77
第49図 常堰・乃万ノ裏土器実測図 .....	78
第50図 各地区出土石器実測図 1 .....	79
第51図 各地区出土石器実測図 2 .....	80
第52図 各地区出土石器実測図 3 .....	81

## はじめに

国道33号線・松山南道路と国道11号線・松山東道路は勝山町1丁目から温泉郡重信町西岡で国道11号線に合流する延長11.5kmに及ぶ路線である。このバイパスの松山市内における延長は6.9kmになる。この道路の建設工事は、昭和47年から着手されており年次計画で松山市側から建設されることになっている。

松山市教育委員会は、昭和48年に建設省松山工事事務所から協議を受け、中村町1丁目から北久米町に至る間の2.56kmの道路敷内での遺跡について発掘調査を委託されて実施したものである。

### 調査組織

松山市教育委員会	事務局長・教育長	関 谷 勝 良
	次長	中 村 安 定
	社会教育課長	谷 川 敏 一
	補佐	野 間 清 典
	主幹補	岸 郁 男
	主任	仙 波 弘
		矢 野 実
		西 尾 幸 則
調査担当者	主任	森 光 晴
		大 山 正 風
		長 井 数 秋

## I 自然的環境及び歴史的環境

### 1 自然的環境

四国山地を南東に、高龜山地を北東にあおぎ、西方に瀬戸内海をのぞむ松山平野は、古く伊予川(重信川)と石手川の二大河川の活動により形成された沖積平野である。だがこれらの河川は、共に水流は速く、平時は水量は少なく、河床をあらわし河原を垦している。だが一度雨をみると流れは、川岸をうがちしばしば泥濘を繰返している。いわゆる荒川である。

現在では、高龜山地に水源を発する石手川は、溝辺付近で西流し、下流の出合で、四国山地の雲峰石鎧山に水源を発した重信川と合流して瀬戸内海(伊予灘)に流入しているが、古く

は、共に独立河川として、開析谷を形成しながら山麓地帯では扇状地を形成し、やがてはこの扇状地をうがち、下流に沖積地を形成していった。

これら二大河川の旧河道を、古地图より考察するならば、共に流路を幾度か変更したものと考えられる。石手川では岩堰の妨げにより、右岸に、また左岸にと流路を変えて西流しては、開析活動をくり返した後、江戸時代に足立重信による大規模工事のために、岩堰の岩盤をうがち今日の石手川となる。また重信川も同様に流路を幾度か変更し現在にいたる。

## 2 歴史的環境

開析活動を繰り返し現在にいたったこれらの活動は、松山平野に舌状台地や川岸段丘を形成したが、この形成地域は、古代人の安住の地として古くより広く活用されたことであろう。

これらの地域における古代人の生活の址は日々と調査が進められ、松山平野の金張がやがては解明されるであろう。この松山平野のキーポインともいわれる地域がすなわち、松山東道路工事予定地内に集中している。予定地は、自然環境でふれた二大河川にはさまれた地域で、この間に川付川、堀越川、小野川、内川がそれぞれ50m～150m間かくで西流し天山独立丘陵付近一部は合流し石手川と重信川にそいでいる。この小河川はまた数条の支流を合せ流れているところから、諸河川の開析活動により洪積台地は縱断され起伏の豊かな地形となり、これら小規模な洪積台地に残された平坦面には、大小さまざまの集落が形成されたものと推察される。さらに台地の起伏に加えて、平野部に転在する独立丘陵も、工事予定周辺部でも、かつては、素鷲小学校付近と祇園町素鷲神社付近に小丘陵があり、またその前面の指呼の内に土窯山、天山、東山、星ノ岡と続く。

この地域こそかつては、自然の恵み豊かな安住の地と見たのであろう。現在において知られる舌状台地の遺跡は実に多く、予定地周辺地域の遺跡は北より(石手川南側地域)糸原、東本、中村、祇園、小坂、釜口、末曉、天山、星ノ岡、福音寺、高畑、北久米、来住、鷹ノ子と遺跡群が集中しており、弥生～古墳～歴史時代の埋蔵文化財の発見でもある。

またこの台地を取りまく、周辺部の丘陵地帯には、低位置の生活舞台に対して、聖域としての墳墓や、祭祀的な行事を行なった遺跡が群集している。ちなみに列挙するならば、お茶屋台、東野、畠寺、山田池、芝ヶ崎、天山、東山、星ノ岡、大池、今吉、かいなご等古墳時代後期の群集墳があり、また平野部にも、前方後円墳として経石山(県指定)、三島神社、双子山、波賀部神社がある。これをとりまき、小規模の円墳が、現在もなお転在している。なおまた、廃寺跡も多く、中村廃寺、反降寺廃寺、中ノ子廃寺跡が工事予定地より僅かに離れて点在している。



## II 調査の方法と経過

松山市中村町～農免道路に至る間の遺跡確認調査を、建設省と立会い調査を行ない、発掘調査可能な場所と地表面に現れている遺物の採集を行なった。

### (1) 確認調査の内容

- イ. 対称地全域を予備調査として関係機関と共に踏査。
- ロ. 遺物の散布地点については、ボーリング調査を $1 \times 1$ mで実施した。散布状態とボーリング調査の結果により、遺構の確認を深めるため、トレンチ調査を実施した。

### (2) トレンチ掘りによる遺構の確認

前項イ・ロの実施により、トレンチを、工事予定地敷地内の両端に巾60×深80cm(深度は遺構との関係により上下した)の溝をいれ、その溝に見られた土質の変化する状態を通して、遺構が存在するか否かを調査検討を行なった。なおトレンチ掘りは、1月より3月まで実施し4月よりの発掘調査への手がかりとした。以上の調査により、第1図に示す地域は遺構に発展する地区であると断定することができた。これらの地区にそれぞれ区画名を付し、発掘実施に至るグリット構成を行なった。(第2図1、2、3、4)

- イ. 中村町1丁目 2丁目 弥生中期後半から後期にかけての集落址
  - ロ. 小坂町2丁目 3丁目 弥生後期から古墳時代の集落と生産遺構の可能性がある。
  - ハ. 枝松町5丁目 6丁目 古墳時代の集落址(特に掘立柱式建物址)
  - 二. 福音寺町 河岸段丘上に古墳時代の集落址、川付川に護岸設備の生産遺構が考えられ、特に浮遊遺物が多い地区
  - ホ. 星ノ岡町 弥生時代後期か終末期の集落址、古墳時代の集落と墓
  - ヘ. 北久米町 弥生時代の終末期の遺構と古墳時代の集落址
  - ト. その他 道路工事予定地内に点在する塚と無縫墓(古代-近世)
- グリットは、 $5 \times 5$ mとして構成したが、表土の排除後に区画しポイント打ちを行なった。表土の排除は、トレンチ調査により確認した層序により、ハンドドーザーを使用して効率を高めた。

トレンチ調査と平行して一部塚の調査を実施した。トレンチ調査の検討を行なう一方、それぞれの遺跡内に発掘実施に当っての区画を行なった。また区画名はできる限り小字名(ほのぎ)をもって発掘区の区名とした。

#### イ 発掘実施にあたっての区画名

福音寺遺跡 中心杭 A619~23を竹ノ下地区 A624~29を川付地区  
A633~38を筋道(すじかい)地区

星ノ岡遺跡 中心杭 A638~43を旗立地区、A645~52を北下(きたさがり)地区。

北久米遺跡 中心杭 A653~65を常堰地区 A666~71を乃万の裏地区

中心杭 A683~85を農免地区

枝松(五六) 遺跡 中心杭 A61~5を5丁目地区 A67~13を6丁目地区

④ 発掘に要した日数

旗立地区延30日、筋通(すじかい)地区延73日、北下地区延46日、常堰地区延39日、乃万の裏地区延25日、農免地区延20日、竹ノ下地区延33日、枝松5・6丁目地区延45日を要しての発掘であった。その他に確認調査のためのトレント調査と一部塚の調査を実施したが、その延日数は55日を要しての調査であった。

### III 昭和48年度1月~3月、昭和49年度における発掘調査の概況

#### 1. 福音寺534番地2の塚の調査

調査範囲は約9×13mの117m<sup>2</sup>の調査を実施した。墳墓は所有者により祀られてはいるが、葬られている人物については不明であり、また墓碑をもたない。図第51図の2に示すごとく、河原石による配石をほどこしただけの墳墓で、墓地一面にリュウゼツランが繁茂しており墓地内にカエデとサンショウの木があった。

調査は除草を行ない、配石の測量後発掘を行ない、深度20cmで隅丸方形、楕円形のピット7基を発見した。またBMより7m東32度南の位置に1基の同様の土塙墓を発見した。

番号	長径	短径	温度	土軸方向	出土遺物
1	50~底	40~底	20	北45° 東	なし
2	74~67	57~50	30	北35° 東	漆器片、伊万里1
3	53~37	50~37	46	北31° 東	寛永通宝
4	89~68	68~53	48	北35° 東	伊万里2点、寛永通宝
5	48~40	40~33	22	北30° 東	寛永通宝、伊万里
6	67~63	48~38	42	北45° 東	寛永通宝
7	60~50	42~30	40	北30° 東	なし
8	47~39	42~33	30	東	なし

土塙は2種に大別できる、剛葬品を有するものと、持たないものまた掘方が、30cm以内のものと、30cm以上とに分けられる。

山土遺物は、古寛永通宝と伊万里焼きの磁器を出土することから、江戸時代の中頃以後と考えられる。筒全造構に共通するものとしては、木質部を1部確認しているが、木棺とは考えられない。

上塙の規模と埋葬方法からして、幼児の墳墓と思われる。

## 2. 星ノ岡遺跡群の調査。 (松山東道路実測平面図 8-2・8-3図)

松山東道路実測平血図 8-2 及び 8-3 図の 1 部が星ノ岡遺跡群と呼称している地域に位置している。本遺跡の調査にあたり、広範囲であるために、前述のトレンチ調査にもとづきそれぞれ小字名を取り、A638~43 を旗立地区、A645~52 を北下（きたさがり）地区としたが、更に発掘実施にあたっては、旗立地区を A・B・C・北下地区を A・B 区に細分割して調査を実施した。グリッドは  $5 \times 5$  m の主軸を N 値に位置しておいた。

### 旗立地区

A 区においては、竪穴式住居を 3 基発見したが、P D 1 は方形住居であった。主軸方向は N 15° W に造り出し部を有し、床面は地山面を平坦に調整し利用していた。P D 2・3 は共に水田の法面に接しており、わずかに 1 邊を確認するにとどまつたが、住居形態は共に方形プランと推察した。

B 区の遺構 = 配石遺跡、竪穴式住居址、建物址、溝状遺構であった。 (第 3 図)

C 区の遺構 = 竪穴式住居址、溝状遺構である。 (第 3 図)

B 区での竪穴式住居址は 5 基発見されたが、溝状遺構との関係から、C 区の竪穴式住居址と関連する(挿図第 3・4・5 図、図版第 39~53 図)遺構である。C 区で発見された竪穴式住居址(P D 1・P D 2・P D 3)はそれぞれ溝状遺構を B 区における竪穴式住居址といずれかで共有するものであった。溝状遺構の A 溝は、C 区では P D 1 の遺構の中央部を貫通して、B 区の P D 5 の一隅を穿って P D 4 に流れている。B 溝は C 区の P D 3 から B 区 P D 5 の東側付近で交叉し、P D 4 の西側を流れている。C 溝は B 区の P D 2 より、円形の竪穴式住居址の南壁面を穿って、P D 4 の東側に流れている。これら竪穴式住居址と溝の切り合からして竪穴式住居址と相前後する時期か、もしくは同時期の遺構と思われる。ただ A 溝からのみ須恵器片を多数出土したことから、やや A 溝は新しいと考える。

住居址は、竪穴式が B 区で 5 基、C 区では 4 基発見されたが、その内、C 区の P D 1 と P D 4 は、竪穴の切り合いの状態から、2 回～3 回のトリプルな構築が考えられる。

掘立柱式建築址は、B 区に 8 本(梁間 2 間、桁行 2 間)の掘立柱址と、P D 5 の竪穴住居址内及び南側、北側で発見されたが、完全な平面プランは握できなかった。

出土遺物は前述の溝状遺構での須恵器の出土の他は、それぞれの住居址からは、土師式土器及び金属器を研摩したものと考えられる砥石が、旗立の P D 4 及び P D 5 より出土している。

### 3. 福音寺遺跡

福音寺遺跡は、筋違(すじかい)地区をA区・B区に設定した。川付地区を竹ノ下地区と川付地区に設定した。

筋違A区(図第7図 図版54図)の中でP D 3とP D 2は共に道路敷の下に括がっており、平面プランの全貌は見ることができなかったが、当発掘地区で発見された遺構の中で竪穴式住居址(P D 8)(図第9図 図版56図)にしめす遺構は、南面を入口とした住居で内部の平面プランは、入口部をはぶく3面に高さ1.2cmのベッド状の遺構が工夫されており平地式、高床式住居への移行過程をしのばすものであり、なお北側の壁面部に造出し部分があり、祭壇か、または一部切上析が行なわれていたのか、このことは今後の研究にまつべきであろう。この遺構での出土遺物の土器は、弥生式土器から土師式土器への移行期と考えられている朝顔形の口縁をもつ酒津式の土器を出土している。(図版57図)さらに掘立柱の跡が発見された。主軸方向は東5度南である。規模は桁行3間、梁間2間の桁行約7mと梁間約5.5mで掘立柱址より、柱の抜取穴を発見したものや、基底部に1個ないし数個の自然石を敷き砲石とするものから地山面をそのままに利用するものとがあった。この内の柱穴より土器片等を併出するものもあり、P 5からは、有孔製滑石製品を出土している。(図第10図、図版56~59図)

この地区的住居址の遺構は、円型と方形のものを中心としている。

筋違B区(図第8図 図版54図)A区とコンクリート側溝の用水路の北側で、遺構及び出土遺物は共に豊富でありまた時期的にもかなり長期間利用された地域であった。それだけに、各遺構の切り合が激しく、遺構検出に手間取った、1期・2期・3期にわかつて調査を実施した。

検出された遺構については3時期に分けられると思う。

第1の時期 竪穴式住居を中心とした集落を形成した時期であり、掘立柱式建物が平行するものから、後続する建物址の集計は、竪穴式住居址11基(A区を含む)、掘立柱式建物の址は少なくとも9基が確認された。

第2の時期 方形の周溝を造った時期。

第3の時期 土塙墓及び火葬墓として活用した時期。

以上3時期に大きく区分されるが、遺構を機能的にとらえるならば、2区分となる。すなわち、第2、第3の時期は、墓域として利用した時期である。

第1の時期はかなり長期間にわたるものとみるべきで、竪穴式住居を中心とした時期と平地式または高床式建物を建立した生活時代となる。

(第10図 図版60図)のB区P D 1の竪穴式住居址は、一面に炭化遺物が検出された外同地区のP D 5及び旗立C区のP D 4でも多量の炭火遺物が検出されており、火災のあったことがわかった。この3遺構に共通するものとして、出土する土器遺物は實に細片化しており、

かなり激しい消火活動が行なわれたとも見られる。その後に掘立柱の柱穴の掘り込みが行なわれている。掘立柱式建物は、A区と同様規模のものが多く、同時期的と考えられるが、柱穴の切り込み状態からして、相前後する建物と見るべきである。(図第10・11・12・図 図版54~65図)

墓(The pit)の内部構造や出土遺物からして、すくなくとも3時期に細分される。(第12図)

第1の時期として方形の周溝をめぐらし、ある程度の墳丘を構築した方墳としての時期が考えられる。その後墳丘の崩壊したこの地域を墓域として、かなり長期間にわたって利用されたものと考えられる。図第12図に示す断面は、15cmの耕作土と羽土5cmの下層から、火葬墓が五輪石の破損遺物と共に出土している。火葬墓の下に木棺による貞葬墓が発見され、漆器の繊片が木棺に付着していた。その下層より地山面を掘り込んだ掘立柱式建物の柱穴が発見された。これら発見した遺構からみるとこの地域の地目の変更から、次のことが考えられる。この地域は長く畑作地帯として耕作されていたが、戦前戦後にかけて、水田に耕地改良が実施されている。この改良工事により、まったく平坦化され、墳墓の封土は完全に消滅したものと思う。

さて周溝は南北23m東西14mの長方形である。周溝の溝巾は120cmでBM値からすれば深度は120cmとなる。同遺構よりの出土遺物は直刀2、青瓷1、高麗碗2、劔鍔車1、須恵器高杯、同杯を出土した。木棺直葬墓は、周溝の外部の西側地区と、周溝内では、中央部より南半分に位置するものが多く、北側の周溝B溝とD溝の角に集石遺構を確認した。

木棺直葬墓は、木棺の位置からみると被葬者は北に安置されているものが主体をなしている。(図版69、73~75)

火葬墓は3基発見されているが、埋葬設備として確認しうるだけの遺構は発見できなかつた。(図版76、78)

#### 竹ノ下地区

道路予定地内のトレンチ調査により、すでに深度80cm前後に植物遺体や須恵器、土師器の土器片を多数出土した。当地区的地目は水田であるが、湿地帯の一毛作田である。更に川付川の増水時には容易に冠水の被害にあう地域でもある。しかし地方はあり水田耕作地として多収穫地であった由。

トレンチ調査による地質略図



- 1 耕作土    2 砂層碎を含む    3 有機物を含む黒色泥層    4 砂礫層(砂岩は下層部程密となる)  
5 川付川    6 用水路    7 乳白色の粘土(地山層、地山部は礫層がある 20~23は中心杭)

トレンチ調査で知るかぎりでは、川付発掘地区内で2回の流路変更があったものと考えられる。

中心杭No.2・3位置の河床であった時期から、中心杭21～22が河道となった時期が推察でき、No.21～22の河道時期にかなりの水流があった。（地山層の侵蝕の様相から）この時期における、付近及び上流からの浮遊遺物の堆積遺物か、またはNo.21～22の間に旧河道であり、出水時にNo.2・3の位置が侵蝕され、水流の弱まりと共に沈積堆積したかは不明であつた。

発掘調査は49年8～10月にかけて実施した。実施面積は、中心杭No.22より東部分を対象に行ない。発掘面積は東西約30m南北15mの約450m<sup>2</sup>の範囲を深度80～170cmにおいて行なった。（図第20図 図版第1図）

出土遺物 出土遺物は植物遺体を中心とする遺物456点の出土を見た。これら出土遺物の内、建築用材をはじめ木器類及び、植物の種子、流木とに分類されるが、建築用材のほとんどは、杭木でもって打ちとめられているものが多く転用材と見るべきものが多数出土した。また土器類の出土数も多くしかも完形品の出土が特に豊富であった。これら土器遺物は、弥生式土器、土師式土器、須恵器に大別された。また土師質の手すくねの小形土器を多量に出土したことは、特記されるべきであろう。また少量ではあるが石器類の出土もあって土器、石器類の出土件数番号は558点を数えた。（図版3図～37図参照）

#### おもな出土品の内訳

転用材、柱材4本、梁材1本、枘穴の穿たれた材数点

農工具、鋤2個、鎌の柄2本、鉄斧の柄1本、鋤3点、木槌1点、工作台1点

生活具、カキ棒、火器、盆3点、自在1点、堅形櫛4点、竹籠片1点

その他、弓2点、琴の1部と思われるもの1点、横半裁されたひょうたん、ひょうたんに竹を挿入したもの1点。

以上出土遺物の整理が進むにつれ、まだまだ新しい資料を得ることが期待される。

石器の出土は少数であるが、4面を使用した砥石をはじめ、平形銅鏡の模造品と見られる綠泥片岩による摩製の（両丸造定角式）石鏡、良質ではないが出雲石の車輪石（図第41図）がある。土器は出土遺物の項でふれたい。

#### （遺構）

発見された遺構は、図第21・22図の出土状況を示す。T19及びT23、T26に見られる遺構は、T14へとL字形に曲ってT2、T1へと続いている。この遺構の構築は、垂直に打たれた杭木と40°～30°に傾斜した杭木が、前述の横材を固定させている。杭材で固定させた構築母体にオギや、直径1～2cmのシバ材をもって、遺構の機能的な役割を補強し目的的な効果を高めたものと思う。遺構の一部は破壊されているが、垂直に打たれた杭列をたどることにより、かっての遺構は、自然堤防上に構築された護岸施設を見たい。ただ横材

の浮上を防止した傾斜杭木から見るならば、現在川付川よりの礫層の部分は、急激な出水による侵蝕を見るべきで、山河道は、失流して泥層及び細砂層(シルト)の互層を作り出したものと判断すれば、遺構の構築状態から護岸設備であり、シバ材のはりつけ(図版第9、10図)の機能も解明される。この急激な出水により流路の変更があったと見られる今一つの現象として川付川両岸に発達している河岸段丘からしても明らかである。

更にこの河道の変化を証明しうる今一つの遺構がある、図第51・52図に見られる、土管による排水工事がある。この工事は、明治以後所有者による改良工事であり、土管の勾配は地形とは逆勾配に施されていた。この工事は数本行なわれているが、その内発掘区内に設けられた排水は出水(放水口)をもたない盲排水となっている。所有者の説明は「上の田は水もちが悪くこのような排水となっている」とのことであった。このことは明らかに上の田に砂礫か、砂層のあることになり、川付川の蛇行によるもの以外のなものでもない。

更に遺物の出土状態を第21図1・2図及び第22図3・4図を透視してみれば、植物遺体の浮遊遺物は放射状に堆積しているとみるとることはできないであろうか。

#### 4. 枝松遺跡

枝松5丁目地区、当地区において発見された遺構は、2条の溝状遺構がY字形に交叉し、この溝状遺構を結ぶ溝状遺構を発見した。全測図第24図に示す溝状遺構の延長部は枝松6丁目の全測図第25図へと発展し、同地区的緩斜面を南下するに従って、溝状遺構は順次浅く溝巾は広がっている。

溝状遺構のそれぞれに持つ勾配を見ると、R0の北東端での深度は42cmを計測し、R1と交叉する地点の深度は51cm、R2との合流地点においては深度57.5cmとなり、南下するに従って深度を増している。R1の溝状遺構の深度は67cmで出発し、R0との交叉する地点で深度83.5cmとなり、溝状遺構R0とR2との中间位置における深度91cmでR2との交叉地点では92.5cmとなる。しかしR2と合流した後のR1の遺構は、そのまま西流し交叉地点より8m付近で消滅している。R2の溝状遺構はR1との交叉地点で深度86.5cmを測り、R0の交叉地点では深度89cmとなって枝松6丁目地区に流れ込むものである。

遺物と遺構、図第2図に添付した1図と2図の透視図は、R1の溝状遺構より出土した須恵器片の出土状況図である。遺物の分類によれば3器物の菱形土器片で、これ以外の器形器物は一点も含まれておらず、溝状遺構のもつ機能を表現しているとも推考できる。出土遺物の内最大の須恵器の復元値は、器高80cm、胴部最大径100cm、口縁部径60cmである。

#### 枝松6丁目地区

当地区内における遺構は、竪穴式住居址1基と掘立柱式建物址9基の検出を見た外に、これらの遺構に近接して発見されたL字形の掘り込みのある土塙2と、発掘区の西側に南北に貫通する溝状遺構及び、この流れを横切って2条の溝状遺構を検出した。

## 第25図参照

## 検出された遺構

竪穴式住居址（図第26図 図版J111,J113,J114）主軸方向は北26°西に位置しており、地山を10cm～20cm掘り込んでいる。住居址の規模は東西の径5.2m南北の径が5mの隅丸方形プランで、住居址の柱穴は6本であった。柱穴は図第26図に示すP1～P6の内北東端のP2のみが方形プランよりやや北によりずれている。柱穴P1～P4の方形プランが基本となり、この補強としてのP5・P6の柱穴と推考する。床面は掘方に見られる深度差をもって南方向に傾斜している。焼土は北壁面の中央部より東によりに検出され、しかも焼土の周辺部より土師式土器片を一括して出土を見ている。竪穴式住居址内及び周辺部の柱穴は、竪穴式住居址の時期を下る時期の掘立柱式建物址の柱穴である。これらは掘立柱式建物址のD2・D3・D4の柱穴の一部分である。これらの柱穴の内、掘立柱式建物の柱穴D2のP9の基底部から須恵器の环身破損器物を出土した。このことによれば、隅丸方形プランの竪穴式住居址の土師式工器の一括出土（復元可能）遺物とは、時期的なへだたりがあるものと推考したい。

掘立柱式建物址は、平面プランの企望を確認したるものに限っても9基もあった。

掘立柱式建物の平面プラン（挿図25・26・27 図版J111, J113, J114）参照

建物	桁 行			梁 間			9基の掘立柱		
	番号	桁行全長	柱間寸法	間	梁間全長	柱間寸法	間	数	平柱数
D 1	4 m	1.4 m	3	2.8m	1.4m	2	10	6	4
D 2	10.2"	3.4 "	3	4.8"	1.6"	3	13	9	4
D 3	8.8"	2.2 "	4	5.3"	1.3"	3	15	11	4
D 4	5.7"	1.6 "	4	4.3"	4.3"	1	11	7	4
D 5	7.0"	1.75"	4	5.2"	1.4"	3	16	12	4
D 6	5.4"	1.8 "	3	5.2"	1.4"	3	12	8	4
D 7	8.6"	2.15"	4	4.8"	1.6"	3	14	10	4
D 8	5.8"	1.9 "	3	3.8"	1.9"	2	10	6	4
D 9	5.2"	1.7 "	3	4.0"	2.0"	2	10	6	4

半柱の内2はツカ柱

1部不明推定数

柱穴1不明

以上が6丁目地区の建物址一覧であるが、D6をのぞいて長方形プランを主体とするものが多く、出土遺物は、前述のD2のP9と、D4のP4より須恵器片を出土したにとどまった。またこの建物址の隅柱や平柱の柱穴の外に高床式の建物ではないかと推考させられる柱穴を有する建物址にはD4・D3・D7があるが、この建物址が平地式か高床式かは断定資料に乏しいが、古照遺跡において高床式建物からすれば、高床式建物址と理解することがより妥当性があると思われる。

溝状造構は5丁目の溝状造構の延長R2が貫流している。この溝状造構と直交するR3と鋭角に交又するR4がある。溝状造構R3は、建物址D3・D2・D5・D6・D8とは

平行し、北東隅のレベルと南西隅とのレベルとの差は14cmと南西隅が低位にある。溝と建物との相関関係にあったと見れば同時期の遺構と考えられる。だが建物址の切り合いで状態ががらして、同時期のものではなくかなり長期間利用され、一集落を形成していた地域と推察する。更にL字形に掘り込まれた土塙が2基検出されたが、土塙中を充填した黒褐土中には、遺物は皆無であった。このL字形のカットによる土塙のもつ機能は不明である。(土壤分折中)

建物址の群集する6丁目は、木器を多数出土した竹ノ下地区の対岸位置にあり、しかも南向の緩斜面であることを付記しておく。(図版111, 113, 114図)

### 5 星ノ岡遺跡

北下地区は星ノ岡の独立丘陵の北側の位置にあり、丘陵の麓を利用した傾斜地である。この丘陵端には、数個の泉が湧き、北下A区と旗立地区A区と境は小川となって西流し、やがて川付川に注ぐ。

調査はA・B・C区と3区画に分割して実施した。

A区においては、筋造地区と同様に戦後の水田地としての地下工事が行なわれているため竪穴式住居を2基検出したが、地山の掘り込みは5~3cmと浅く、遺構の残欠部の検出となつた。出土遺物は土師式土器(高环・1环・壺片)須恵器盤の破損器物(復元可能)と鎌の出土を見たにとどまった。

北下A区にみられた竪穴式住居址P D 3(第14図)は一辺4.8mの方形プランで、地山を10cm程度掘り下げて構築された住居址である。柱穴は3体検出したが、おそらく土塙P 1の遺構の切り合により消滅したものと考える。住居の主軸方向は、北35°東に位置しており床面は平坦である。柱穴プランも方形でありP 12とP 13の柱間寸法は2.5m、P 11とP 12の柱間寸法は2.3mである。竪穴住居内での遺物検出はできなかつた。

当遺構内にうがたれた土塙P 1とP 3の切り込みから、掘立柱式建物のP 1~P 9により切り込みにより遺構内はかく乱されたものと推察できる。

切り込んだP 1、P 2、P 3、P 4、P 5、P 6、P 7、P 8は梁間、桁行共に2間の方形プランの掘立柱建物址と思われる。建物の主軸はP D 3と同様位置を示す。建物の規模は3.5m前後のプランと考える。柱穴の掘り方は1m以上に達するものもある。

B区の遺構は竪穴式住居址3基と掘立柱式建物址3基、土塙3である。

C区における遺構は、排水のために布設された暗渠よ排水が数条設けられている以外は遺構は検出されなかつたが、出土遺物には第50図に見る石包丁と圓面化困難な土器片を多数出土した。

B区の竪穴式址P D 1(第15図 図版84~87)の主軸方向は北を指す。この住居址は、東西の全長3.5m南北4.1mの長方形プランを呈し、地山を約10cm程度掘り込んでいる。

床面は、ほぼ平坦であるが、北壁面と南壁面とでは10cm程度傾斜を取っている。焼土は方形プランの柱穴の中央部と西側の壁面と柱穴の中間位置で検出した。柱穴の径は24cm前後で4

本共床面より20cm程度に掘り込まれている。堅穴の掘り込みの周辺部において10数個の小規模なピット列が検出された。この小規模なピット列が、平地式住居にみられる切上桁に共通する造構と推考すれば、住居への入口は東側の南隅か、南側の東隅が考えられる。出土遺物は、土師式土器の高杯・壺・杯を出土した。P D 1 の北部周辺に検出された掘立柱式建築の柱穴の内（第15図）にみえるP 1～P 6 は梁間1間、桁行2間の建物址であり、梁間全長約1.8m、桁行全長約3.5mを計測できた。この桁行全長の柱間寸法に運算すれば1.8mの梁間全長に等しい値を見る。さすれば小尺30cm（1尺）をもってすれば、6尺×6尺で一坪となる、とすれば、P D 1 に共有した高床式倉庫としての建物とも推考が可能であり、出土を見た、土師式土器が、遺物考察の時期に相当するとすれば、より与味の湧く遺構である。この掘立柱式建物がP D 1 の遺構と同時期のしかも同住居址との関連遺構とするならばP D 1 の入室条件として、東側の南隅が入口となる可能性は大きくなる。残るP 7・P 8 は、前述の改良工事による地山の掘り下げによりこれ以上の遺構は検出できなかった。

堅穴式住居P D 2 の主軸方向は、北15° 東に位置している。一辺の計測値は南北4.8m、東西4.9mとやや変化した方形プランの堅穴式住居である。柱穴プランは方形で床面より、それぞれ30cm程度に掘り込んだ柱穴4本があるが、柱穴の内P 3 は30cm P 2 に片寄った柱穴となっている。堅穴の掘り込みは、10cm～24cm前後の平担な掘り込みとなっているが床面は北面に傾斜を取った掘り方となっている。焼土はP 1 とP 2 の中央部の北壁面に検出されたと共に土師式土器の壺（破損）と杯の完形品を検出した。なお南側壁面の直径約80cmの深度床面より20cmの円形ピットの基底部から完形の碗形土器を検出している。また方形プランの堅穴の南隅と西隅の角及び西壁中央部付近で深度15～20cmのピットを検出した。このピットが、P D 2 の通鳥尾に關係する柱穴か否か今後の検出例を待つ。（第15図P D -1、P D -2図版第87図）

掘立柱式建物P D 2 は、堅穴式住居P D 2 の東隅を切り込み計画されている遺構である。建物の主軸北20° 東に取られている。建物の梁間全長約4.5m、桁行全長5.75mを計測した。この計測値から梁間の柱間寸法は、一間1.5mの3間となる。桁行の柱間寸法1.41mの4間となっている。当建築址の掘り方の内、基盤面（地山面より50～60の掘り込み）で検出した柱の抜取穴及び礎石の位置からの算出である。これによれば一間の柱間の中心間の寸法は小尺の30cmに匹敵することになり、同地区のP D 1・P D 2 に後続する建物址と見ることができ。柱の抜取穴の径1.8cmをP 8 で計測していることから、ほぼ同規模の柱徑を考えてよいのではなかろうか、ちなみにpit 1～pit 15に堆積した土層（黒褐色土壤）には、抜取穴を立証する土壤における色調の変化は見られなかった。

C区においては前述した如く排水設備の他に、掘立柱式建物の柱穴を3個検出しており、柱穴規模はB区での検出D 2 に類似するが、平面プランの全貌は予定地外に拡がっており、発掘は不可能であった。以上、A・B・C区の発掘調査により更に星ノ岡独立丘陵に向って遺

構が発展していることを今一層確信付けるものであった。

## 6. 北久米遺跡

北久米遺跡は常坂A・B・C区及び万方の裏A・B・C・区と農免地区に拡がる地域での調査を実施した。

常坂A地区(第16図)では、住居址及び建物址の検出はできなかったが、東から西方向に流れる溝状造構を検出した。溝状造構の掘り込みは地山面より10~15cmの掘り込みとなっているが、溝の堆積土層は3層に細分された。第1層は黒褐色の粘性のある土層、第2層は黒色のシルト層、第3層は雲母を含む砂層、第4層は溝の構成基盤となる黄褐色の粘土層で構成されており、地山層と造構面とは容易に判別される層序であった。

出土遺物は他の調査区に比して少なく、土師式土器片及び鉄の残欠遺物を検出したにとどまった。

常坂B地区(第17図 図版100)の調査は雨期と田植時期にまたがり、調査は実に困難であった。更に田植後の地盤のゆるみと水田地の床水の流出防止のため、発掘範囲は縮少せざるを得なかった。当区で検出された遺構は竪穴式住居址1基、掘立柱式建物址4基、土塙17基である。

竪穴式住居址P D I(第18図 図版104)は、一辺5.2mの隅丸方形プランの住居址である。住居址の主軸方位は北23°東に位置している。竪穴の掘り込みは地山を10~15cm掘り込み床面はほぼ平坦である。住居址内の柱穴は床面より20~30cm掘り下げられたP 1~P 4の変形したプランとなっている。その他ピットは浅く補助的なものかは不明である。竪穴の周辺5m以内に点在するピットについても同様である。遺構内の出土遺物は、土師式土器の壺、壺、高杯、把手(こしき片)を束側の壁面付近で出土をみた。特に床面より検出された、赤鉛化した鉄片を4個のみ出土を見た。接する土塙P 14の遺構からは、須恵器の高杯、杯の破片を多数出土しているが、本竪穴からは1点も出土していない。

掘立柱式建物址の図式 (第17図 図版101、103、106参照)

建物番号	柱行			梁間			柱		
	柱行全長	柱間寸法	間	梁間全長	柱間寸法	間	数	平柱数	隅柱数
D 1	5.7 m	1.9 m	3	3.8 m	1.9 m	2	10	6	4
D 2	6.5 m	2.0m~2.5m	3	4.4 m	1.5m~1m	3	12	8	4
D 3	3.8 m	1.9 m	2	3.0 m	1.5 m	2	8	4	4
D 4	4.7 m	1.5 m	3	4.0 m	2.0 m	2	11	7	4

D 1 の掘立柱址の掘方は方形プランである。当地方では最初の検出例である。

建物の主軸は北30°東である。それぞれの掘立柱穴には、柱位置を

穿った柱穴が明確に残っている。特例として、掘立柱穴に2個の柱穴をそなえているものと栗石を敷く掘立柱址のものがある、それぞれの基底部のレベルがP 2・P 3以外は致する処

から、P 7 の裏石は組み上げ工程の段階で不陸調整を行なったものと推考できる。また P 1 に見られる 2 個柱穴の内、内側に穿たれた柱穴は柱心よりはずれることから、隅柱ではなく、土居筋調整もしくは補助材ではと判断している。建物の西側及び南側にみられる柱心より 2.5 cm 前後のビットの配列は今後の研究課題としたい。掘立柱の堀方が、P 2・P 3 のみ浅く、しかも P 2・P 3 は一致する点において、平屋入りの入口が構築されていたのではなかろうか、掘立柱の P 5 と P 10 を結ぶ線に平行する浅いビットが 3 個穿たれている等報告書までの課題としておきたい。ただ隅柱や平柱以外に穿たれている掘立柱址と小ビットの列からして高床式建物址を強める要因ではある。

乃万の裏地区において他の発掘区と同様に細分割して発掘を実施した。

A 区においては、1 条の溝状遺構と 1 列に打ち列べられた杭木列（径 3 cm）と土塙 2 基を検出した以外には遺構の検出はできなかった。また土塙より出土した土器片は細片のために復元及び実測等不可能な土師式土器片を出土している。

B 区及び C 区も、北下地区と同様に農地の改良工事のために、地山面の掘削がおこなわれており、わずかに遺構の基底部分を残すのみとなった残存遺構である。検出された竪穴式住居址 P D 1 (図版第24図)は、一辺 5 m と 6 m の方形プランの住居址であり、床面は中央部に向いしだいに深まっている、いわゆる凹レンズ状を呈する。遺構内の柱穴は 12 の個数になるが、方形プランの竪穴式住居址に直接関係する柱穴は、4 本の方形プランとなる P 1～P 4 であろう。北側の中央部分の壁面よりに検出された焼土は、熱変化を受けたブロック塊を含むことからカマドの崩壊したものと推考する。出土遺物として、土師式土器の高杯、壺等の破片を採集した、両壁面の堀込みと切り合って長径 2.5・短径 2.0 m の土塙が見られるが、出土遺物もなく、竪穴住居の床面より 1.0 m 外の掘り込みとなっている。東壁の南隅に検出した長径 3 m 短径 0.8 m は、炭化（炭）物を少量含む黒褐色土が充填していた。住居と関係するものは直断をさけておきたい。

P D 1 をへだてること 2.7 m に、土括墓が検出され、副葬した遺物が出土した。1 点は銅鏡（直径 4 cm の梅花の文様）と白磁が一個出土した。白磁は 8 面に 2 段のカット面が交互に施されて、外観は多面体の構成をなし、内面は単純な面造りとなっている。渡来磁器で李朝初期に製作されたもので時代的には、梅花鏡（図版 108 図）との出土からして室町以後の土塙墓と思われる。

農免地区的発掘は（図版 I10、I10、I12）单调な発掘となつた、遺構としては、2 条の小規模な溝状の遺構と土器、砾石等が出土したが住居址か、生産遺構と考えられる遺構は検出できなかつた。出土遺物からして歴史時代と考察している。

#### 残されている課題

各地区の遺構の詳細な考察やら図面の統一と保管、出土遺物の整理、復元、実測、展示等、他の出土遺物の処理等山積みした業務が残されているが、ここにその遺構、遺物の一端

を記載したにすぎず、自責の念にたえないが、概況報告を致しますと共に今一層の指導を戴きたい。

## VI 各地区出土遺物概況

### 1 福音寺遺跡

〔竹ノ下地区〕

### (1) 木製品

竹ノド地区から出土した木製品には、農耕具、工具類、容器類など各種のものがある。以下では、このうち用途の判明する木製品を中心にして記述をおこないたい。

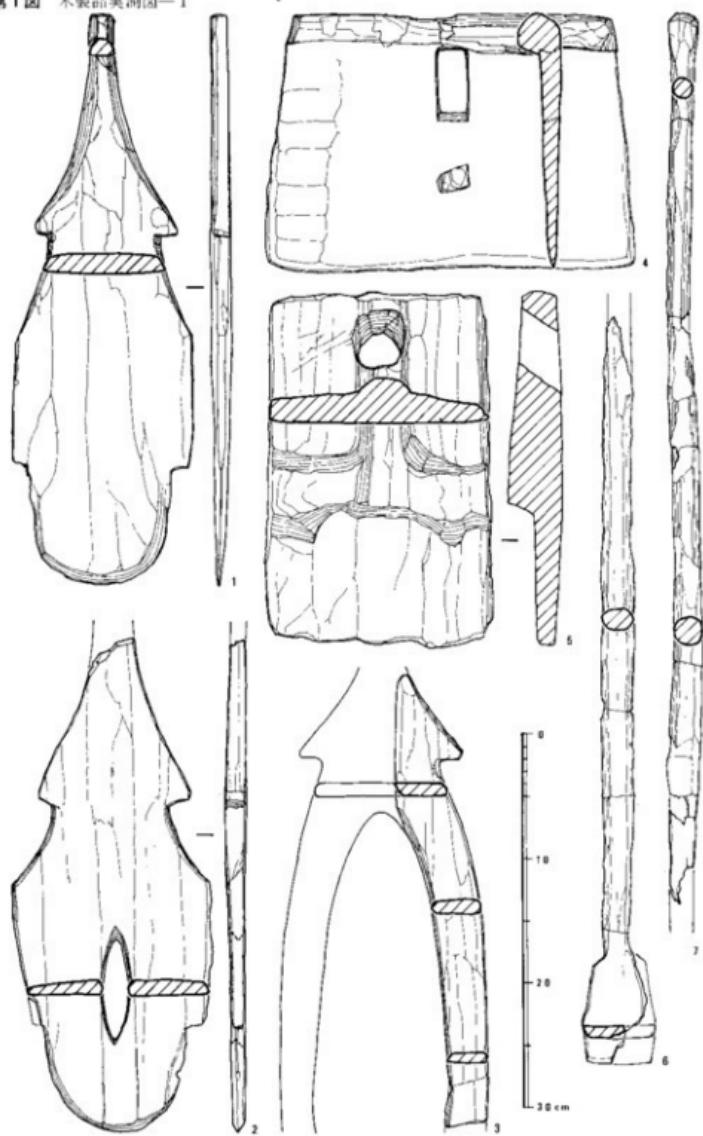
**農耕具** 農耕具には、スキ 4点・エブリ形農具 1点・クワ 1点・スキの柄とみられる棒状品 2点がある。

**スキ (1~3)** いずれも柄と身を別木で作るスキの身部で、ナスピの縦断面形に近い形状をもつ、これらは、耕起部分である刃部と柄をとりつける基部からなるが、刃部の形状で2種類に分類できる。Aは刃部先端にU字形スキ先を着装するもので、先端をまるくおさめる。Bは刃部が2股に分岐するもので、スキ先は着装しない。1はAに分類できるスキで全形をとどめる。刃部中央下寄りには、両側縁からほば直角に抉り込んだ間があり、以下をスキ先の着装部とする。着装部の周縁は、棱をおとし丸く削り、先端はU字形に作っている。刃部上半はしだいに幅を減じて基部に移行する。刃部と基部との境には突起を作るが、その上部はさらに幅を減じ、柄をうける断面舟底状の基部端となる。突起下端と基部先端で柄を着装するのである。全長45.2cm、最大幅14.5cm、厚さ 1.7cmスキ先着装部長 9.5cm最大幅11.2cm、厚さ 1.0cm。2もAに分類されるスキで1に近い形状をもつが、刃部中央には、刀子状の利器で斜めに削込んだ橢円形の孔があり、その下端は闊かららやや下にまでおよぶ。おそらく耕起土との粘着をやわらげる工夫であろう。現存長39.1cm、最大幅16.0cm、厚さ 1.7cm、着装部長 8.4cm、最大幅11.4cm、厚さ 1.2cm、孔長径 7.8cm、短径 2.1cm。3はBに分類できるスキである。基部の形状はAのスキと同様に作るが、刃部は2股に分岐している。スキ身の縱半分をとどめもので、分岐した刃部側縁には、明確に刃を作り出していない。刃部先端を失なうがおそらく鉄製のスキ先は着装しないものであろう。現存長35.9cm、復原幅26.0cm、厚さ1.2cm。図示しなかったスキが1点ある。これはAに分類できるもので、1と同じ形状をもち、刃部先端にスキ先を着装できる。全長44.1cm、最大幅15.0cm、厚さ 1.5cm、スキ先着装部長 9.8cm、最大幅10.9cm、厚さ 0.8cm。これら4点のスキは、いずれもカシ属の材を用いて作り、木取りは、原本の中心に向って割り裂く柵目に近いものである。

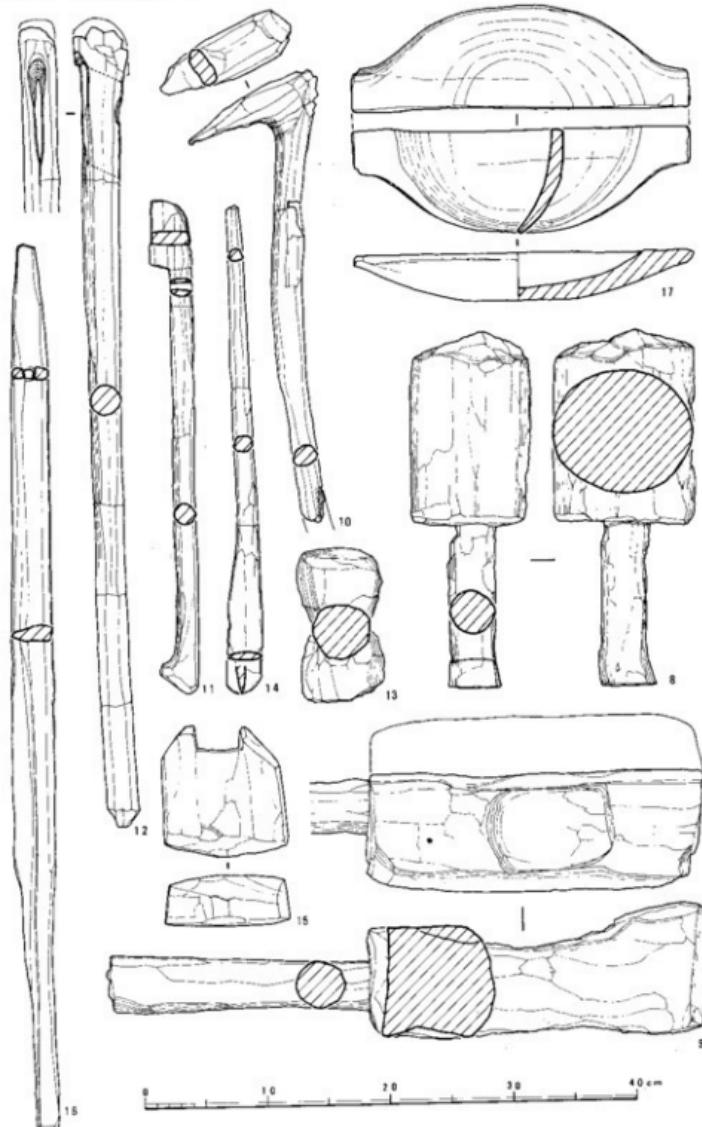
**エブリ形農具 (4)** 横長の板材の下縁を薄く削り出して刃部とし、中央上縁寄りに方形の柄つばを穿ち、上縁には帯状の突起を作り出したもの。柄つばは長さ 5.1cm、幅 2.5cmの長方形を呈し、柄は鋭角に挿入される。柄つば下方には柄の支本があたった痕跡がみられる。上縁の突起は幅 3.3cm、高さ 1.8cmの帯状で、断面形は台形に近い。全長20.5cm、幅29.6cmスキと同様にカシ属の材から作るが、木取りはスキと異なり木目方向と平行に刃部を作る。

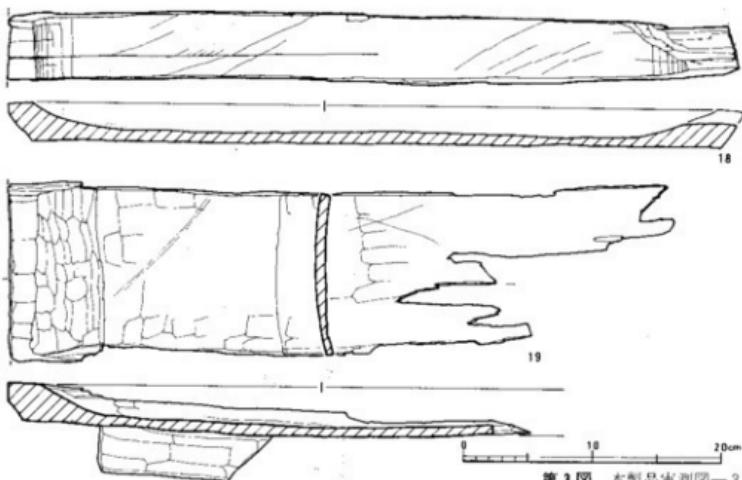
**クワ (5)** 長方形の板材に逆T字形の降起を削り出し、下方に刃部を、上端中央に柄つばを作るクワである。全形をとどめるが、材表面の觸感が著しい。柄つばは径 4cmの円孔で、柄は隆起に対し鈍角に挿入される。刃部は他の部位に比して厚味を減じているが、周縁辺に

第1図 木製品実測図一1



## 第2回 木製品実測図-2





第3図 木製品実測図—3

は刀を作り出していない。鉄製のクワ先を着装したものが否かは不明である。材質および木取りはスキと同じである。全長28.2cm、最大幅18.0cm、厚さ4.4cm。

**スキの柄(6・7)** スキの柄とみられるカシ属の材から作った棒状品が2点ある。6は丸棒の端部を括げて板状に作り、スキ身との着装部としたもの。おそらく板状に括がるくびれ部とスキ身の突起下端部とを固縛したのであろう。柄尻部は欠損する。現存長59.4cm、丸棒径2.5cm、端部長8.5cm、幅5.2cm、厚さ1cm。7は柄元部をとどめるものでスキ身との着装部は欠損する。丸棒上端付近の周開を削って径を減じ、それから先端までを柄尻部とする。このため柄尻部と柄中央部との径はほぼ等しい。現存長70.5cm、径2.3cm。6・7から復原できる柄は、全長約1m、くびれ部までで約90cmである。これにスキ身およびスキ先を着装すると全長125cm前後の着柄鉄が復原できるであろう。ただ6・7の棒状品をスキの柄とするには、着装部の形状が、スキ身に比して幅が狭く、厚味が大きすぎるという疑問点もある。一応ここではスキの柄としたが、さらに検討を加えなければならない問題であろう。

**工具類** 工具類には、横槌、工作台、手斧や鎌などの柄、槌の子などがある。

**横槌(8)** 柱状の身部と棒状の柄部とからなる。身部と柄部との境はほぼ直角に削りおとして明瞭である。柄尻部は若干削りのこしている。全体に腐蝕が著しいが、使用痕跡が身部の周側面にみられる。全長28.3cm、身部径11cm、柄部長13.0cm、柄部径3.7cm。広葉樹。

**加工台?(9)** 直方体の身部と丸棒状の柄部からなり、一本から作り出す。身部中央部分は刃物で切り刻まれ凹面をなす。柄の端部は欠損する。本来は何かの工具の未製品であり、工作用の台に転用された可能性もある。広葉樹の心持ち材。現存長48.2cm、身部長26.8cm

復原軸約14cm、厚さ 8.8cm、柄部径 3.8cm。

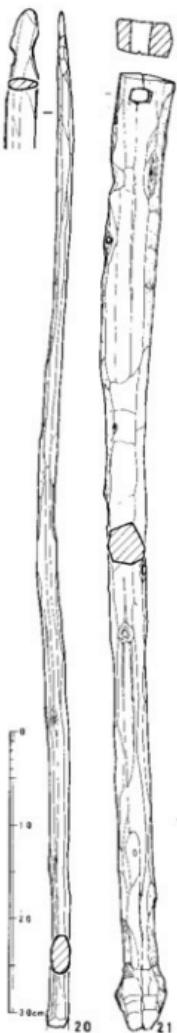
**手斧柄 (10)** 2股に分岐する幹と枝を利用する手斧の柄である。刃を着蓋する身部を幹から、柄部を枝から作り出す。身部は粗く削って仕上げる。身部両端とも一部欠損する。柄部は樹皮を取り除いたのちかるく削り整形をほどこしている。刃先を取りつけた痕跡は明確でない。柄端部は欠損する。身部現存長11.5cm、幅 4.0cm、厚さ 2cm、柄部現存長32.5cm、径 2cm。広葉樹

**鎌柄 (11・12)** いずれもほほ全形をとどめる鎌の柄である。11は丸棒状の柄の一端を山形に突出させて柄尻とし、他端を板状に削り出して柄元とする。柄元下部には側辺を貫通する茎孔があり、孔は柄の軸線に対しほば直角に穿たれている。柄は直線に作られ湾曲しない。全長39.2cm、柄元部幅 3.2cm、厚さ 1.2cm、柄部径 1.7cm、茎孔長 3cm、幅 0.6cm、広葉樹。12は丸棒状を呈する大型の柄である。柄尻は周囲から削りおとして尖らし、柄元は幅を括げて丸味をもたせている。柄元先端を一部欠損する。柄元下部には柄側辺を貫通する茎孔があり、柄の軸線に対し約 118度で穿たれている。柄は、わずかながら湾曲がみられる全長64.0cm、柄元部長 4.3cm、厚さ 3cm 柄部径 2.4cm、茎孔長 7.8cm、幅 0.5cm、カシ属の材から作る。

**槌の子 (13)** 自然木を短かく切断し、中央部を削り込んで細くした。伝編みのおもりである。切断面および中央部周辺は粗く削るが、削りのおよばない部分には樹皮をとどめる。広葉樹の枝ないしは細い幹から作る。全長12.2cm、径 6.8cm。

**その他の木製品** 前述した農耕具・工具類以外に容器類や弓とみられる木製品がある。

**容器類 (17~19)** 17は両端に耳状の突出部をもつ丸い盤である。底部から口縁部への立ち上がりはゆるやかでその境は明瞭でない。全体に厚手の作りで、底部と口縁部下半の厚さはほぼ等しく、口縁端部へしだいに厚さを減じる程度である。器形に丸味をもたせ、両端の突出部への移行も丸味がある。針葉樹の板目材から削り出して作る。木裏を盤の上面に木取りしている。全長27cm、器高 3.8cm、槽部径19.5cm、深さ 2.8cm。18・19はともに長方形の厚の中央部を削りぬいた盤である。18は両側辺を欠損するが、ほぼ全長の削るもの。底部への削り込みはゆるやかで明瞭な棱はみられない。針葉



第4図 木製品実測図—4

樹の板目材から作るが、17と同様に木裏を盤の上面に木取りする。全長66.2cm、現存幅5cm、器高2.9cm、深さ2.0cm。19は脚をもつ盤である。欠損が著しく、1脚のみをとどめる。盤口縁部から底部の刺り込みはゆるやかであるが、底部との境には稜がみられる。底部には削りの痕跡がたどれる。脚は削り出して作り横断面台形を呈し、木口方向の外面は直にて内面は斜めに削おとす。おそらく盤の四隅に脚を作り出したものであろう。針葉樹の板目材から作り、17、18と同様に木裏を上面に木取りしている。現存長61.0cm、現存幅13.5cm、器高7.4cm、深さ2.5cm、脚長13.3cm、幅5.0cm、高3.5cm。

**弓（20）** 細い自然木を利用してつくった丸木弓である。全長のはば半分をとどめる。枝あるいは細い幹の根半分を削りのこして横断面楕円形の棒状に作る。弓羽部分は、先端に向って厚味を減じて扁平に削り、両側辺にはゆるやかな抉りを入れる。全体にゆるやかに湾曲している。柵はみられず、桿皮をまきつけた痕跡もない。現存長107.2cm、幅4.1cm、厚さ2.1cm。

**不明木製品** 前述した木製品以外に用途の不明な木製品が多い。ここではそれらのうちほぼ全形をとどめる2~3のものに限って記述する。

14は扁平な身部と丸棒状の柄部からなるもので全形をとどめる。柄端部は削りおとしてやや尖り気味に作る。柄部は断面楕円形に削りしだいに幅を拡げて身部に移行する。身部周側辺は両面から削って刃を作り出している。身部先端は片側がすり減っている。全長38.8cm、柄部径1.3cm、身部長2.8cm、厚さ0.8cm。広葉樹。農工具の一種であろうか。

15は分厚い方形板材の一辺を両側に削りおとして不整六角形とし、その上辺に方形の刺り込みを入れたもの。全面の削りの痕跡がみられる。おそらく製作途中のものであり、上辺に刺り込みを仕口とする脚状の製品になるものとみられる。全長10.6cm、幅10.0cm、厚さ4cm、広葉樹（カシ属か）の板目材。

16は扁平な角棒で両端付近は削って幅を狭める。一端付近に平面五角形の孔が穿たれている。両面ともに削り面を多くとどめる粗い作りである。全長70.7cm、最大幅3.5cm、厚さ1.3cm。孔一辺長0.6cm。針葉樹の板目材。

21は幹を粗く加工して作った太い棒状品。一端は両面を削って平坦に作るが他面には幹の人味をとどめる。端部は直に切断する。他端は周囲から削り込んで丸く作り、端部は瘤状に削り残す。中間部分は粗く削っており断面不整多角形を呈す。方形をなす一端には方孔を一つ穿っている。全長101cm、最大幅5.9cm、厚さ4cm。広葉樹（カシ属か）の心持ち材。

前述したこれらの木製品は、いずれも5世紀頃の遺物とみられ、愛媛県内では初めての例であろう。全国的にみても出土例はさほど多くなく、重要な資料であるということができる。とくに農工具のうち、スキについては、U字形スキ先の着装部を明確に持つものが3点あり、類例としては大阪府四ツ池遺跡の出土例があるにすぎない。エブリ形農具については、上端に突起をもつ例は少なく、松山地方の特色である可能性も考えられる。今後さらに竹ノ下地区出土の木製品を通して、当時の生活の様子を復原していく必要がある。

## (2) 土 師 器

本地区より出土した土師器は、形状を伺い知れるもので約300個、土器片数においては、300点を越しており、これらに關しての詳細は本報告書にて記述されるので、ここでは、その代表的な個体についての紹介に留めるものとする。

### ○ 坯 1~25

器形において、口縁が内反するもの、垂直に立ち上がるるもの(20, 24, 25)内反後、同じく立ち上がるるもの(16, 19, 21, 23)と外反するもの(22)の四形態が認められる。いずれも口縁から底部にかけて、ハケメヨコナデ、または斜ハケメによって調整されており、胎土、焼成ともおおむね良好である。器高が口径に比して高く、碗に近い形状を示す坯もみられ、(18, 24, 25) 坯から碗への移行を伺い知り得る。

### ○ 碗 26、27

外面にハケメヨコナデが施されている。27は口縁がやや内反するが、底部は平底である。焼成、胎土共に悪く、砂粒を含み、赤褐色である。中世以降の天目茶碗によく似た形狀である。

### ○ コップ状土器 28~30

28, 29はやや外反する口縁を持つ、いずれも平底であり、29の口縁にハケメヨコナデが施されているが、他は調整はなく、28は手すくねに近い。

### ○ 小型丸底壺 31~41, 46~50

口縁は直線的に外上方に開いており、胴部は球状を示しているのが大半である。35, 48は口径が胴径を上まわっている。31, 32は器高に対して口縁部の高さが短かい。33, 36には底部から胴部にかけて、火による炭化、剥離現象が認められる。いずれも口縁から胴底部にかけてハケメヨコナデを施して調整されている。

### ○ 壺形土器 42~45, 51, 52, 54~56

型の大小はあるが、42, 43, 52・44, 45, 51, 54は同形態である。口縁はいずれも外反するく字状を示しており、内面はヘラ削りで仕上げ、部分的には指圧も見られる。外面は口縁～底部にかけて、ハケメヨコナデによって調整されている。44は頸部に×印のカマ印が付けられており、51の内部には粘土縫による巻き上げの状態がよく残っている。52の口縁縛はやや肥厚が認められる。45, 54の胴部には煤が著しく付着しており、甕としての使用がなされたとも伺い得る。56は口縁部が外反し縫を持ち、さらに垂直に立ち上がる二重口縁を示している。口縁内外面にハケメヨコナデによる仕上げ、胴底部にはハケメ調整がされ、胴内部にはヘラ削りと指による指圧調整がされている。口縁の形状から、いわゆる「布留式土器」に属するものと考えられ、類似したものとしては、占照遺跡よりの出土が知られる。

### ○ 鉢形土器 53

口縁がやや外曲しながら開いており、その側面にはハケメヨコナデが設されており、頸部にハケメの調整がされており、赤褐色で焼成は良い。

### ○ 高 壱 57~92

壺底部と脚部との接合点に顕著な稜を持つもの(57,58,59,66,68)、稜がやや明確でないもの(61,62,67,69)、壺底部と脚との境がないもの(60,63)、壺部が碗状を示すもの(89)がある。また、脚部が直線的にスカート状に開くもの(64)裾を持つもの(65)があるが、上記の高壺よりかなり大型である。いずれも胎土、焼成とも良好であり、壺部、脚部にハケメヨコナデによる仕上げがされている。71~88、90~92は脚部のみであるが、脚が外反しながら接地するもの(83)、裾が平たく、接地面が大なるもの(81)、少し浮かしてあるもの(76)、脚が棒状に近い(90)等の形態を示している。85は孔が2段にうがっており上記の器形とは若干異なる。

### ○ 手捏ね形土器 93~113、115~126

さまざまな形状があり、一定ではないが、最小のもので口径2cm(96)、最大のもので口径7cm(108)であり、壺(101)、碗(119)、小型丸底壺(115)、コップ状土器(126)、を模したものもある。124は外面に火による剝離と、煤を付着している。これらの土器は全体的に焼成は悪く胎土も砂粒を多く含んでいる。内面には指によるひねり上げが認められる。外面をハケメで調整しているものは僅かである。

## (3) 須 惠 器

上記器に次いで出土数が多いが、小型の須恵器類が多く、壺、甕等の大型土器は僅かである。

### ○ 有蓋高壺

いずれも青灰色で、焼成は硬く、胎土も良質である。外面にはヘラ削り、ロクロナデによる調整がされている。ロクロは左右両回転がある。壺部は偏平な底部を持ち、受部稜は外部に大きくそり上がり、口縁部もやや内傾しながら高くそり上っている。脚部には長方形の透しが三方にうがってあり、脚部にもロクロナデが施されている。松山地方の古墳石室内からの出土例は無く、僅かに占照遺跡よりその残欠が出土しているにすぎない。

### ○ 壺 蓋(有、つまみ) 132~138

蓋天井中央部のつまみの形が、中央が凹むもの(132~136)円びやや高みを持つもの(137、138)があり、蓋の天井が丸味をおびるものと、やや偏平なもの(133)がある。これらは、明確な稜を持っており、その断面は三角形状を示し鋭い。いずれも青灰色で胎土は良く、焼成は硬く、金属音のするものもある。ロクロ左右両回転があり、ヘラ削り調整がいずれも施されている。

### ○ 有蓋壺 139~149

壺の底部がやや偏平なものと、丸味を持つもの(140,142,148,149)とに大別される。いず

れも青灰色、ないし黒灰色を示し、焼成は硬く、胎土も良質である。受部は大きく外へそり上がっており、口縁はやや内傾しながら立ち上がっているが、垂直に近いもの(139、144、147)、内傾の後、外反するもの(142、148)などがある。表面はヘラ削り、ロクロナデによる調整がされている。

○ 壺 罩 150~161

蓋の天部が偏平なものと、やや丸味をおびているもの(151、153、157、159、161,)とに大別される。明確な稜がいずれもあり、その断面は三角形状を示している。受部との接合部はやや外反しているが、垂直なもの(154~158)も見られる。いずれも青灰色、焼成、胎土共に良好である。表面はロクロナデ、ヘラ削りにより調整がされている。

○ 壺 163

灰色で焼成は悪く、胎土も砂粒を多く含む、表面が剥脱している。この壺の出土例はこの一点だけである。

○ 高 壺 162、164

162は脚部に口径の大きい壺を乗せており、壺部に2本の棱と櫛書き波状文を施し、左右に耳型の取手を設けている。脚部には長方形の透しが二方にうがってある。表面には凹線が細かくつけられている。胎土、焼成共に良好、164は稜が明確でなく、脚との接合部が棒状であり、その断面はヘラにより調整されており、多面体である。脚部に小孔を三個うがつ。

○ 壺 167

広口壺であるが、口縁部が短かい。口縁はく字状に外反し後を持つ、その上下に櫛書きによる波状、流水文を施している。胴部から底部にかけてはタタキメが施されている。内部には青海波文の圧痕が見られる。焼成、胎土とも良好である。

#### (4) 弥 生 式 土 器

出土数は最も少なく破片を含めても60点にすぎないが、流入、堆積していたわりには、摩滅がほとんどなく文様も残っており、上流近辺に弥生時代の遺構が埋存していることが伺える。

○ 壺形土器 168~173

168は口縁が外反し、さらに内傾しながら逆く字状を示し、口縁部外面による櫛目流水文を付け、ヘラ書き格子目文をつけた長方形の突帯を4個張りつけている。頸部と胴部にはヘラ書き格子目文の粘土紐の突帯をめぐらし、その間に、縱方向に櫛書き流水文を16条配し、再び長方形の突帯を張りつけ、胴部突帯より下に、櫛、ヘラ書きによる流水文、凹線を配す複雑な文様を施している。焼成は良好。169は口縁が漏斗状に外反し、外面にハケメの調整がされている。170は大きく外反した口縁に、いくぶん内傾、肥厚する立ち上がりを持つ二重口縁で、その外面にヘラ書きによる鋸齒文と円形布文を配している。頸部に粘土紐の突帯を

めぐらし、指圧文を付けています。171は大きく外反する口縁に内傾する高い口縁を持ち、口唇端が肥厚する二重口縁で、口縁部に櫛書きによる波状文と凹線が付けてあり、口縁端に櫛書きの格子目文、頸部に同突帯をめぐらしている。焼成はやや軟質である。172は口唇がやや直立に近い状態の二重口縁であり、頸部に粘土紐の突帯をめぐらす。173は同じく二重口縁であるが、頸部が短かい。ハケメによる調整が施されている。

#### ○ 高 壱 174~176

174は高壺というより器台形高壺と称した方が妥当である。壺部が広く、かつ浅く、口縁にさらに外縁を設けている。脚部にはヘラ書きによる凹線と鋸歯文が交互に配されており、幾何学的文様を呈している。焼成良好。175、176は脚部のみで、共に二段に小孔をうがつ。

#### ○ 器 台 177

口縁端が肥厚し、やや内反する。ヘラ書きの三角形鋸歯文をめぐらしており、頸部に小孔をうがつ。外面をハケメで調整している。

### 〔筋違地区〕

同地区からは、土師器の壺、小形丸底壺、壺、碗、平皿、土師質小型碗、須恵器の有蓋壺、壺、磁器の碗、皿、盃を出土している。

225はP D 8の床面に接着して、原位置を保っていた土器であり、頸部が直立し、その口縁は大きく外反し稜を持ち、さらに口唇部がゆるやかに外反する、いわゆる「酒津式」土器に分類されるもので、他にP D 8からは二重口縁で口縁部が直立する酒津～布留式の壺を伴出している。179、183はP D 4より出土した小型丸底壺であるが、179は口径が胴径より大きく、183は口縁が直立に近い。182はP D 5より出土しているが、器形は壺より碗に近い。その他土坡等より、壺(184)、鉢形土器(180)を出土している。185～187、194～202の平皿は各土坡中より出土しているが、土師質としての胎土、焼成に若干相違が認められる。188～193の土師質小型碗と共に時代を下って製作されたものと考えられる。なお200～202は土坡中の横置座棺内部より出土したものである。底部は糸切り平底である。

須恵器(203～205)も出土しているが、竹ノ下地区とのそれを比較するに形状、胎土、焼成のいずれも遅れを感じさせるものである。230は青磁の高麗碗、231は小皿で重ね焼の痕跡が内面に残っており、232は白磁質の盃で伊万里である。いずれも底部は高台状を示す。

## 2、星ノ岡遺跡

### 〔旗立地区〕

土器出土数が比較的少ない。P D 1からは233の器台が出土している。つづみ状の器台で上下に2個、対面して4方向に孔がうがってある。弥生期終末と考えられる。224はP D 4から出土しており、壺部の形は碗に近く、壺と脚との接合部はゆるやかである。表面にハケメヨ

コナデが施されている。その他、小型鉢形土器がP D 4 ( 229 ) P D 5 ( 226 ) 、 坯がP D 1 ( 227 ) 、 P D 2 ( 228 ) より各出土している。

#### 〔北下地区〕

P D 1 からは壺、高壺、坯等を出土している。209の高壺は稜が明確であり、壺部、底部にかけてハケメヨコナデが施されている。壺の厚みが大きい。210の壺は、竹ノ下出土のものと類似する。

P D 2 からは高壺、小型鉢形土器、坯等を出土している。207、211、212の壺はいずれもハケメヨコナデがされており、焼成は良好である。213は壺部のみであるが顕著な稜を持つ。

P D 3 からは、215のあげ底の碗形土器、P D 4 からは217の長頸壺を出土している。頸部に凹線とヘラ書きの施文がされている。胎土、焼成は土師質に近いが、弥生後期終末期～土師への移行期のものと考えられる。

### 3、 北久米遺跡

#### 〔常堀地区〕

218はP D 3 より出土しており、口縁が高く、胴の張りが広い壺形土器である。焼成は悪く胎土も砂粒を多く含み、表面が剥離している。219は壺部のみであるが、壺と脚との境に明確な稜を持っている。外面をハケメヨコナデによる調整がされており、焼成、胎土とも良好。

#### 〔乃万の裏地区〕

220はく字状の口縁を持つが、器形は鉢形土器に近い形状を示している、焼成は悪く、外面は火によって赤色味をおび剥脱が著しい。221は胴下部が張り出し、口径より大である。底部は張りつけによる。

#### 〔農免地区〕

223は平皿に類する、218、224、は底部が浮き、灯明皿の形態であり近世のものと考えられる。同地区からは上記の土師質平皿類の他には、布目瓦片を出土しているが、いずれも遺構に伴って出土しているものでは無い。

#### 〔各遺跡出土の石器類〕

- ・ 石鎌 サメカイト製で打製、正三角形状をしたもののが旗立地区P D 2 より(15)また  
　　縫泥片岩製、摩製、有茎のものが竹ノ下より出土している。(32)
- ・ 石槍 サメカイト製、両面剥離調整しており、底部にゆるやかな抉り込みを付けて  
　　いる(10)農免地区より出土。
- ・ 石斧 摩製石斧の頭部の残欠である。縫泥片岩製、竹ノ下地区より出土(29)
- ・ 石包丁 半月形のものはなく、いずれの形状も短冊形であり、摩製で2穴を有するもの(7)2穴を有し、かつ両端に抉り込みを入れるもの(4)、無穴のもの(18、20、25、26)完全に摩製とせざ剥離面を残して両端に抉り込むもの(2

- 3)などの形狀の石包丁が各遺構中より出土している。
- ・その他にその形狀は完全ではないが、皮剥ぎを目的とした利器として、(4、8、11、12、27、30)の石器が出土している。

・砾 石 各遺構より数多く出土しているが、粘板岩のものは少なく、伊予郡砥部町周辺より出土するいわゆる伊予砾と称される砂岩製で、使用痕が認められる。

その他石製品として、車輪石(33)、鍛錬車(8)の出土がある。

#### 出土土器に関する若干の考察

全遺跡の出土遺物については、目下整理中であり、遺物の相互検討、周辺地域との比較等は、まだおはつかぬ現状であるので、詳細は本報告書に譲るものとする。

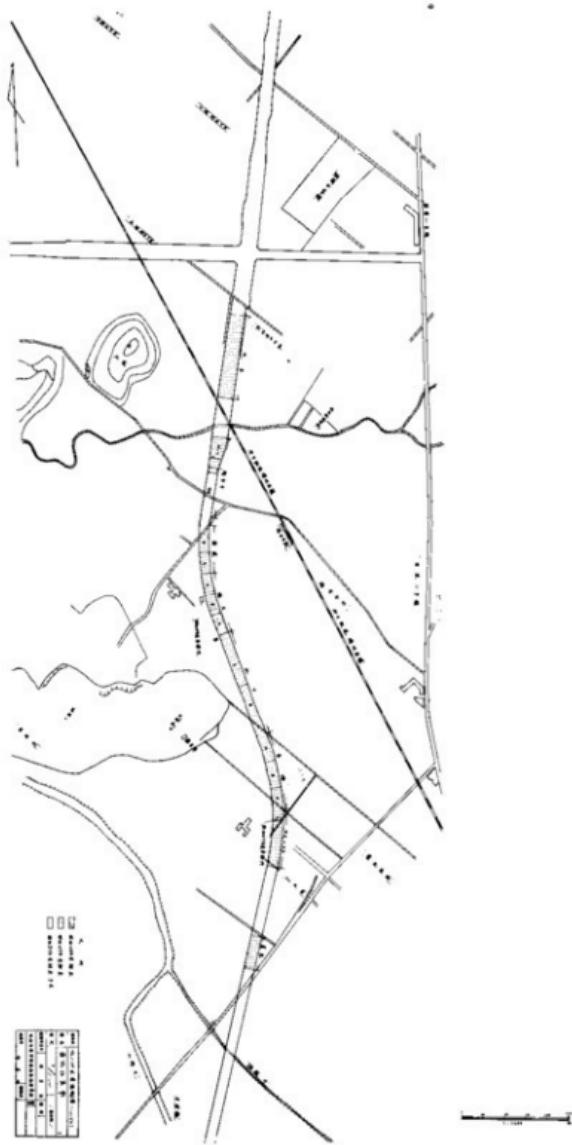
弥生式土器に関しては、弥生時代後期初頭より同終末期にかけての土器群と考えられ、胎土、焼成において、土師器と判別し難い土器も多い。

土師器に関しては、種々の形態の土器が出土したが、時期的に最も遡るのは、筋違A区、P D 8より出土している壺の「酒津式」に代表され、これに続いて、竹ノ下地区出土の「布留式」が続いており、またこれらに続くものとして類似する土器が、北下、常堰、旗立地区より出土しており、その多くは6世紀～7世紀にかけての土師器と考えられる。

須恵器に関しては、竹ノ下地区より出土する有蓋高壺をはじめとする一連の須恵器が古く、編年を求めるならば、「古照遺跡」出土の同類と同じく、5世紀末から6世紀初頭のものと考えられることがある。これらは古墳石室より出土するものに比べて、焼成、胎土、共に良好であり、長年の使用に耐えられ、生活に供するためのもの、という土器製作の意図が伺えるものと考えられる。

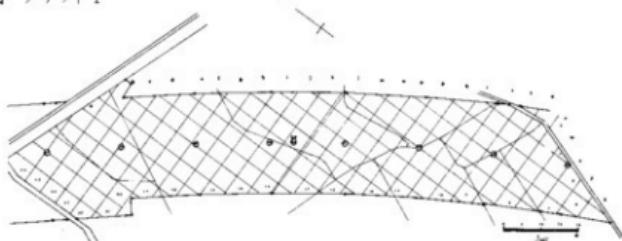
# 挿 図 図 版

第1図 地区区分図

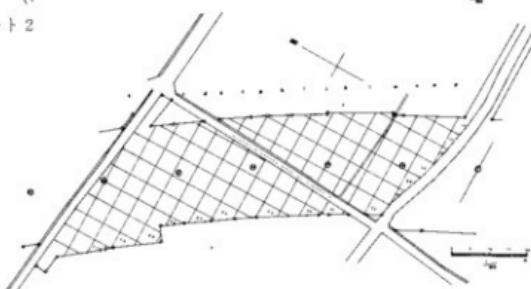


第2図 北久米遺跡常盤B区グリット1~4

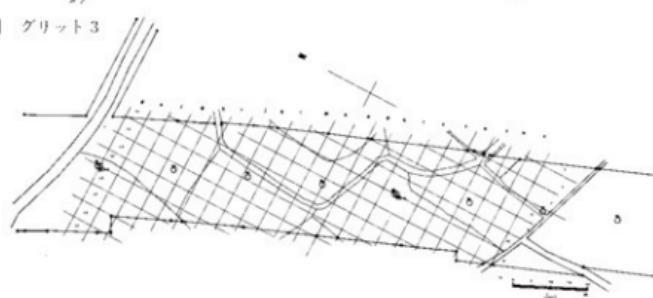
第2図 グリット1



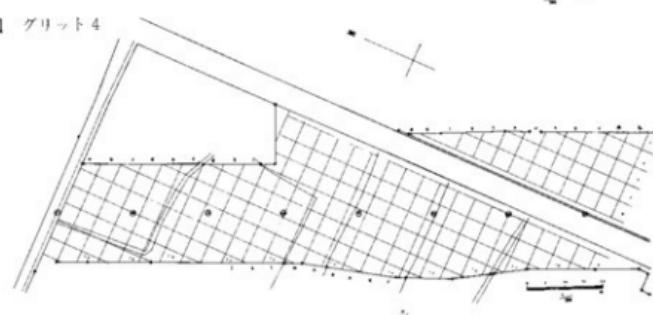
第2図 グリット2



第2図 グリット3



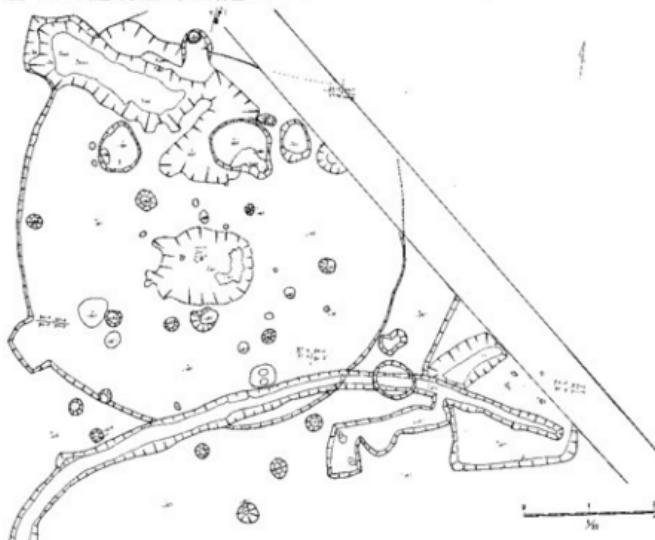
第2図 グリット4



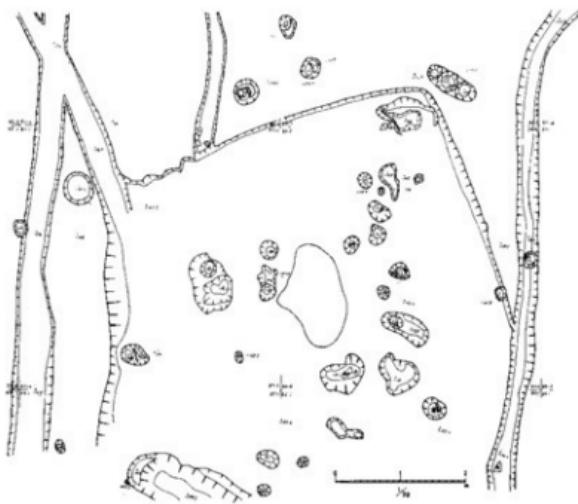
第3図 星ノ岡遺跡旗立B・C区全測図



第4図 岐ノ岡遺跡旗立B区住居址P D-1



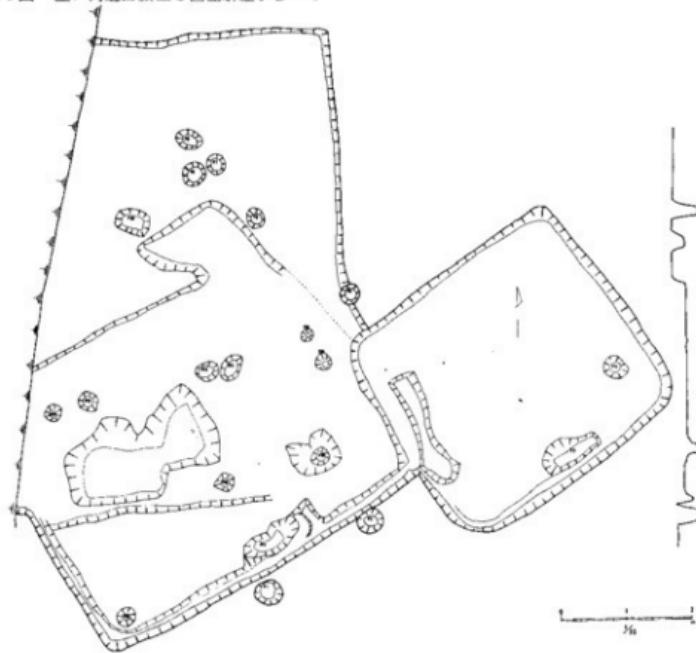
第4図 岐ノ岡遺跡旗立B区住居址P D-2



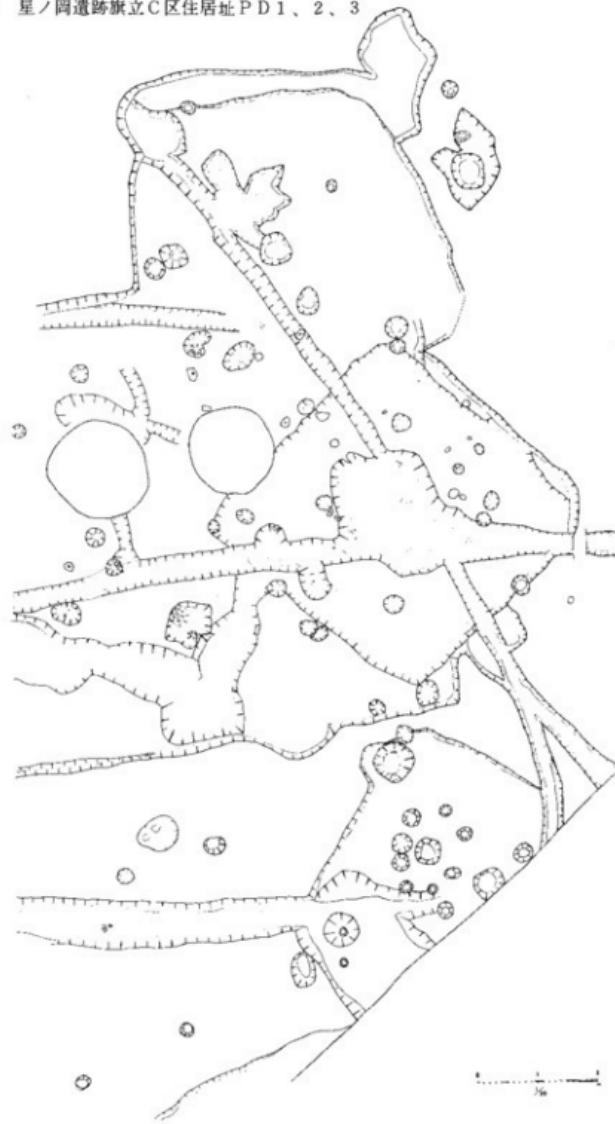
第5図 星ノ岡遺跡旗立B区住居址PD-5



第5図 星ノ岡遺跡旗立C区住居址PD-4



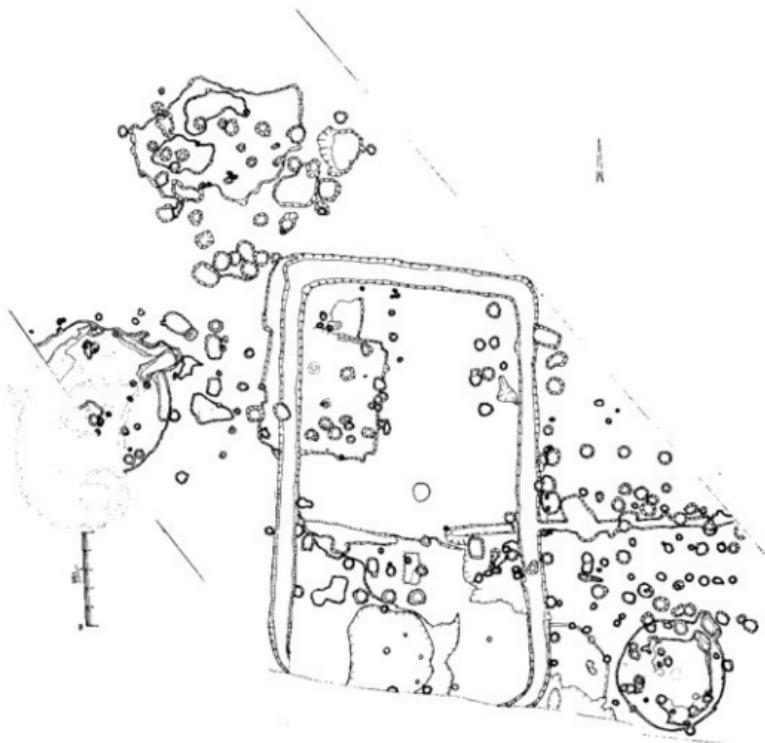
第6図 星ノ岡遺跡旗立C区住居址 P D 1、2、3



第7図 福音寺遺跡筋道A区全測図



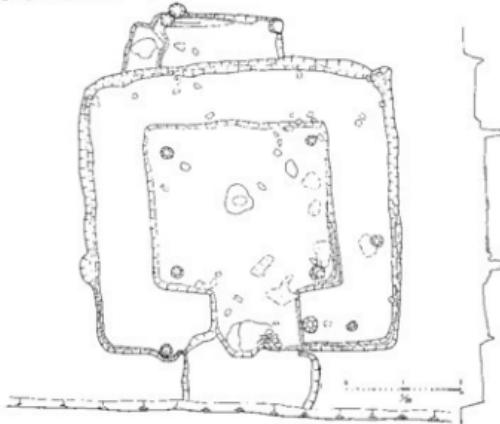
第8図 福音寺遺跡発掘B区全洞図



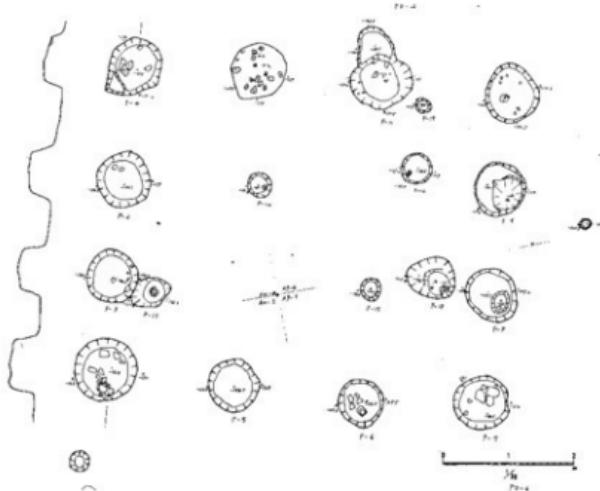
第9図 福音寺遺跡筋達A区住居址 P D - 4



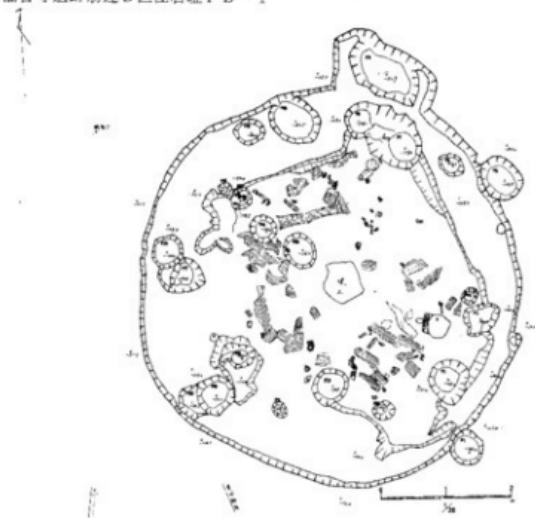
第9図 福音寺遺跡筋達A区住居址 P D - 8



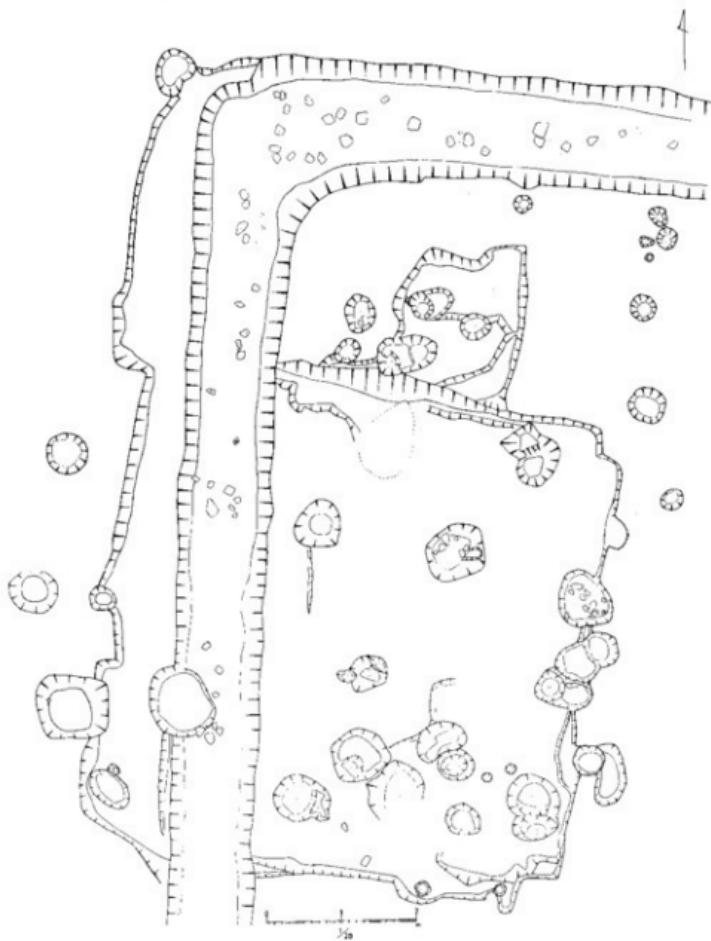
第10図 福音寺遺跡筋違B区掘立柱式建物1



第10図 福音寺遺跡筋違B区住居址 P.D.-1



第11図 福音寺遺跡筋造B区住居址P D-4と周溝部分図

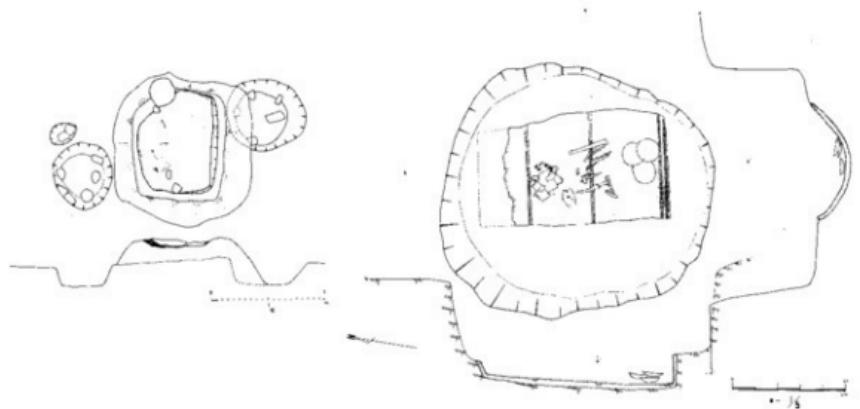


第12図 福音寺遺跡筋道B区住居址 P D - 5

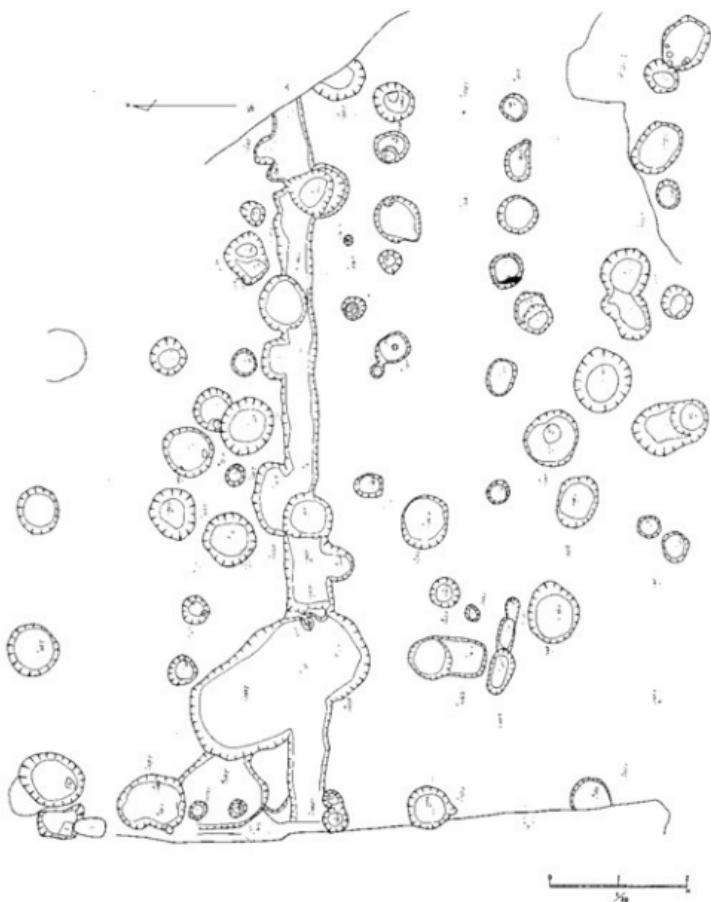


第12図 火葬墓

第12図 土塚墓



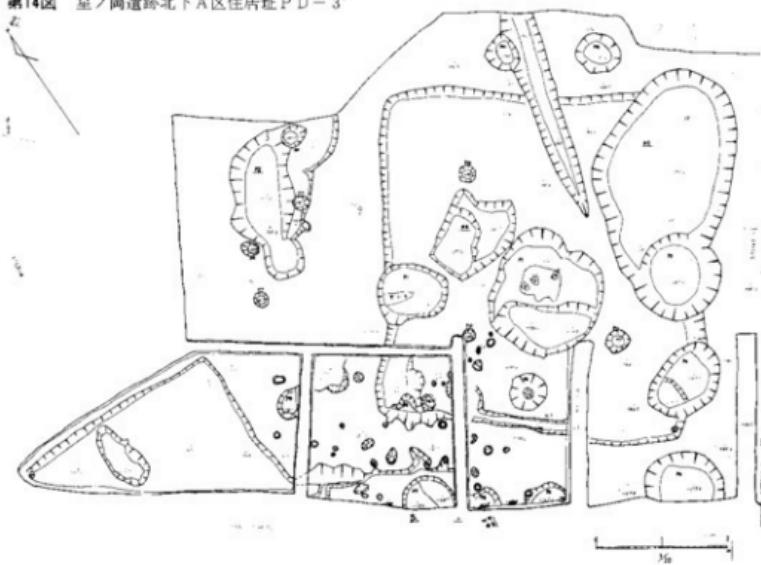
第13図 福音寺遺跡筋造B区A溝周辺



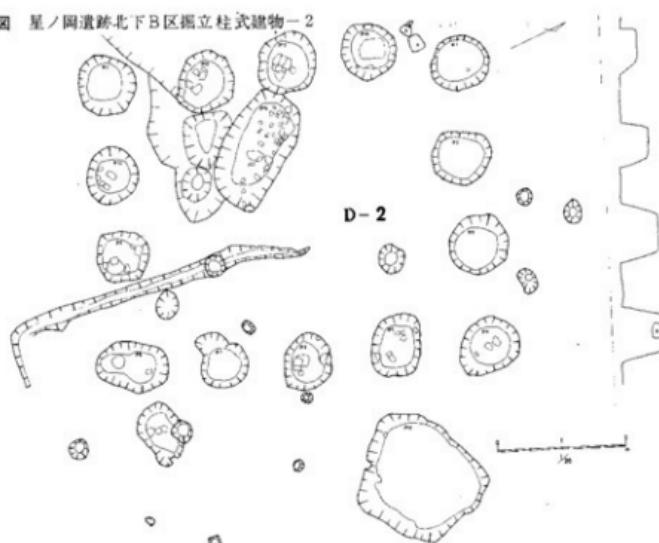
第14図 星ノ岡遺跡独立B区集石遺構



第14図 星ノ岡遺跡北下A区住居址 P D - 3



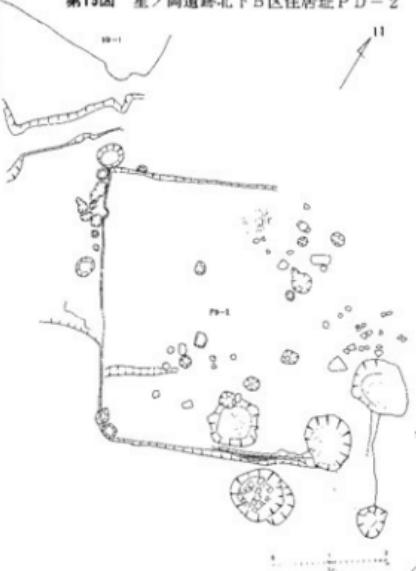
第15図 星ノ岡遺跡北下B区掘立柱式建物-2



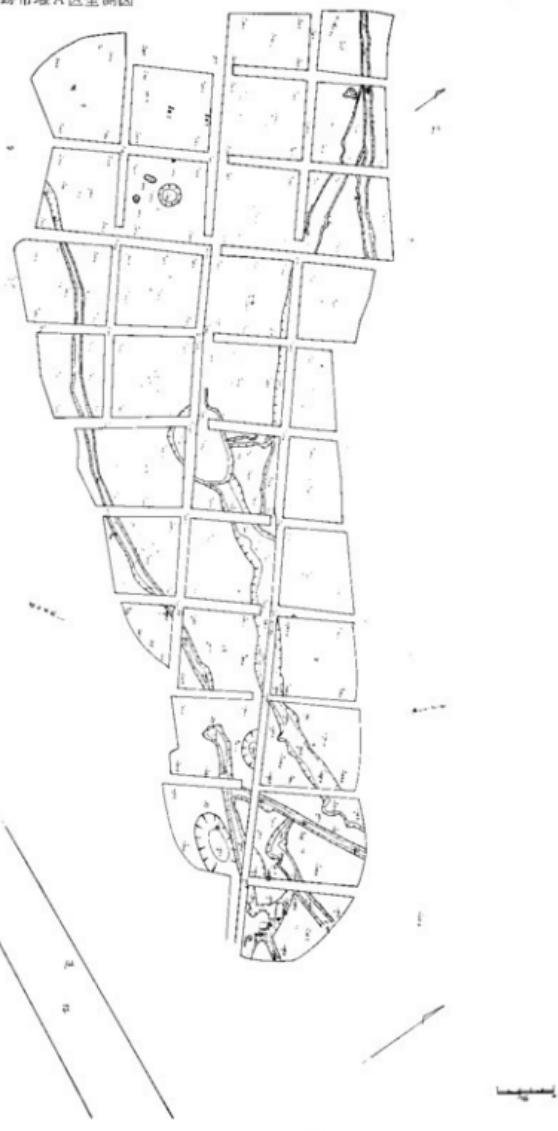
第15図 星ノ岡遺跡北下B区住居址 P D-1



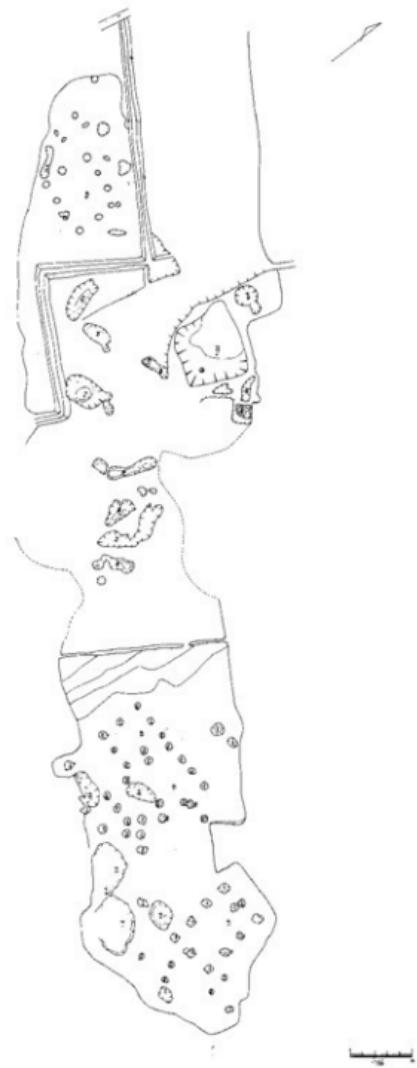
第15図 星ノ岡遺跡北下B区住居址 P D-2



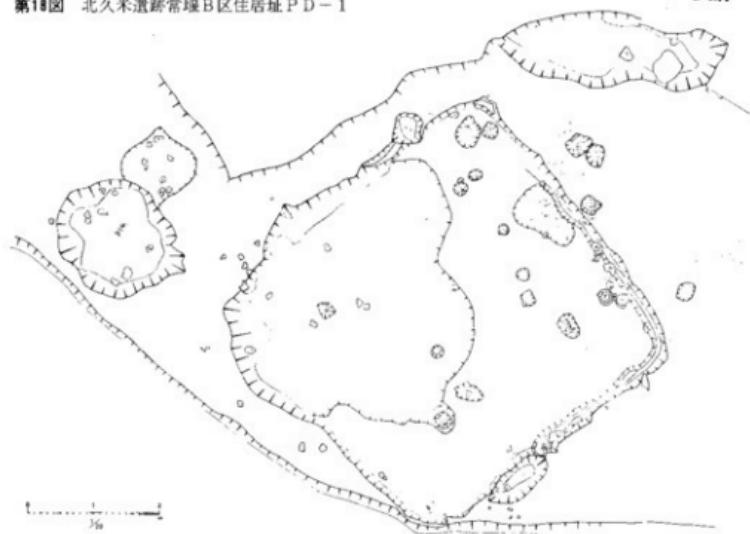
第16圖 北久米遺跡常堀A区全測図



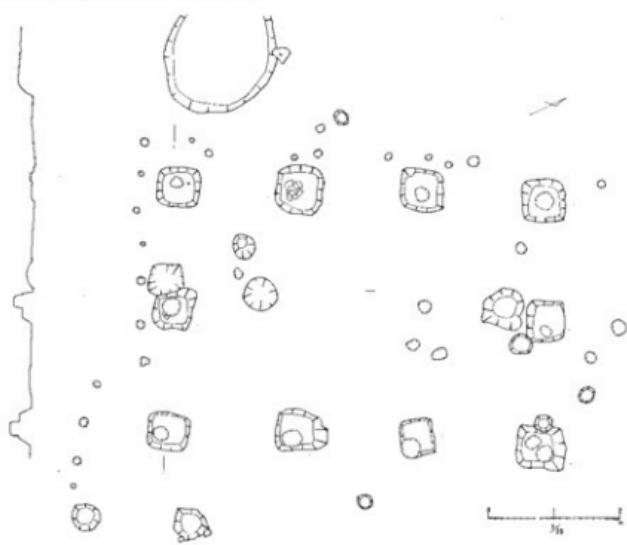
第17図 北久米遺跡常堀B区全測図



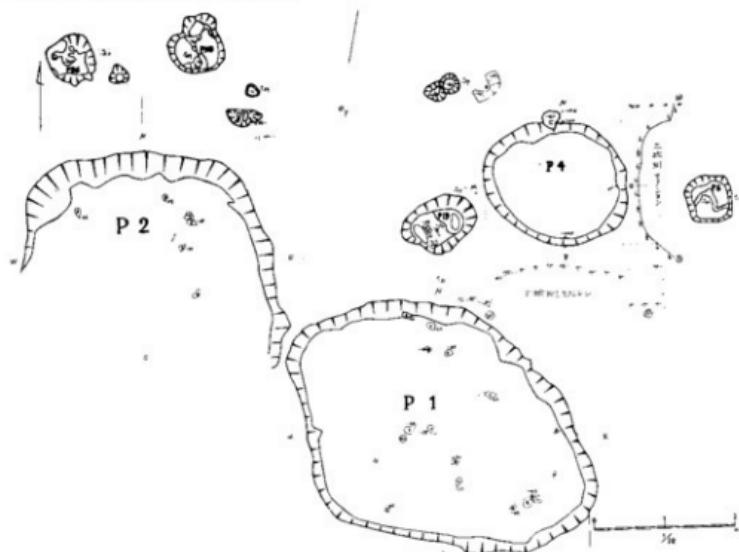
第18図 北久米遺跡常壠B区住居址 P.D.-1



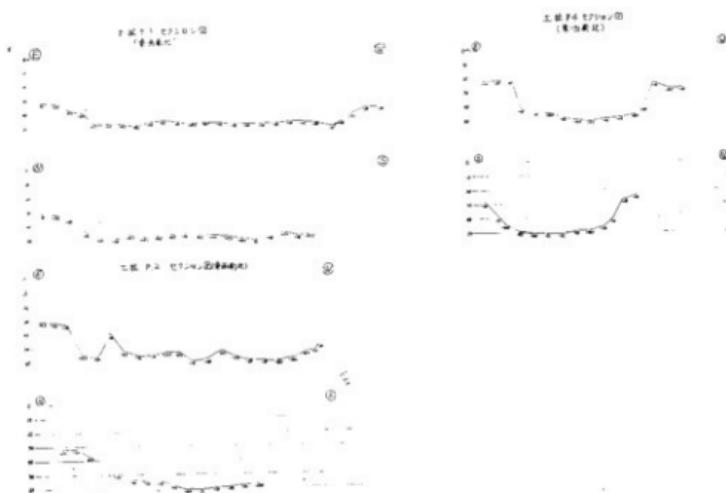
第18図 北久米遺跡常壠B区掘立柱式建物1



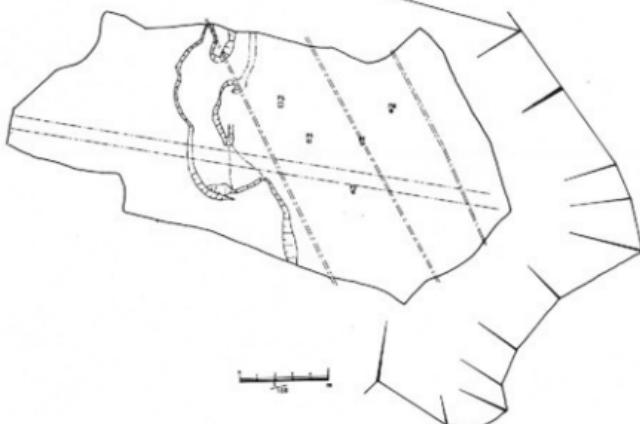
第19圖 北久米遺跡常堀B区土塁平面図



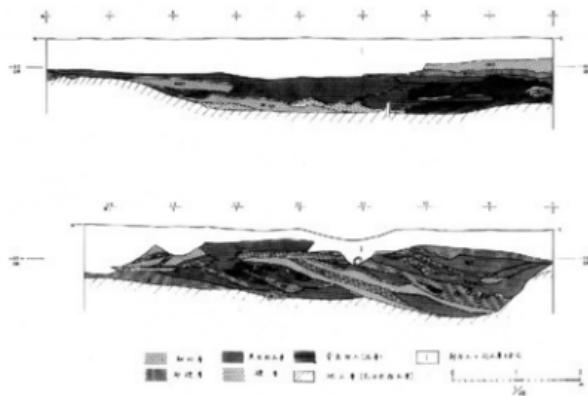
第19圖 北久米遺跡常堀B区土塁断面図



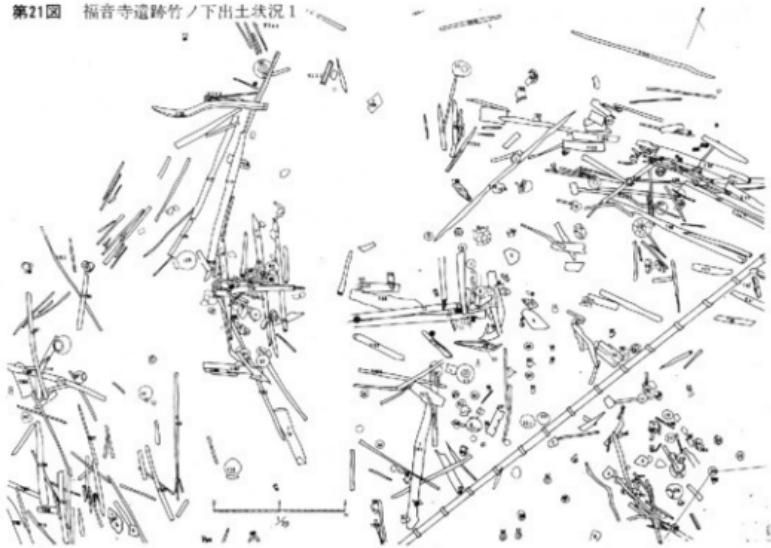
第20図 福音寺遺跡竹ノ下全測図



第20図 福音寺遺跡竹ノ下断面図



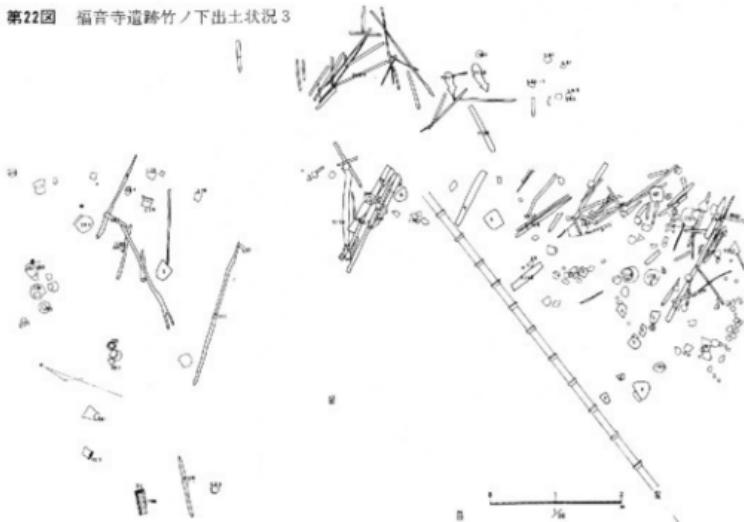
第21図 福音寺遺跡竹ノ下出土状況1



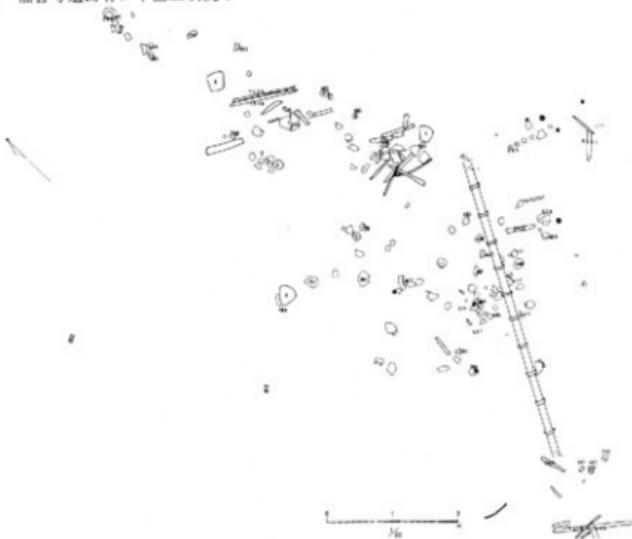
第21図 福音寺遺跡竹ノ下出土状況2



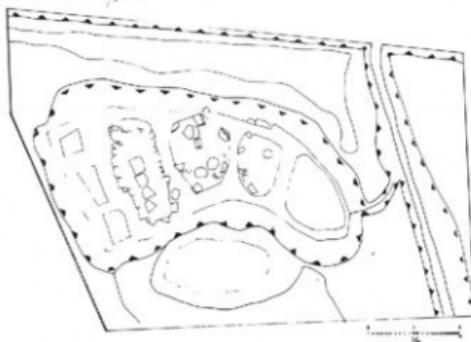
第22図 福音寺遺跡竹ノ下出土状況3



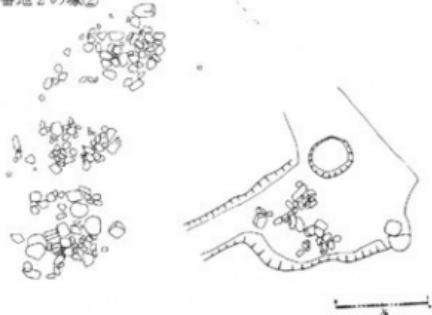
第22図 福音寺遺跡竹ノ下出土状況4



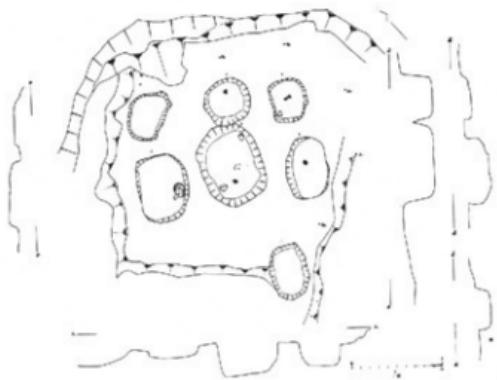
第23図 福音寺遺跡534番地2の塚①



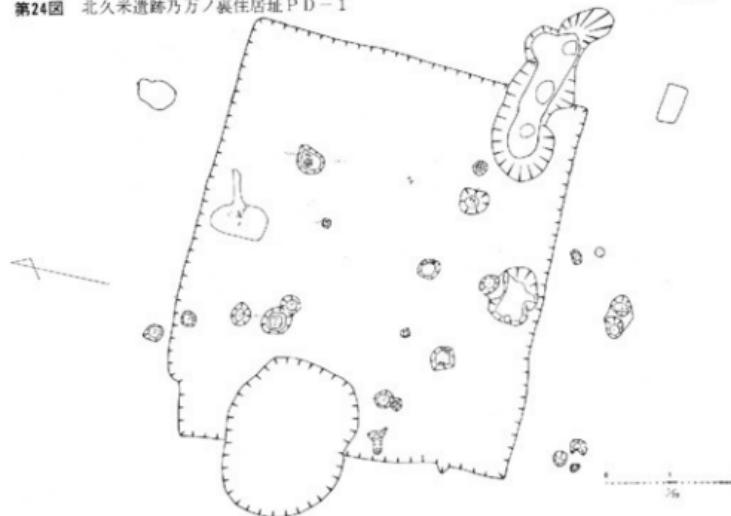
第23図 福音寺遺跡534番地2の塚②



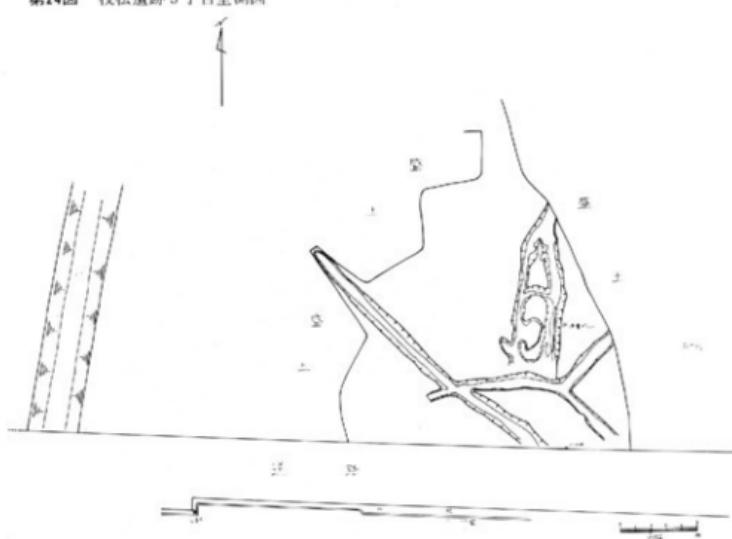
第23図 福音寺遺跡534番地2の塚③



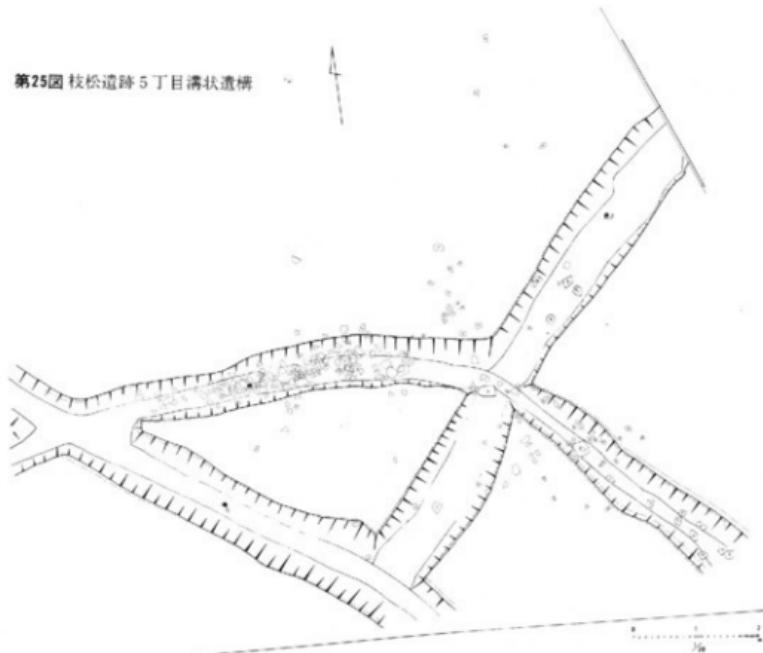
第24図 北久米遺跡乃万ノ裏住居址 P.D.-1



第24図 枝松遺跡 5丁目全測図



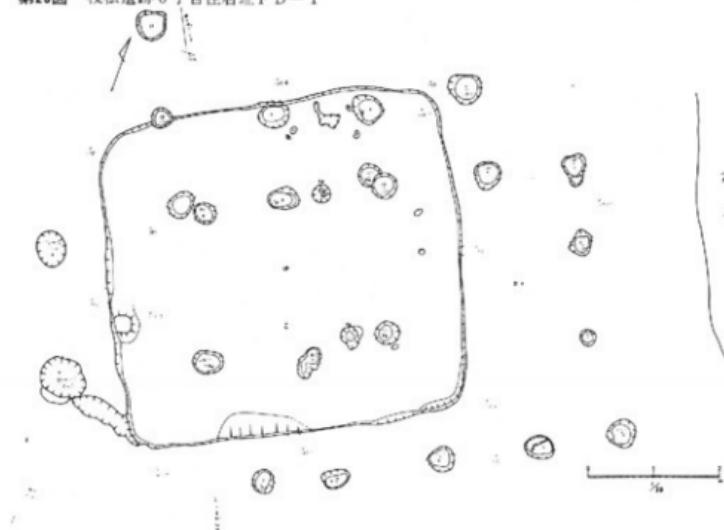
第25図 枝松遺跡 5丁目溝状遺構



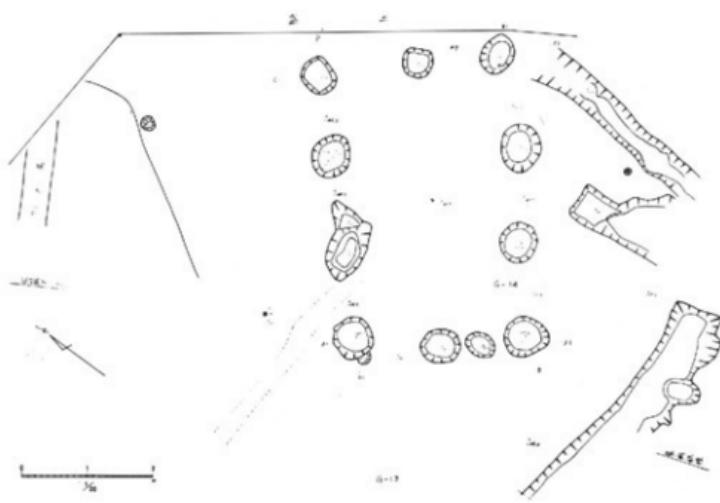
第25図 枝松遺跡 6丁目全測図



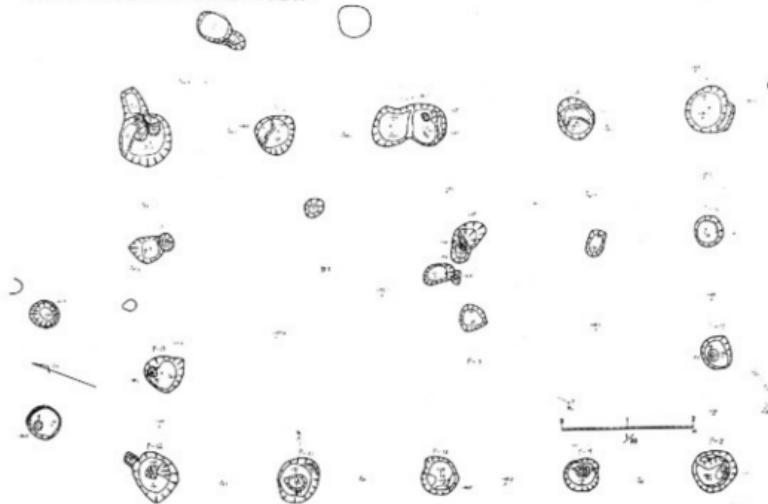
第26図 枝松遺跡 6丁目住居址 P D - 1



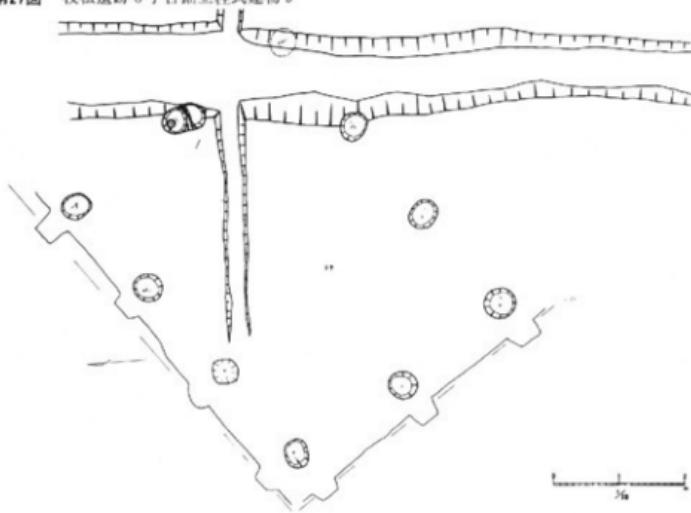
第26図 枝松遺跡 6丁目掘立柱式建物 1



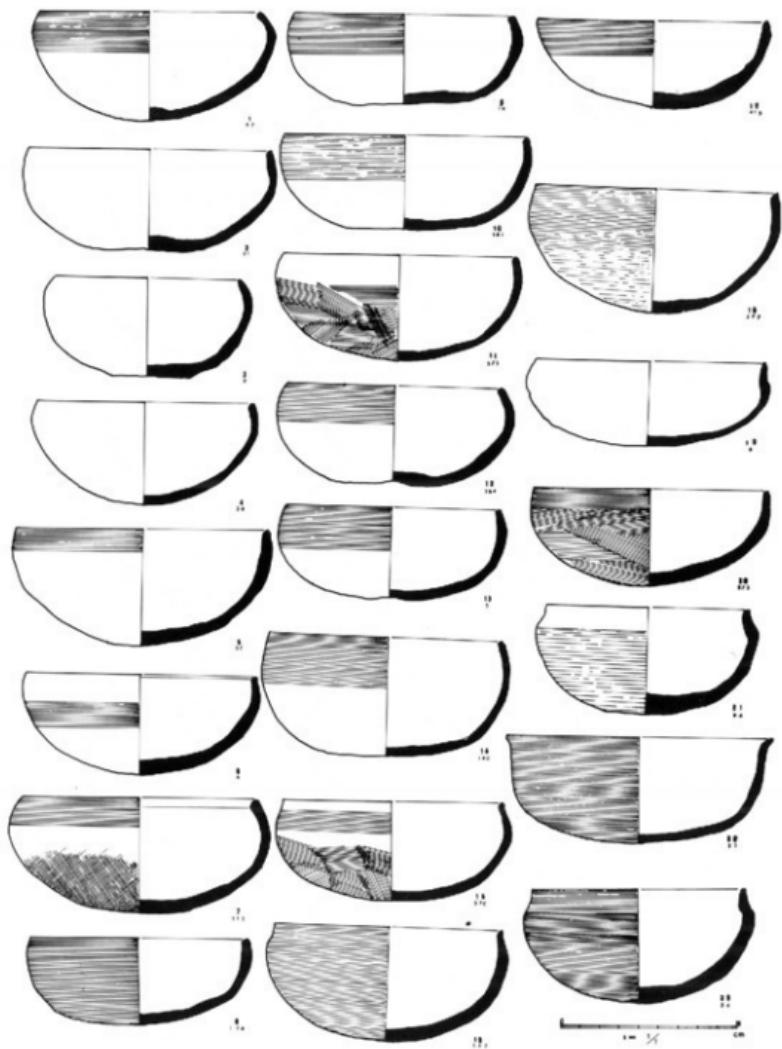
第27図 枝松遺跡 6丁目掘立柱式建物3



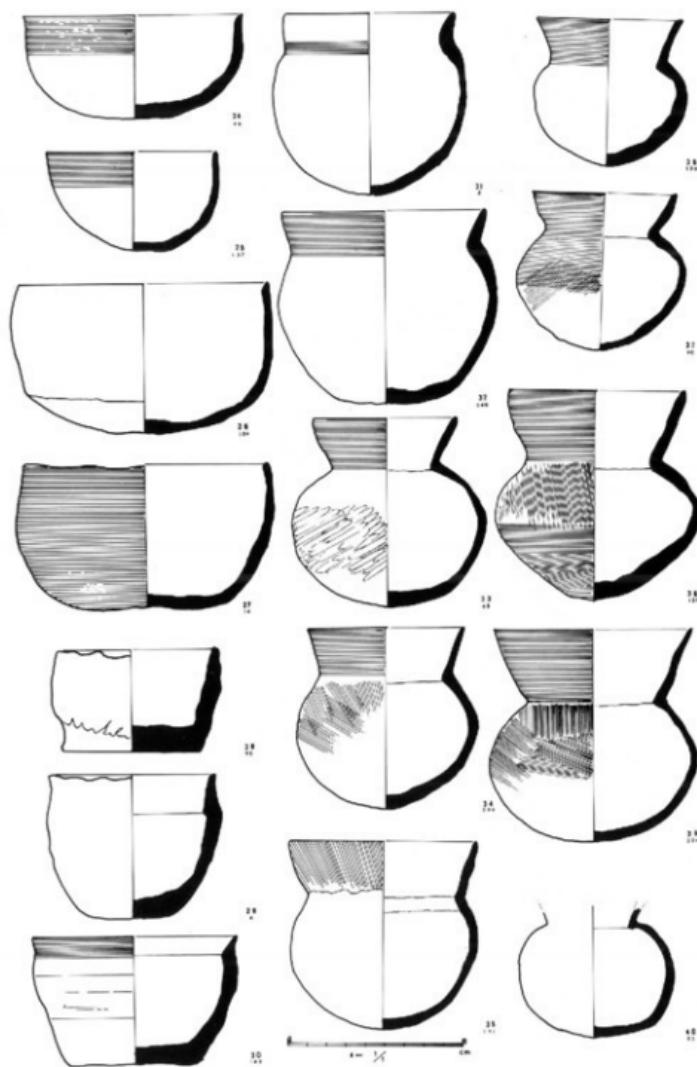
第27図 枝松遺跡 6丁目掘立柱式建物9



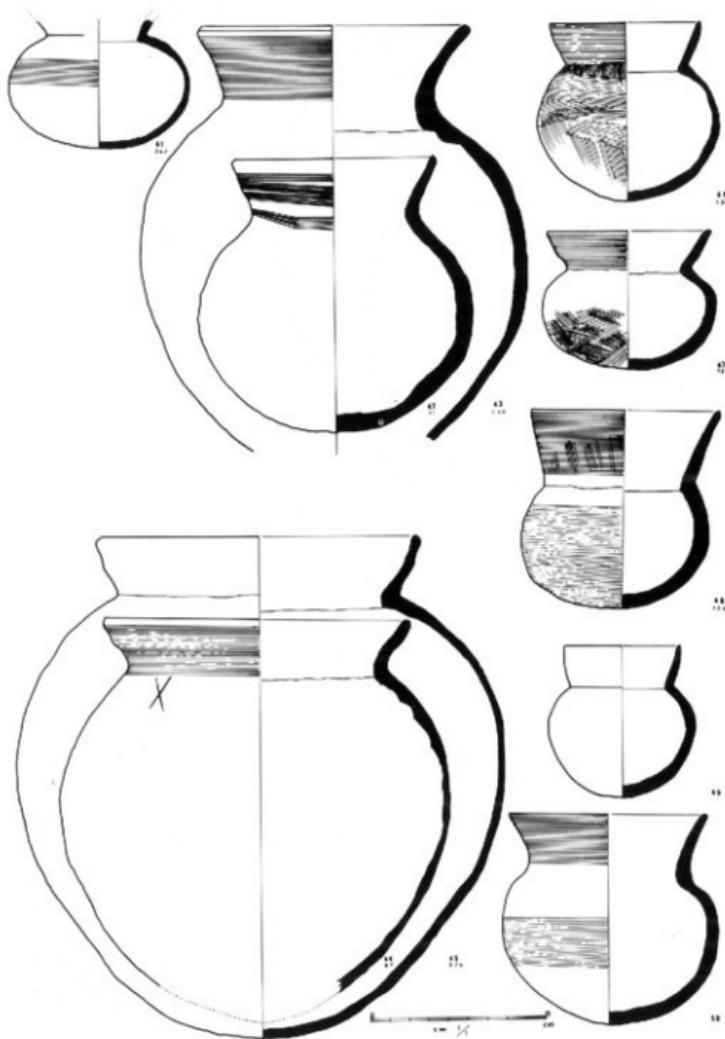
第28図 土器実測図1



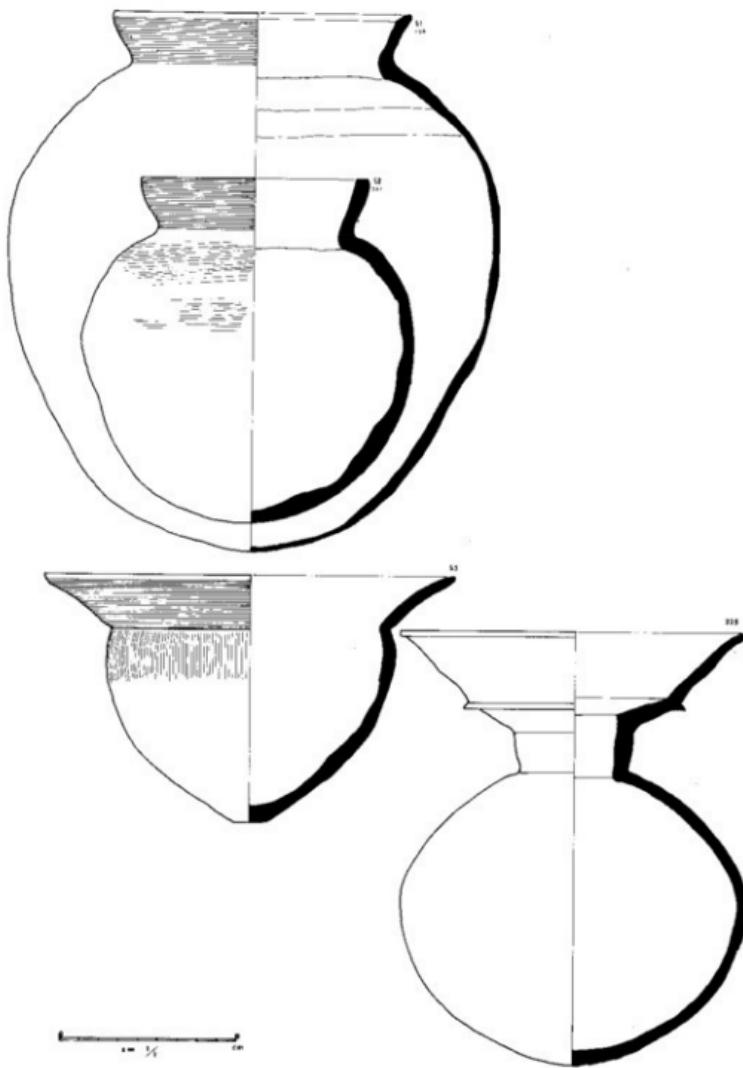
第29図 土師器実測図 2



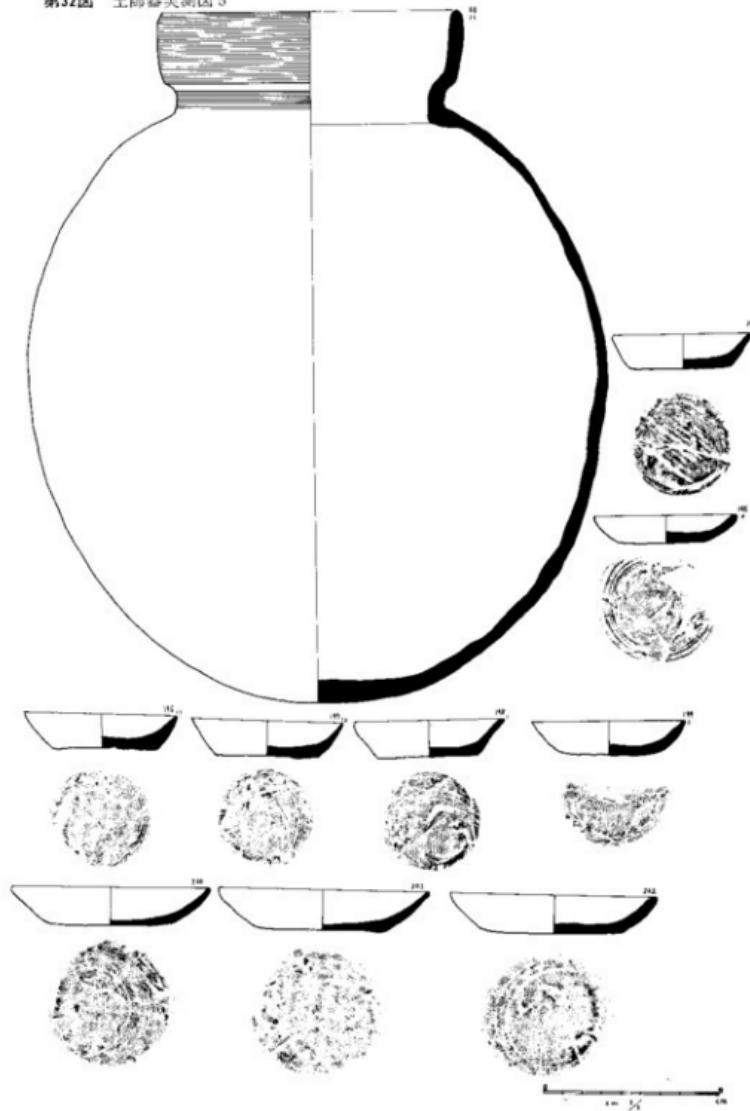
第30図 土師器実測図 3



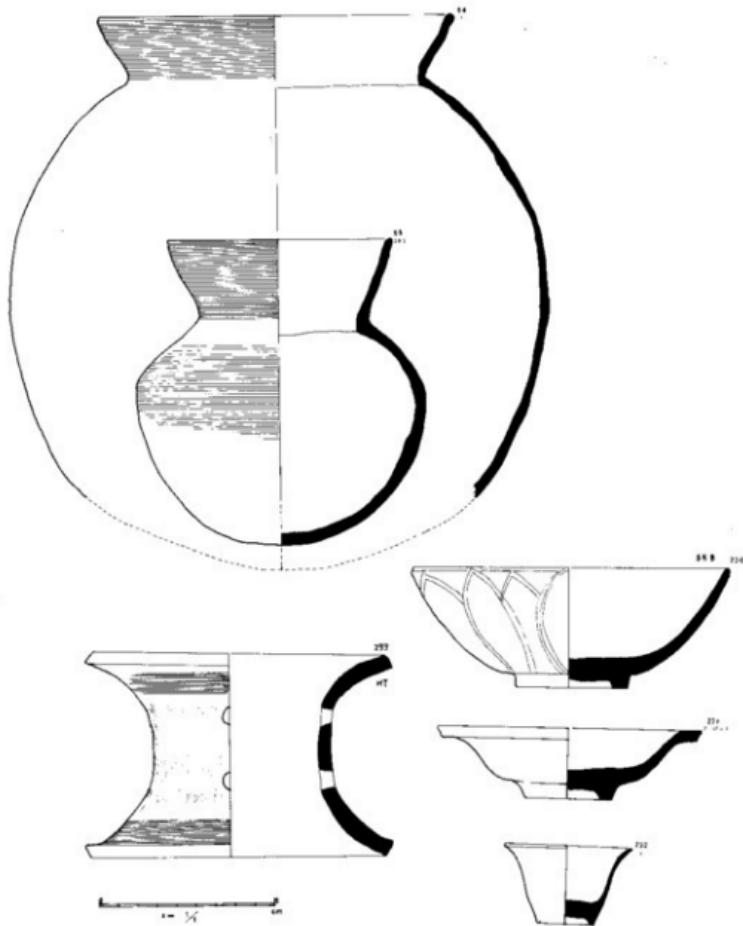
第31図 土師器実測図4



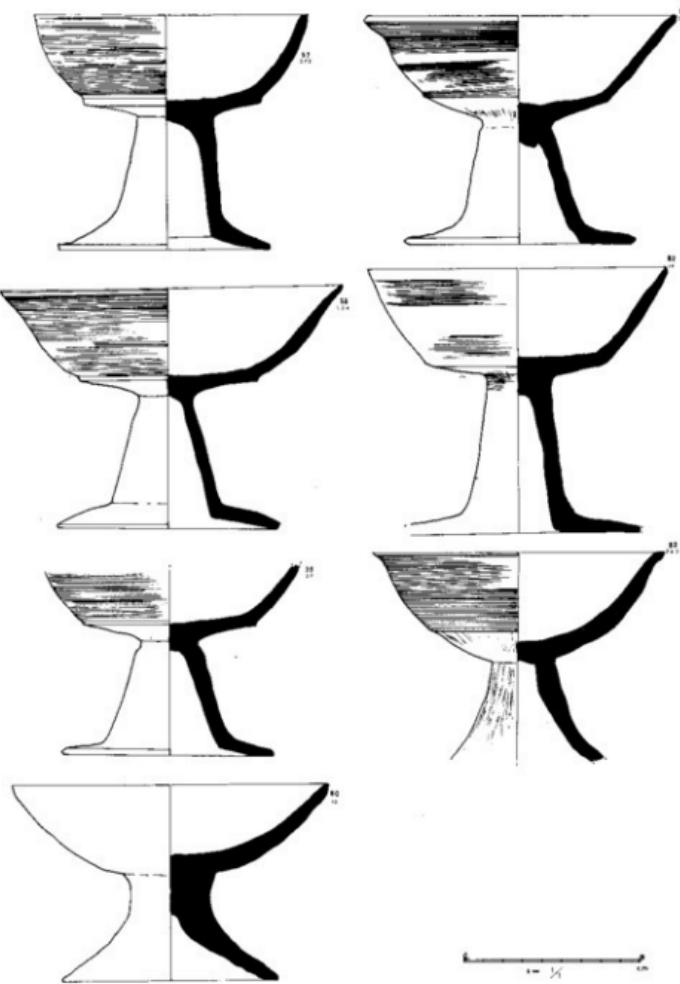
第32図 土器実測図 5



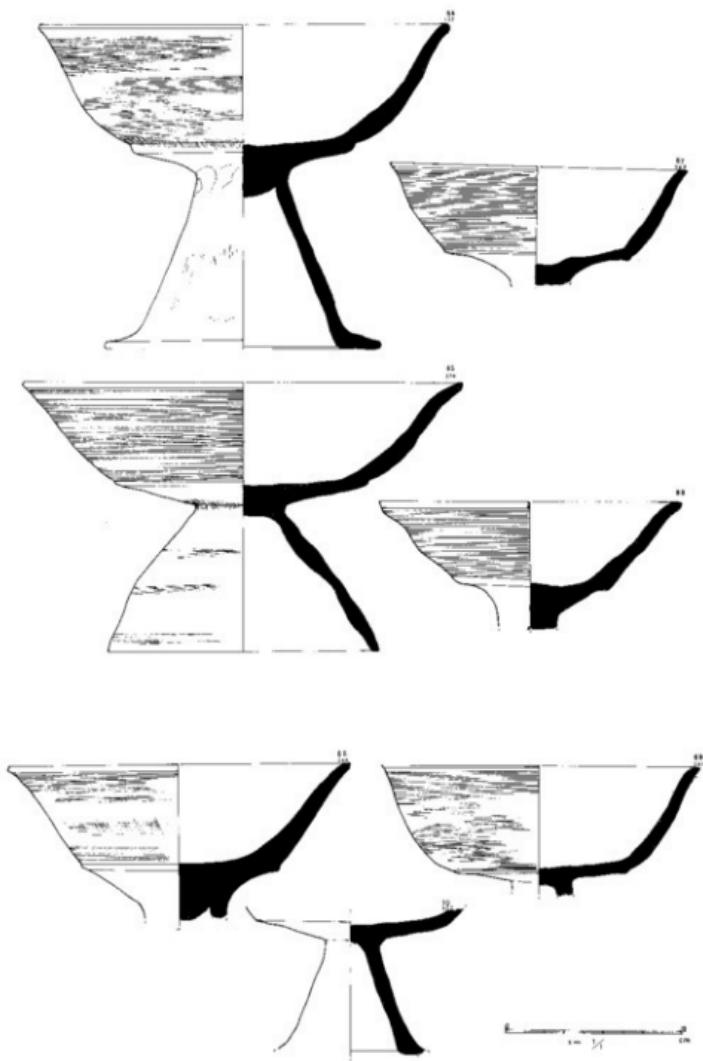
第33図 土師器実測図 6 ( 磁器 )



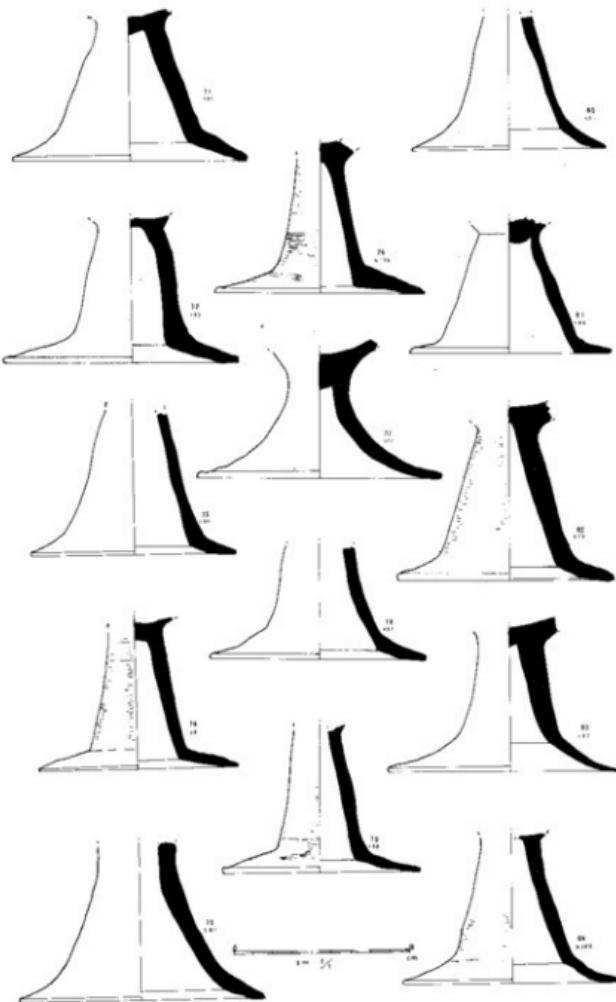
第34図 土師器実測図 7



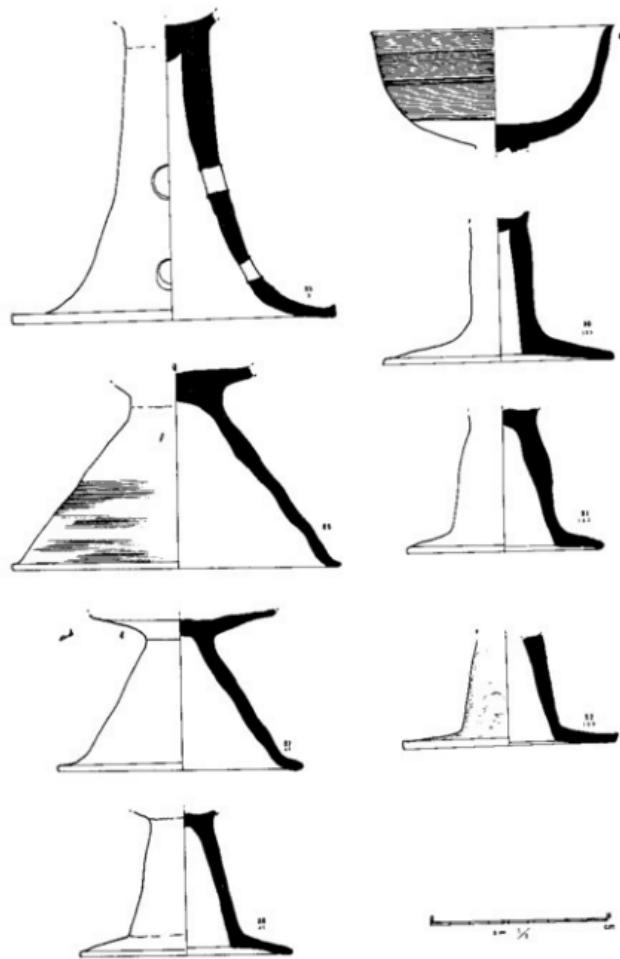
第35圖 土師器実測図 8



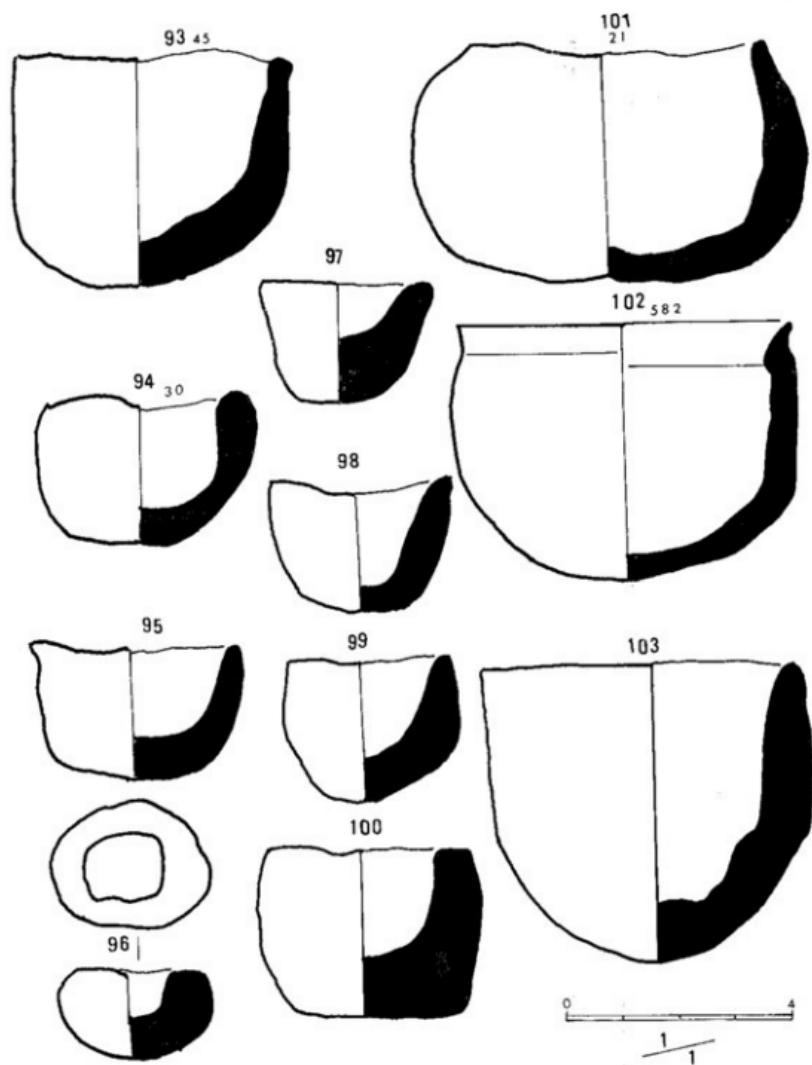
第36図 士帥器実測図 9



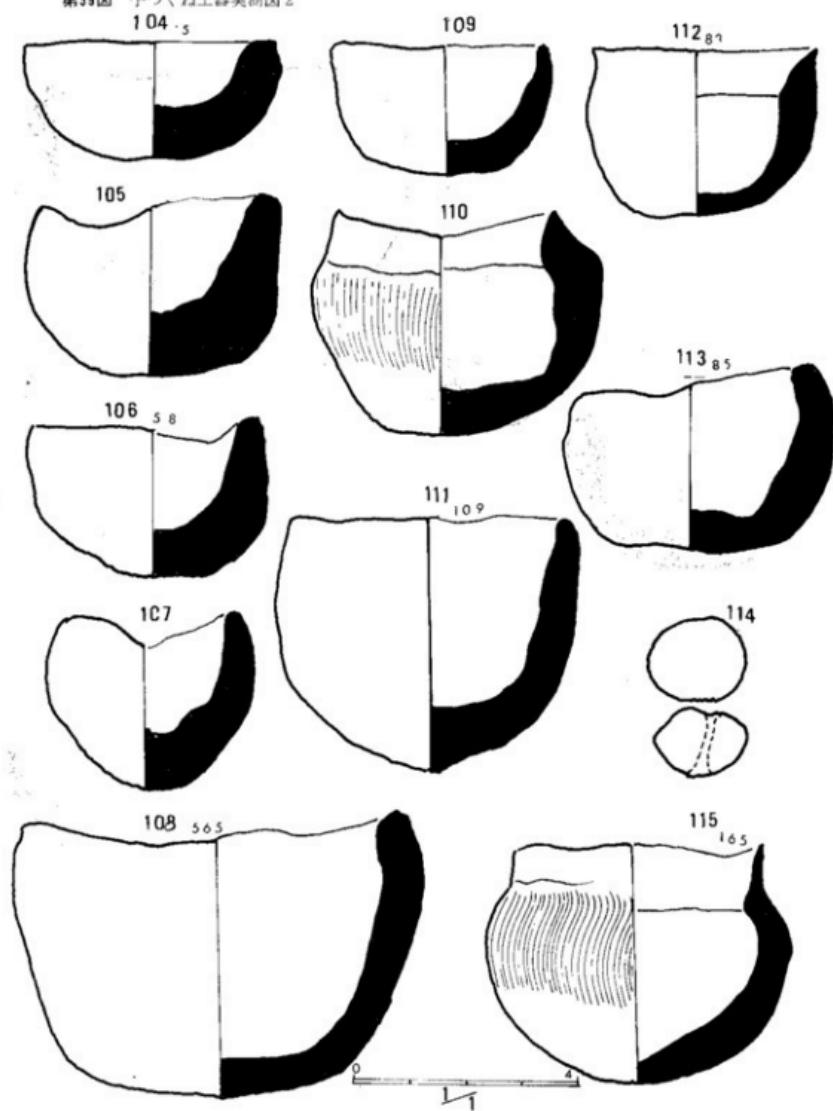
第37図 土師器実測図10



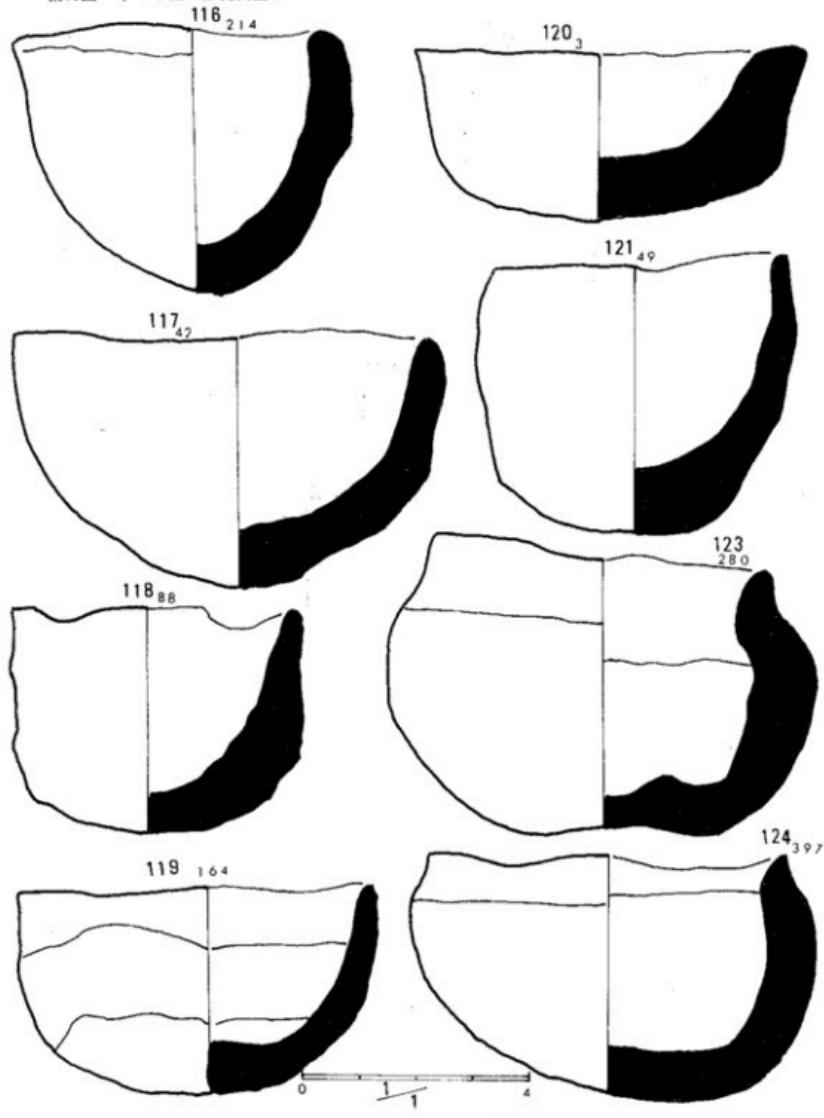
第38図 手づくね土器実測図 1



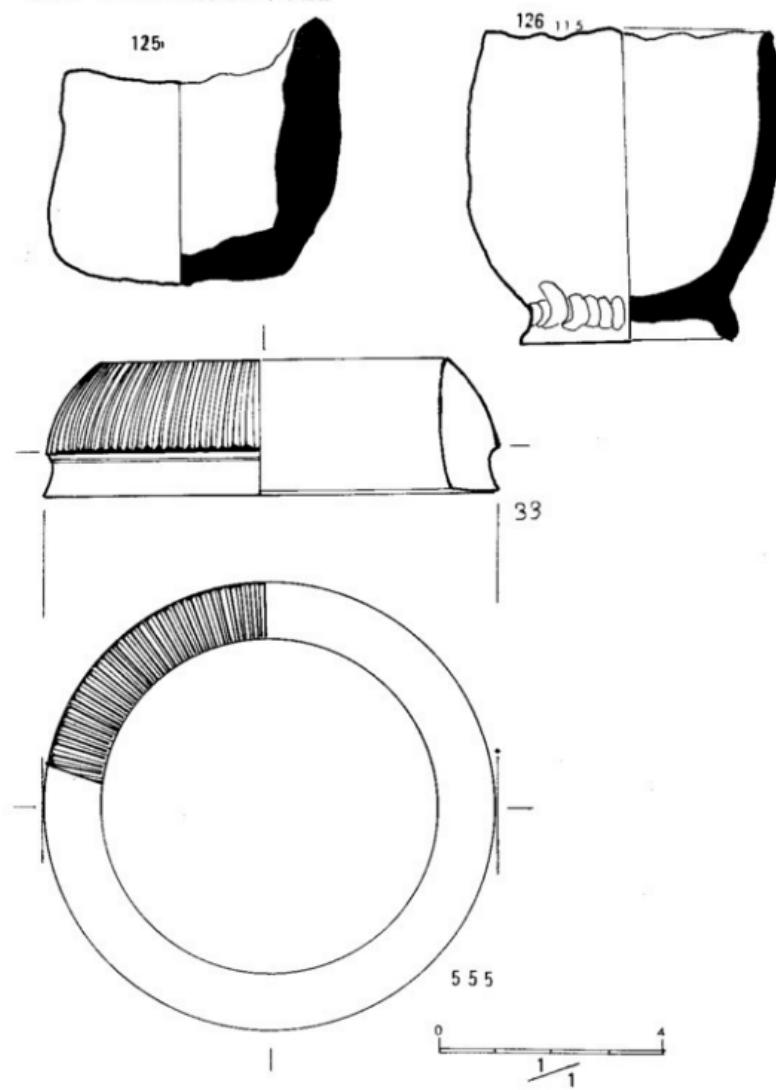
第39図 手づくね土器実測図 2



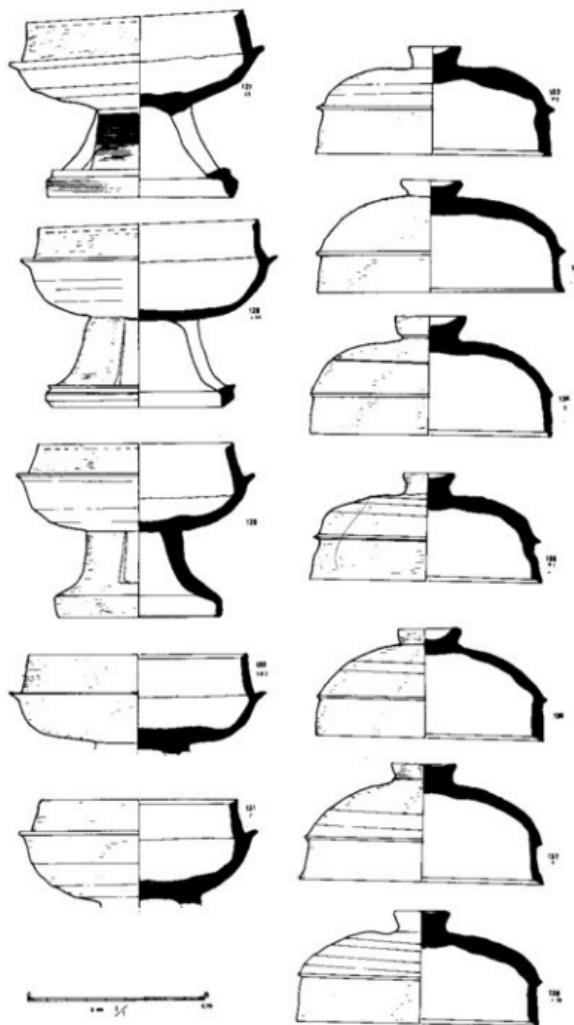
第40図 手づくね上器実測図 3



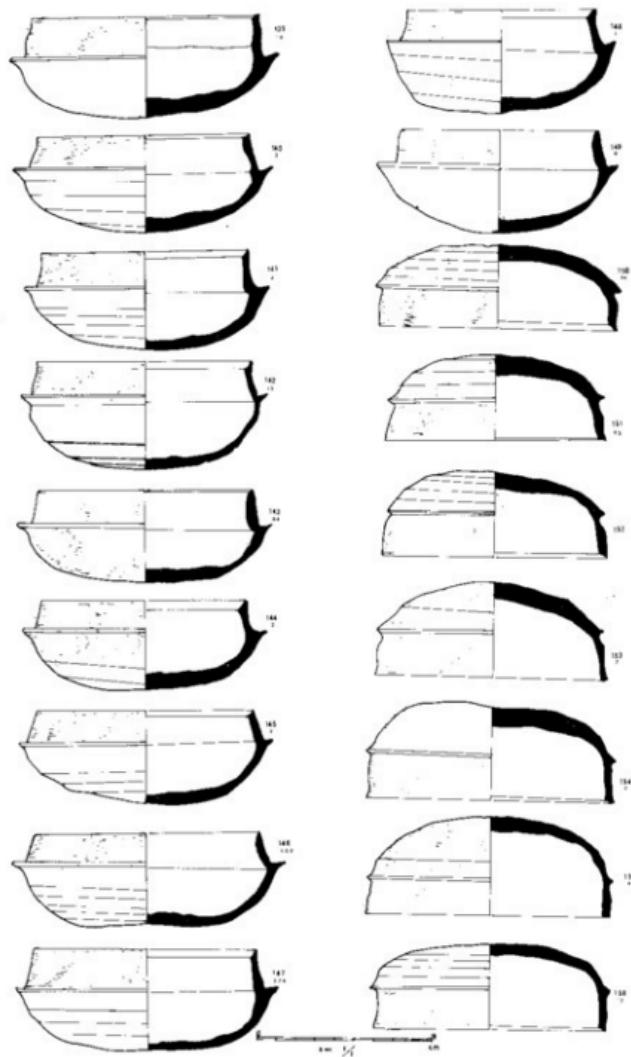
第41図 手づくね土器実測図4、車輪石



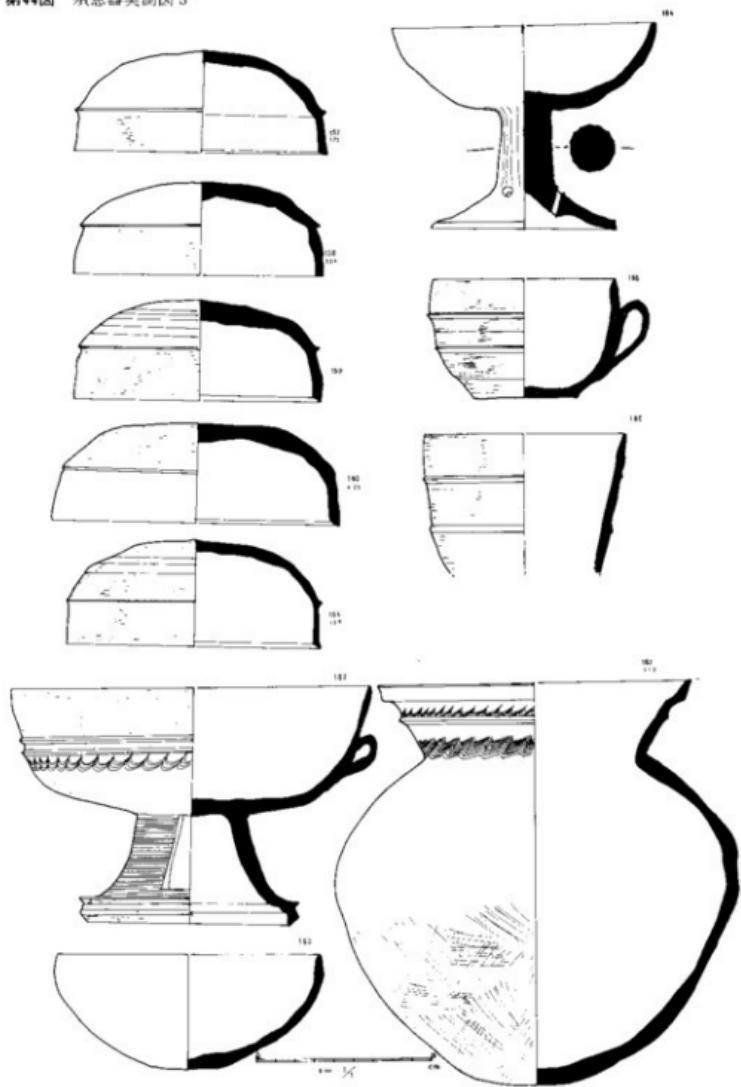
第42図 須恵器実測図 1



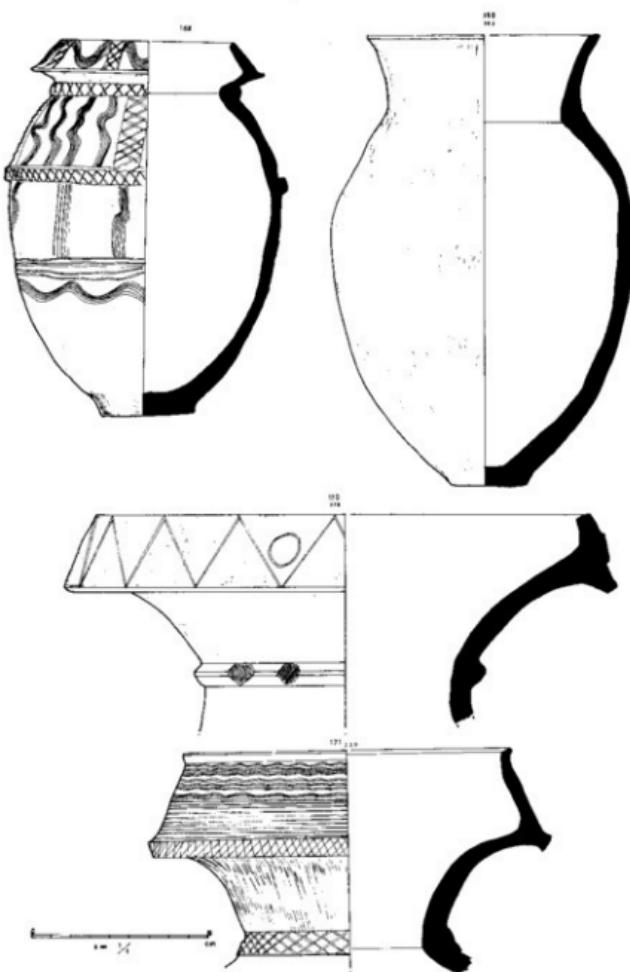
第43図 頸椎器実測図 2



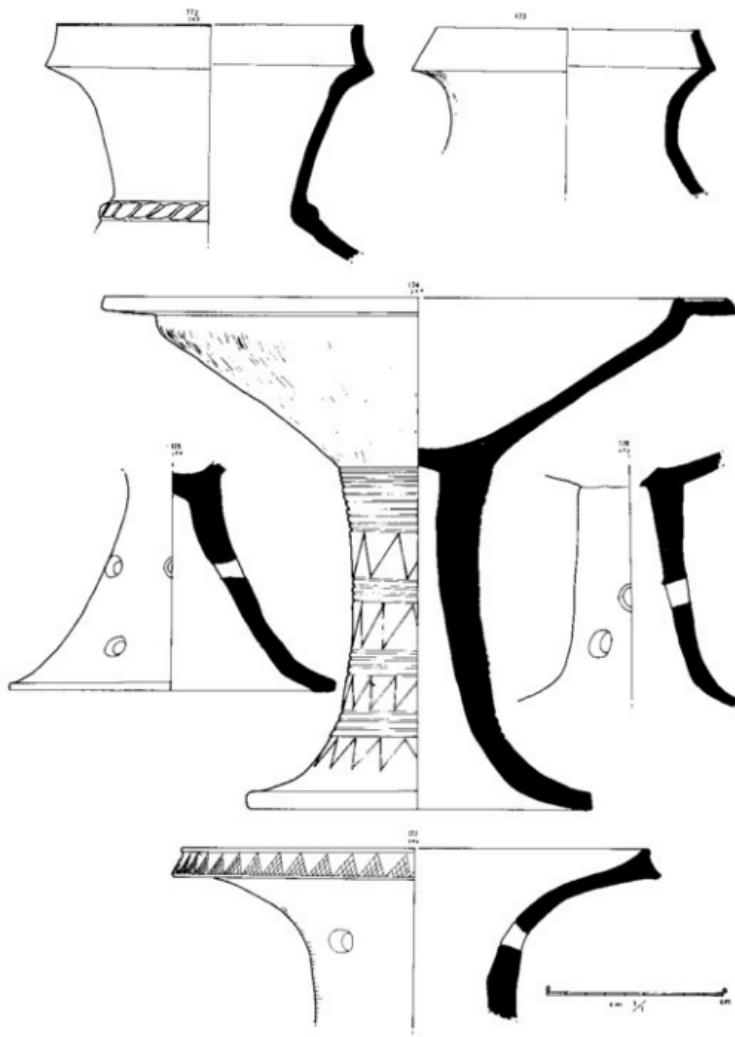
第44図 須恵器実測図 3



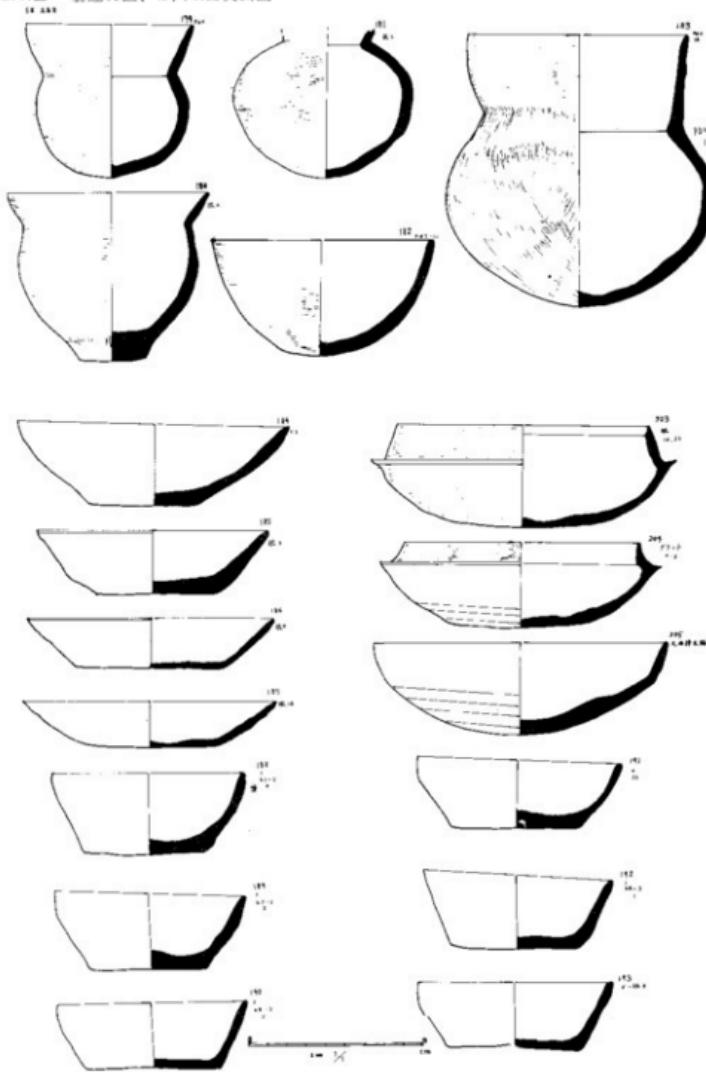
第45図 弥生式土器実測図 1



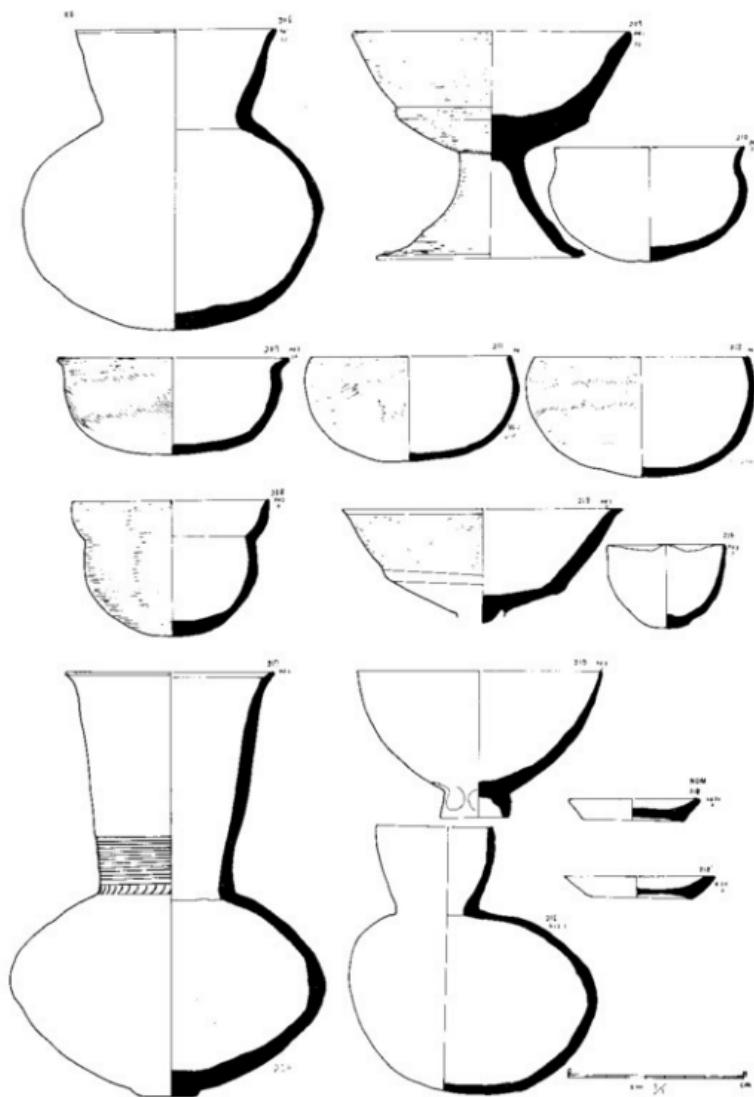
第46図 弥生式土器実測図 2



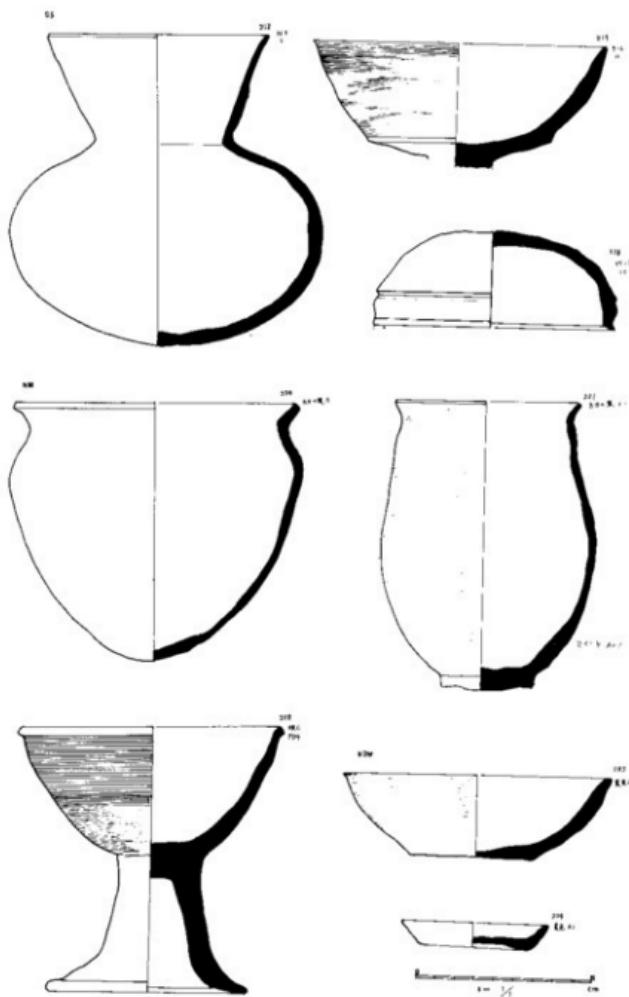
第47图 筛选A区、B区土器类陶器



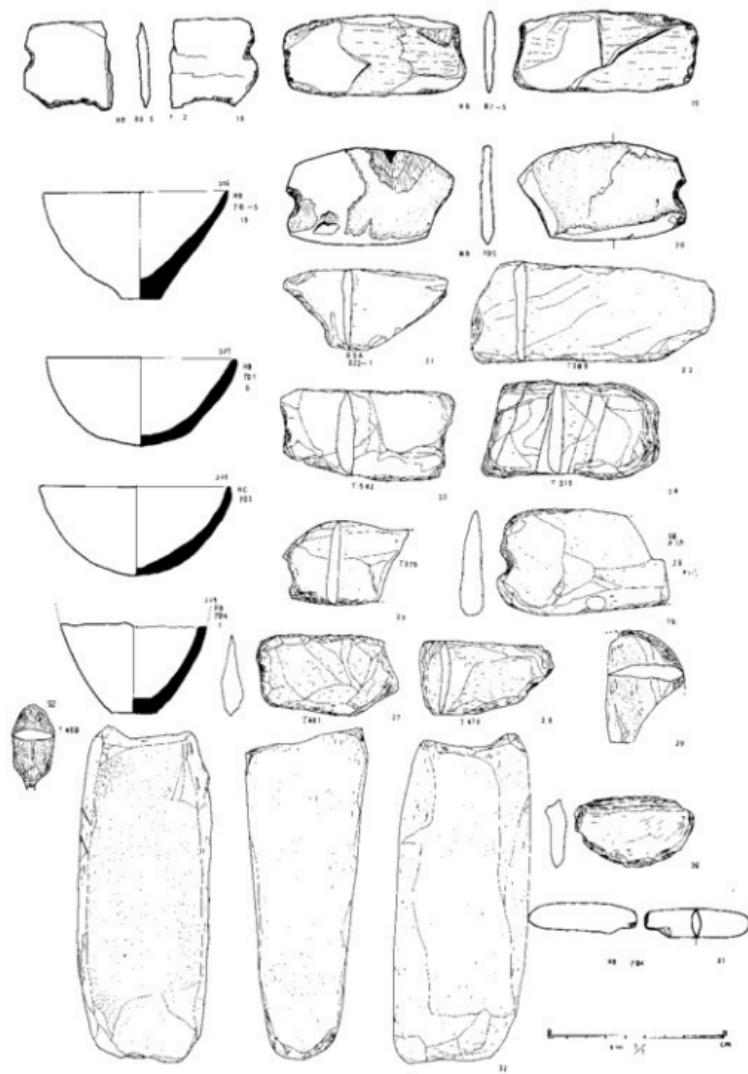
第48圖 獨立地區、北下B區土器尖底圖



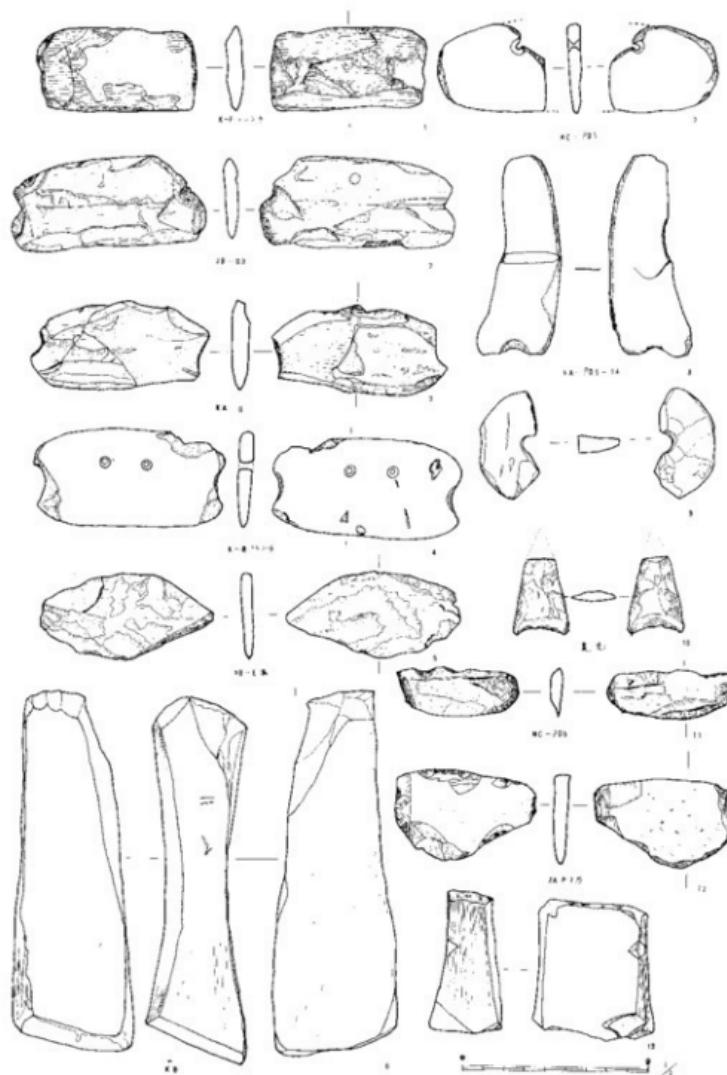
第49図 常堀、乃万の表土器実測図



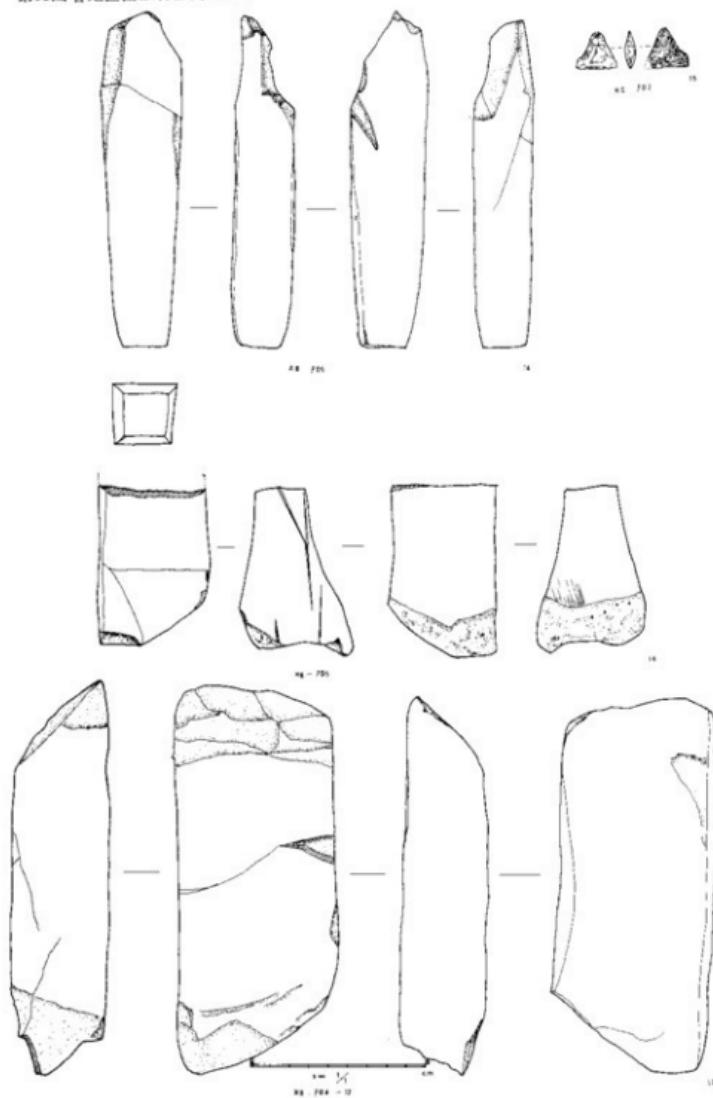
第50図 各地区出土石器実測図 1



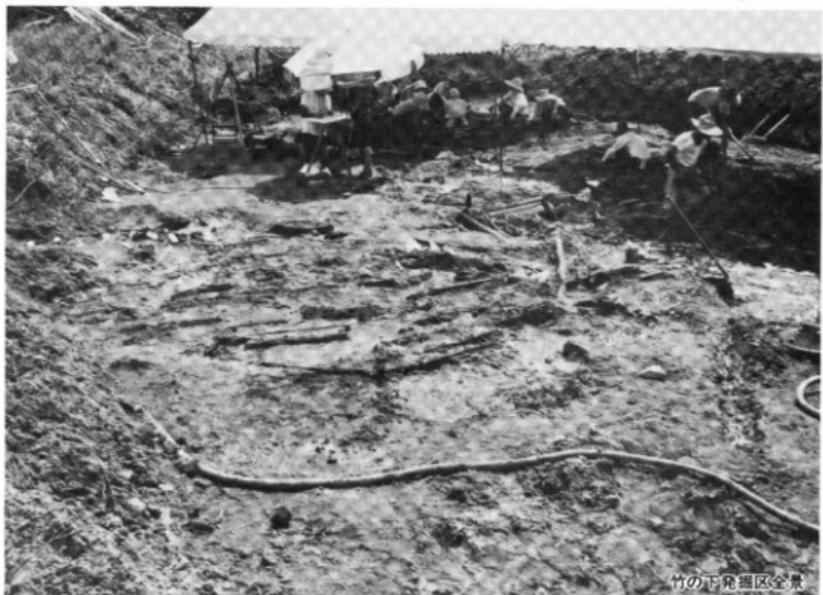
第51図 各地区出土石器実測図 2



第52圖 各地區出土石器尖頭圖 3



図版 1 図



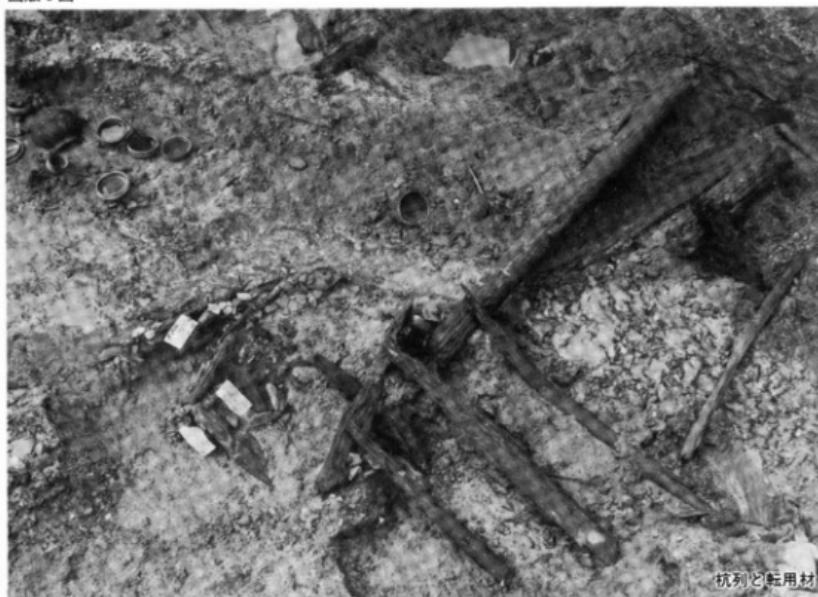
竹の下発掘区全景

図版 2 図



竹の下・ベルトコンベアの手前の位置が旧堤防

図版3図



杭利と伝用材

図版4<sup>1</sup>図



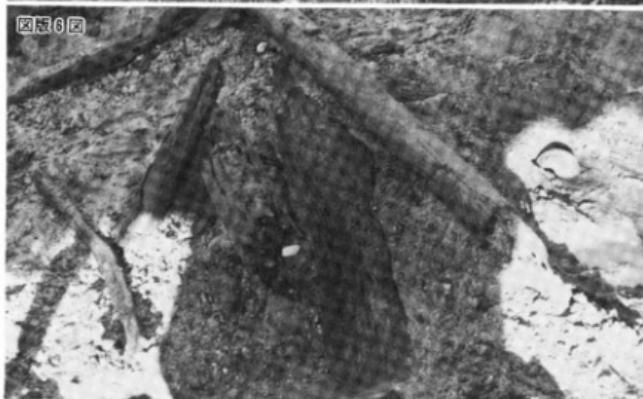
竹の下 木鉢のと土器の出土状況

図版5図



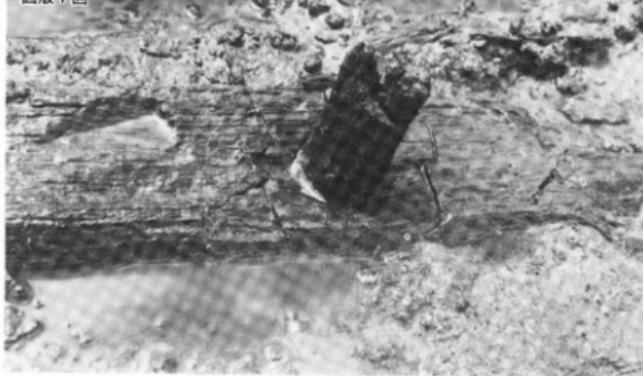
杭列と転用材

図版6図

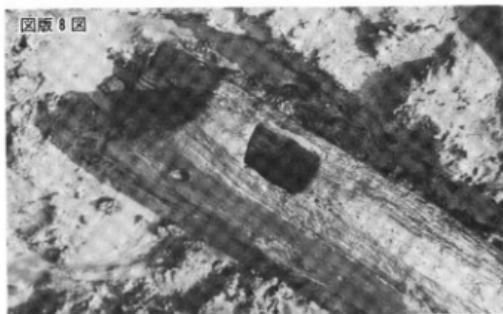


二段にしくまれた  
横材と杭列

図版7図

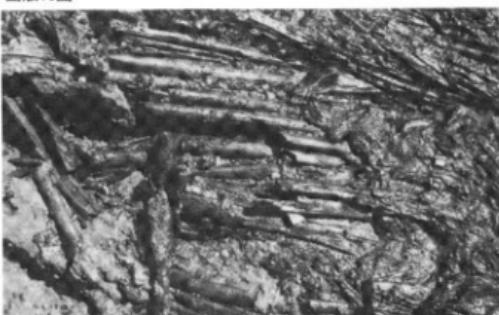


転用材の穴を利用して  
打ちとめられた杭



納穴のある転用材

図版10図



入念に列べられた補助材



造構に使用された転用材

図版12図



切斷面の  
残された  
未完成の  
木工具



図版14図



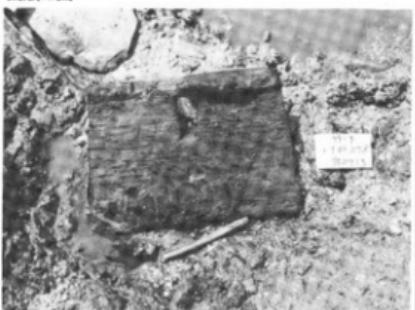
鍤の破損品

図版15図



農耕具

図版16図



破口状の農耕具

図版17図



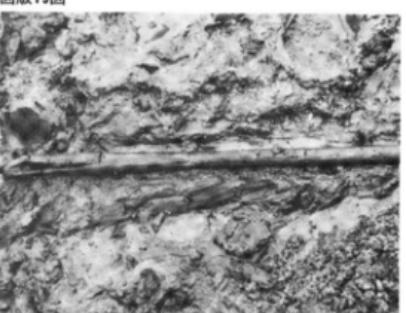
木工具

図版18図



加工材と板材

図版19図



鍤の柄

図版20図



かき棒

図版21図



鉄

図版22図



鉄

図版23図



鉄

図版24図



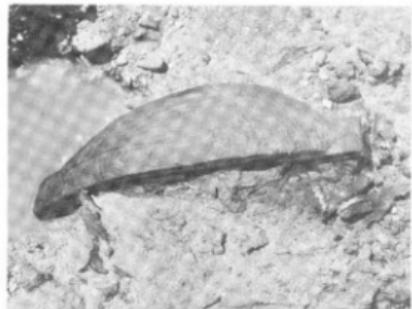
火器の一部

図版25図



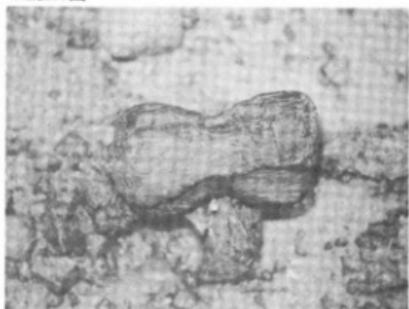
盆の一部

図版26図



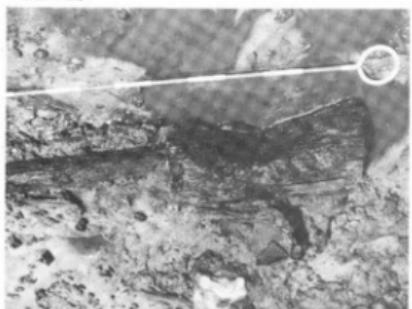
盆の一部

図版27図



槌の子

図版28図



加工台？

図版29図



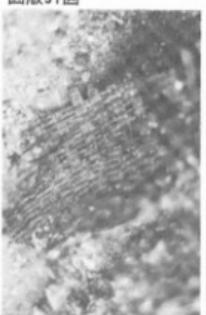
琴の一部？

図版30図



遺構にかかった土器式土器

図版31図



竹細工具

図版32図



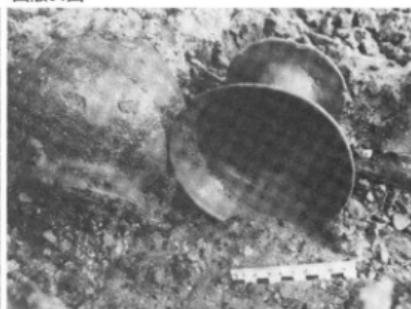
堅楠

図版33図



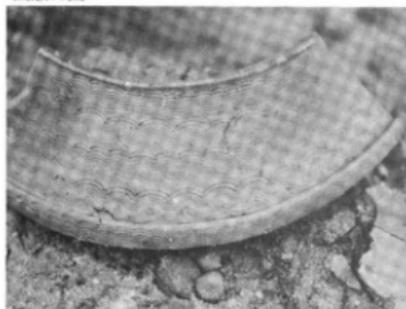
半裁されたヒヨウタン

図版34図



土師式土器

図版35図



弥生式土器

図版36図



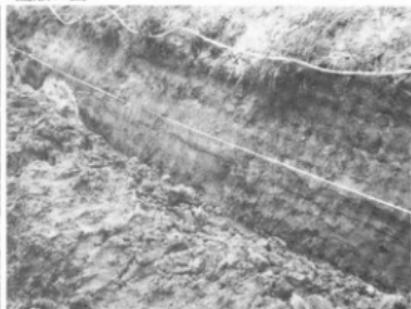
土師式土器と須恵器

図版37図



土師式土器

図版38図



S面セクション

図版39図



旗立地区のA区、B区実査状況

図版40図



図版41図



A区P.D.-I出土の石包丁小  
ピット列が手前に見える

図版46図



旗立B区のP.D.-Iの造構

図版42図



旗立 A 区 P D - 1 の遺物

図版43図



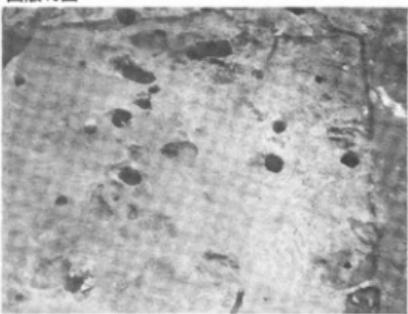
旗立 B 区の P D - 5

図版44図



旗立 B 区 P D - 5 の完掘

図版45図



旗立 B 区の P D - 4 の遺構

図版47図



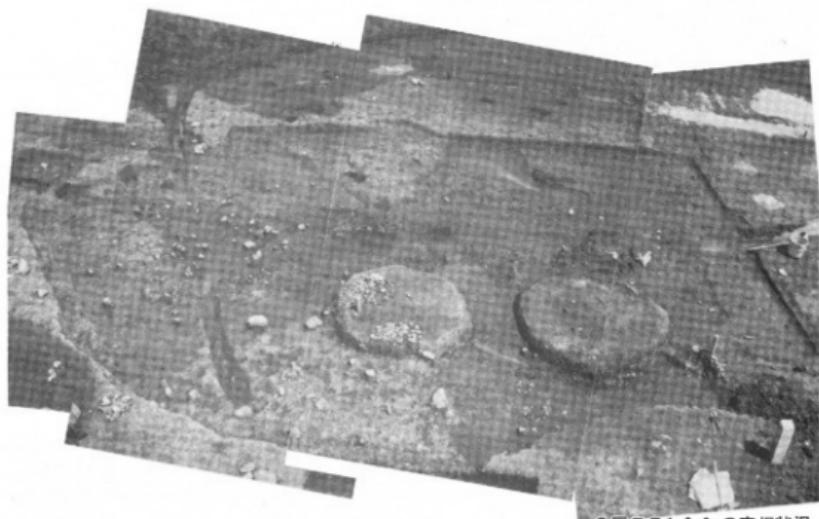
旗立 B 区、 P D - 3 の遺構

図版48図



旗立 C 区、 P D - 1 の発掘中

図版49図



C区PD1.2.3の完掘状況

図版50図



旗立C区PD-1の遺物

図版51図



旗立C区PD-1の完掘

図版52図



旗立B区のPD-5の  
柱穴より出土した砾石

図版53図



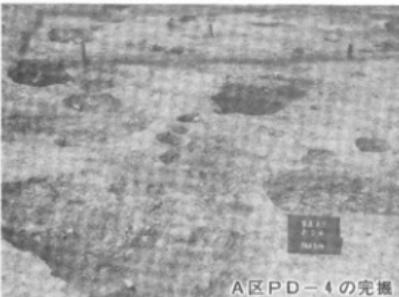
同遺構より出土された石包丁

図版54図



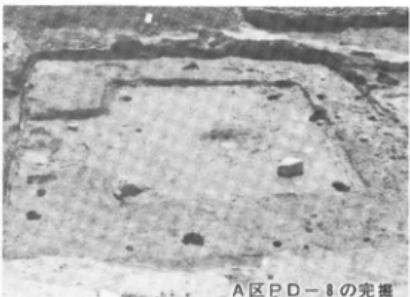
筋違地区の全景

図版55図



A区PD-4 の完掘

図版56図



A区PD-8 の完掘

図版57図



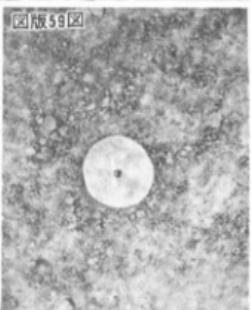
S位置の残石付近で出土

図版58図



N位置の残石付近で出土

図版59図



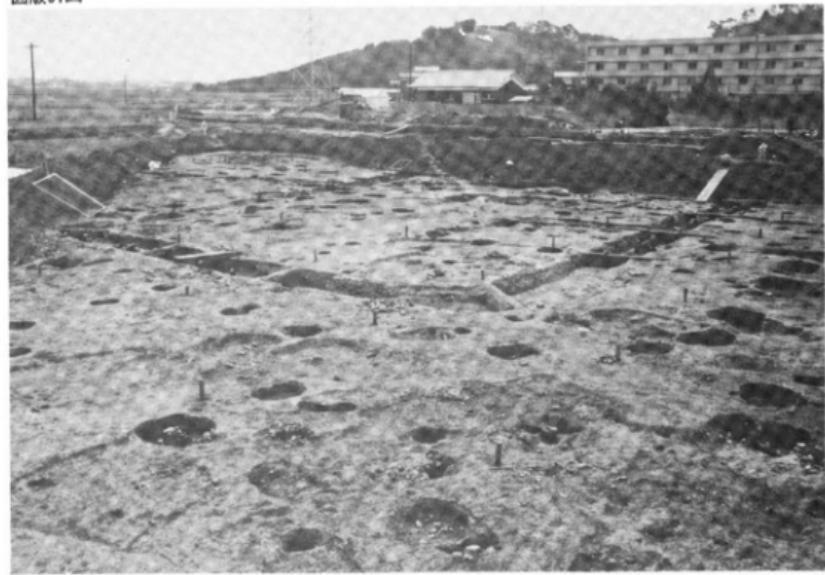
櫛立柱式建物の柱穴から出土した有孔滑石

図版60図



筋達B区P D-1、南より撮影

図版61図



図版中央の溝はCとDの角

図版62図



筋違B区発掘前の全景

図版63図



B溝とP D-4、西より撮影

図版64図



D溝を南より撮影

図版65図



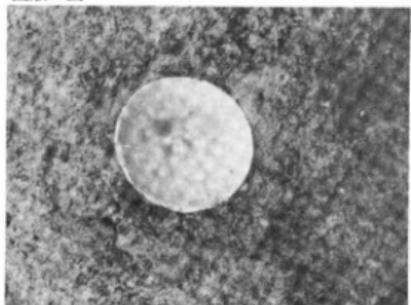
P D - 1 付近の掘立柱式建物址と溝

図版66図



筋違 B 区 P D - 5

図版67図



D 溝で発見された青磁

図版68図



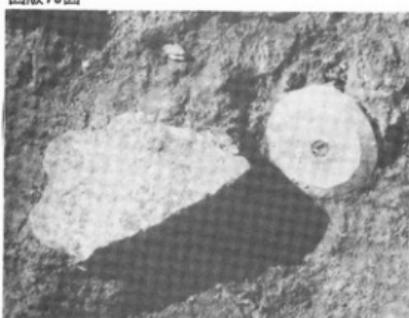
B 区 拾張区で発見の鉄器

図版69図



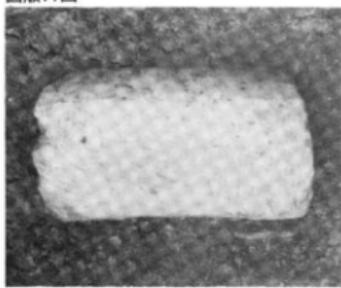
木棺直葬墓と出土遺物

図版70図



紡錘車

図版71図



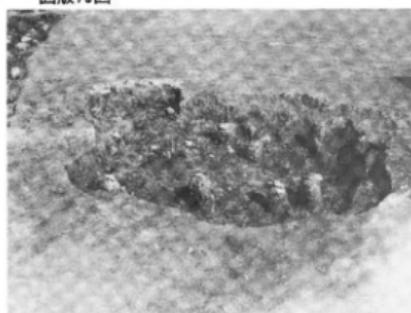
石枕

図版72図



土塙墓と副葬品

図版73図



木棺直葬の上層部

図版74図



木棺と副葬品

図版75図



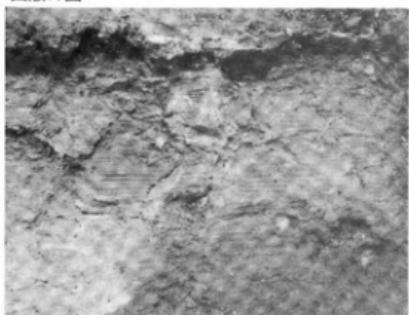
木棺のタガの跡

図版76図



火葬骨を出土した遺構とその下の木棺墓

図版77図



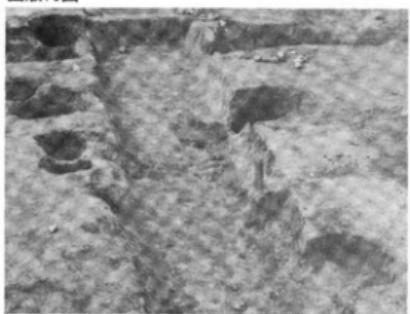
木棺下部の接写

図版78図



火葬跡に残された骨片

図版79図



D溝

図版80図



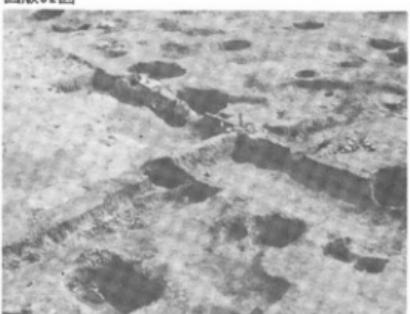
D溝の埋戻し

図版81図



A溝とB溝の交叉点

図版82図



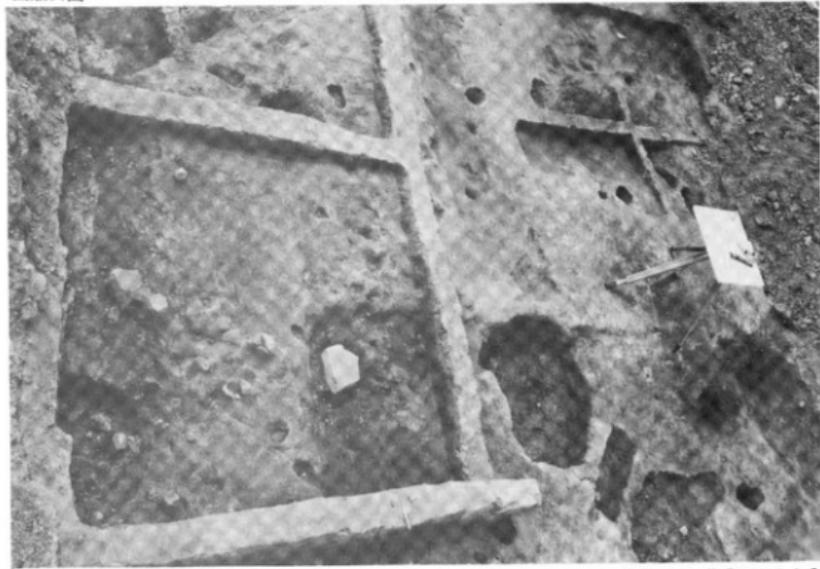
保存のため埋戻 A溝とB溝の交叉点

図版83図



北下地区全景 平板のところがPD-5

図版84図



PD-5、作業石がみえる

図版65図



P D - 1 完整状況

図版66図



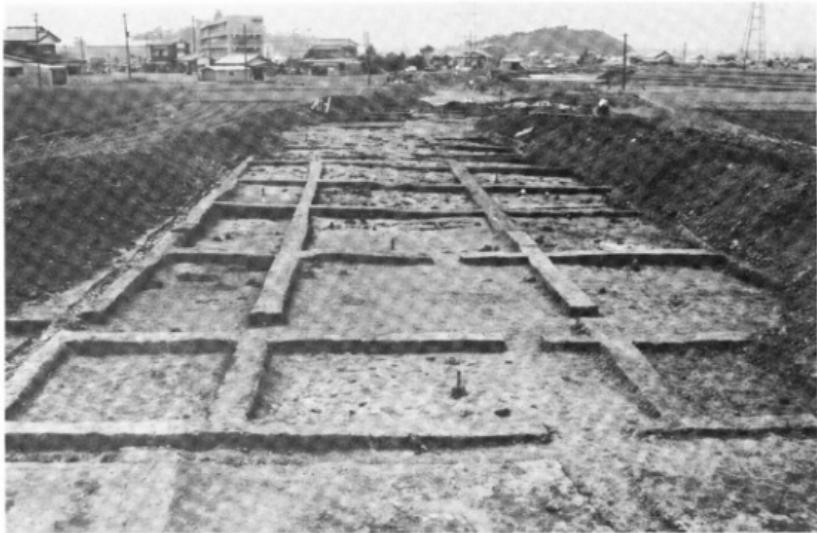
据立柱式建造物址、一部柱を抜き取った穴が見える。

図版67図



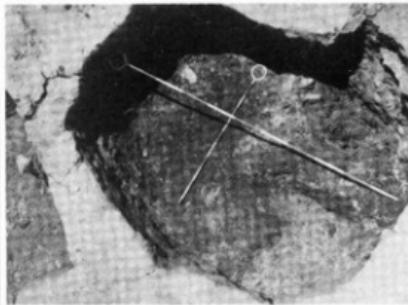
P D - 2 の完満

図版88図



北下C地区

図版90図



北下地区  
P D - 5 の土壙

図版89図



北下地区, 長頸壺 (C区)

図版91図



須恵器 (C区)

図版92図



北下B区・PD-2

図版93図



北下B区・PD-1

図版94図



北下B区・PD-1

図版95図



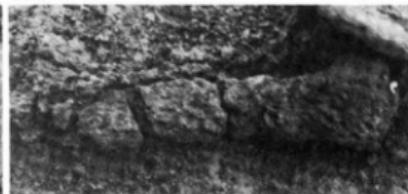
北下B区・PD-2

図版96図



北下地区A区PD-1

図版97図



北下A区PD-1の縁

図版98図



手前のシートのあるところは旗立A区、後方は北下地区

図版99図



後方は北下地区、手前常堀A区

図版100図



常堀B区



C区の掘立柱式  
建造物址

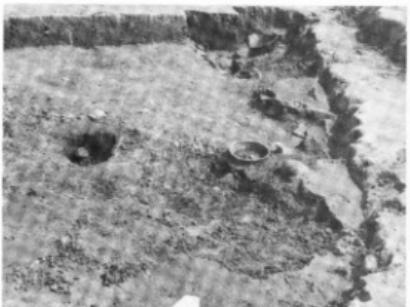


常堀B区より  
C区を見る



B区の掘立柱式  
建造物址

図版104図



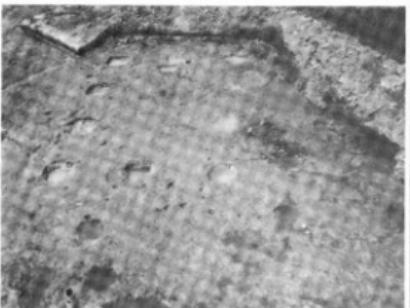
B区PD-1

図版105図



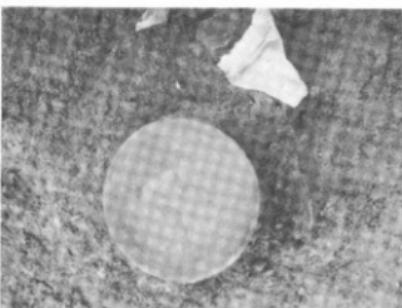
C区pit 1の遺物

図版106図



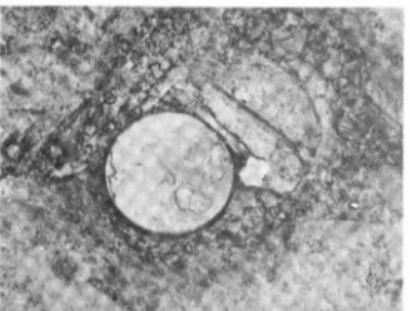
常塙C区の掘立柱式建物址

図版107図



常塙B区出土の瓦器

図版108図



乃万裏の梅花鏡

図版109図



図版110図



農免地区全景後方の住宅付近が乃万の裏

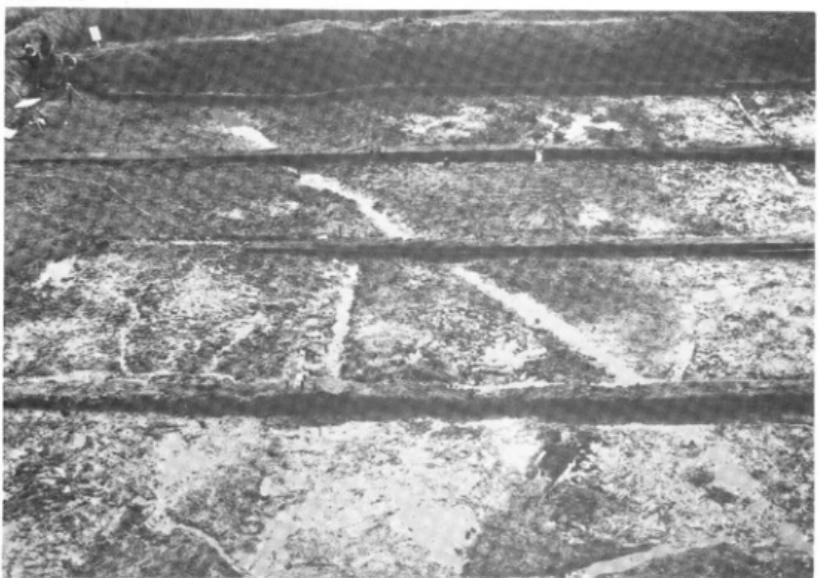
図版111図



1 農免地区での出土遺物

2 枝松6丁目の竪穴式住居址

図版112図

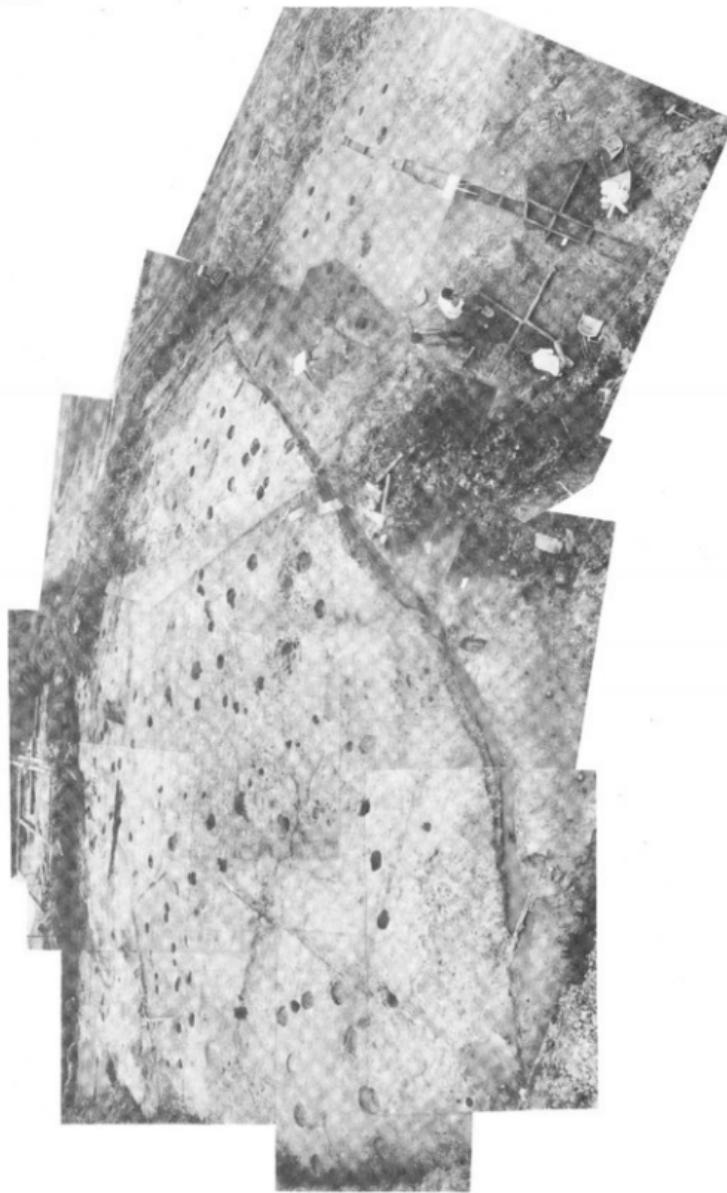


農免地区、溝状造構

図版113図



枝松地区の全景



挖掘区全景 (枝松 6 丁目)





T737



T222



T752



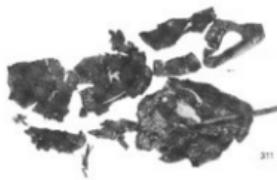
T404



T1338.2



T1485



311

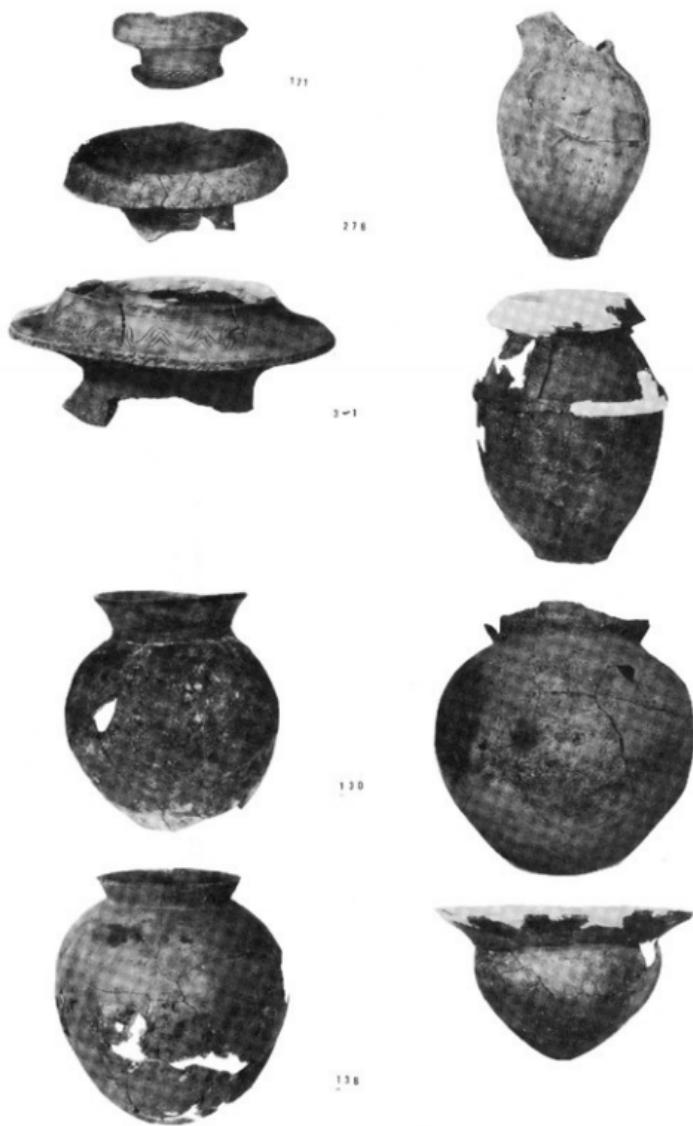


284.75

364



5427.8

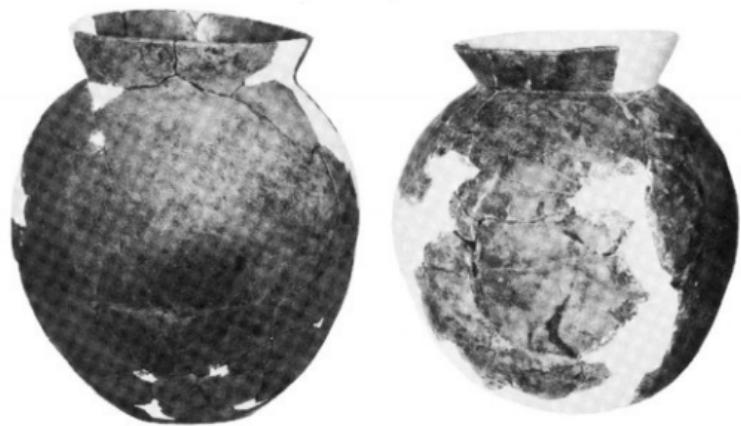




A - 4









松山市文化財調査報告書 第7集

埋蔵文化財発掘調査概報

昭和50年3月31日

編集 松山市教育委員会社会教育課  
行 松山市教育委員会

松山市二番町四丁目

TEL 48-6600~6603

印刷 四田印刷株式会社